

読者が創る新しい性風俗誌

奇譚クラブ

1982年

昭和57年9月1日発行(毎月発行)第一巻第7号

奇譚クラブ

昭和57年9月1日発行(毎月発行)第一巻第7号

9

特集・懐かしの奇ク嬢たち



1982年

9月号



雑誌02805-9

定価1000円

(株)きたん社発行

奇譚クラブ9月号目次



競艶SMイラスト.....	(3)
特集・懐かしの奇ク嬢たち.....	(11)
生人形地獄⑥.....	(20)
女獣飼育③.....	(31)
狐顔をした女からの手紙.....	(36)
蜘蛛と蝶々②.....	(46)
淫縄狐火街道④.....	(54)
SM天国飛び歩る記.....	(62)
涼子繚乱.....	(70)
レスポスの園.....	(77)
SMクラブ探訪記.....	(78)
あぶ派紳士録.....	(80)
倒錯への道.....	(82)
特集・旧号読者投稿作品②.....	(84)
読者ポスト.....	(144)
投稿規定.....	(147)

投稿規定

〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニマル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会

S M イラスト 真夜中の淫盗



桐丘裕詞・画

S M イ ラ ス ト 美 食 の 散 ら し 紋



山崎無平・画

SMイラスト 淫縄秘貝責め



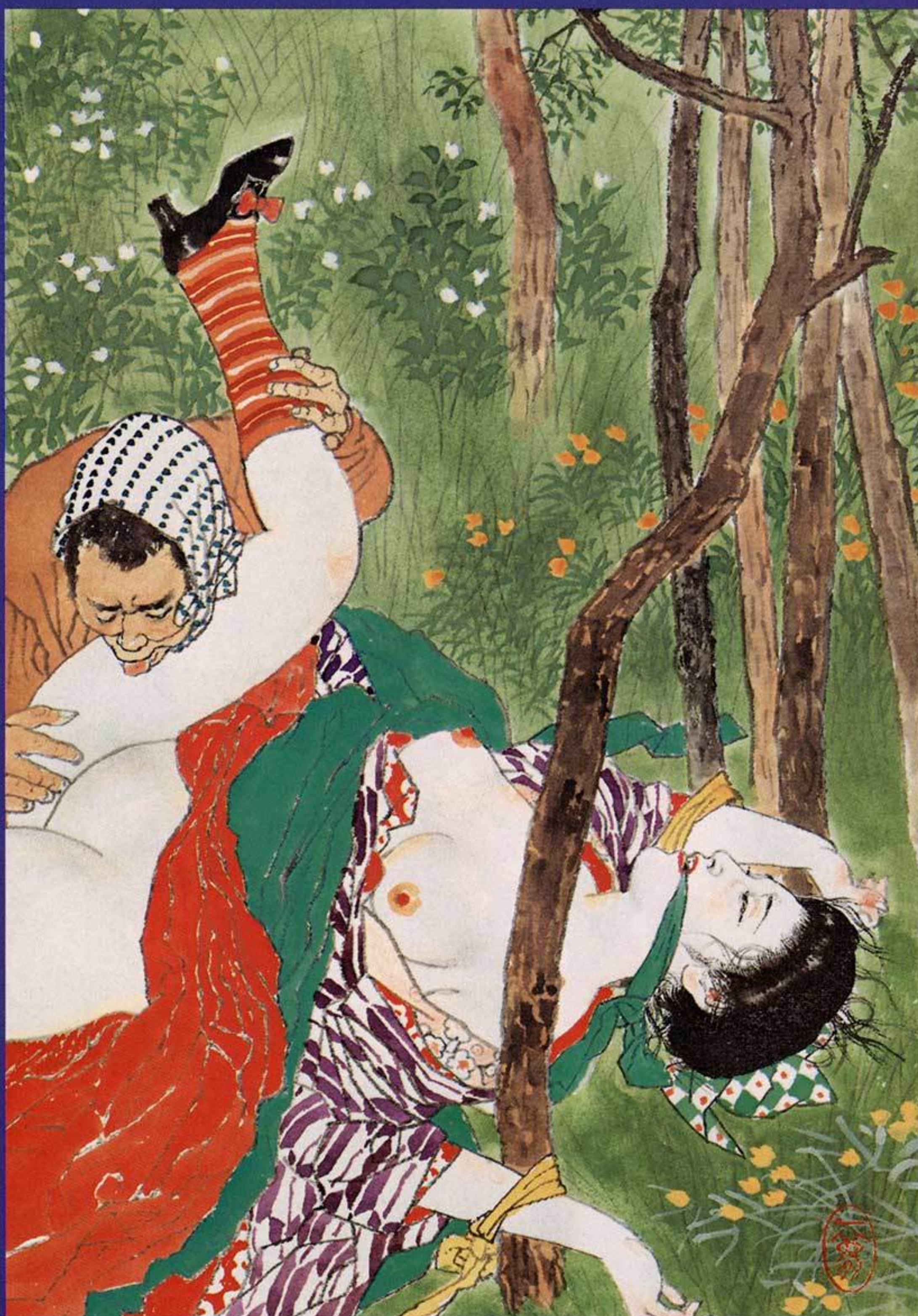
須磨れい子・画

SMイラスト 牝犬調教所



江戸川重郎・画

SMイラスト 緑陰の屈服



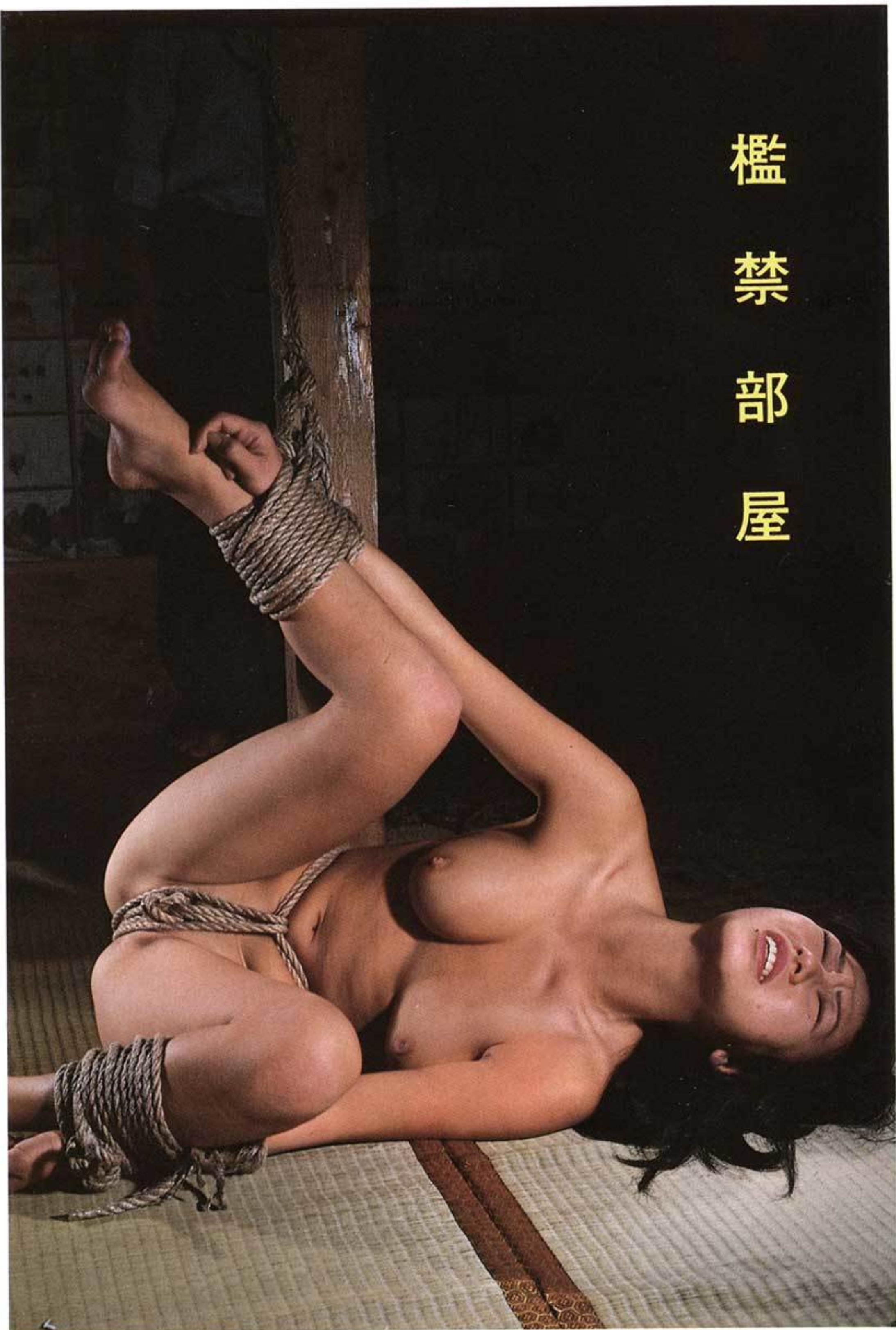
小日向一夢・画

S M イ ラ ス ト 悲 慕 連 腹



鞘 和彦・画

檻
禁
部
屋





倒立する風景

特集・懐かしの奇ヲ嬢たち

緑に包まれて

〔本誌特写〕

陽は真上から照らしていたが、林の中はうす暗かった。
ケーブル一枚を纏っただけの那美子嬢は観念の眼を閉じて
素直に後手に縛られた。

村田那美子嬢





モデル 萩 千恵子





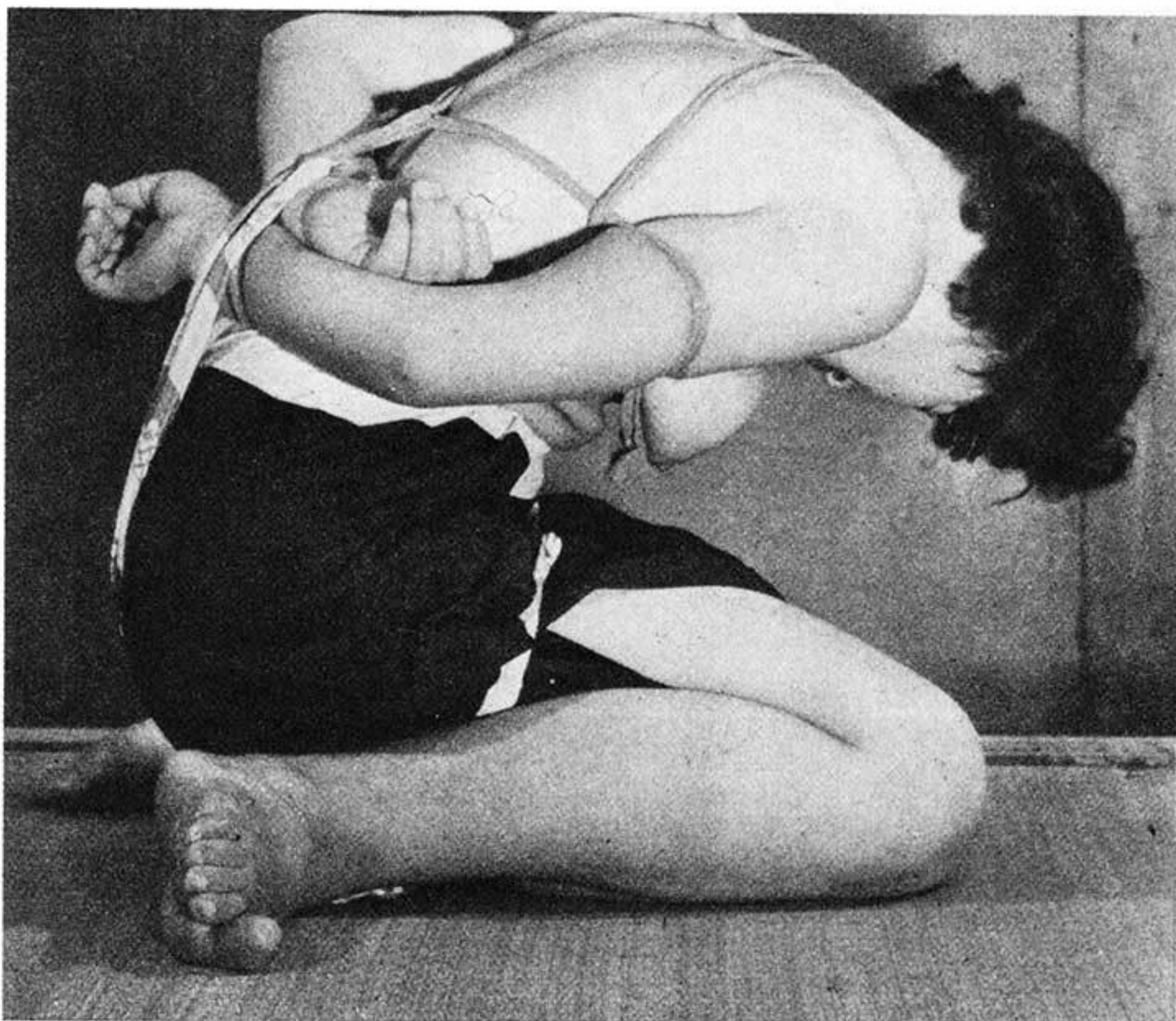
萩 千恵子嬢

緊
縛
ポ
ー
ズ
集



村田那美子嬢

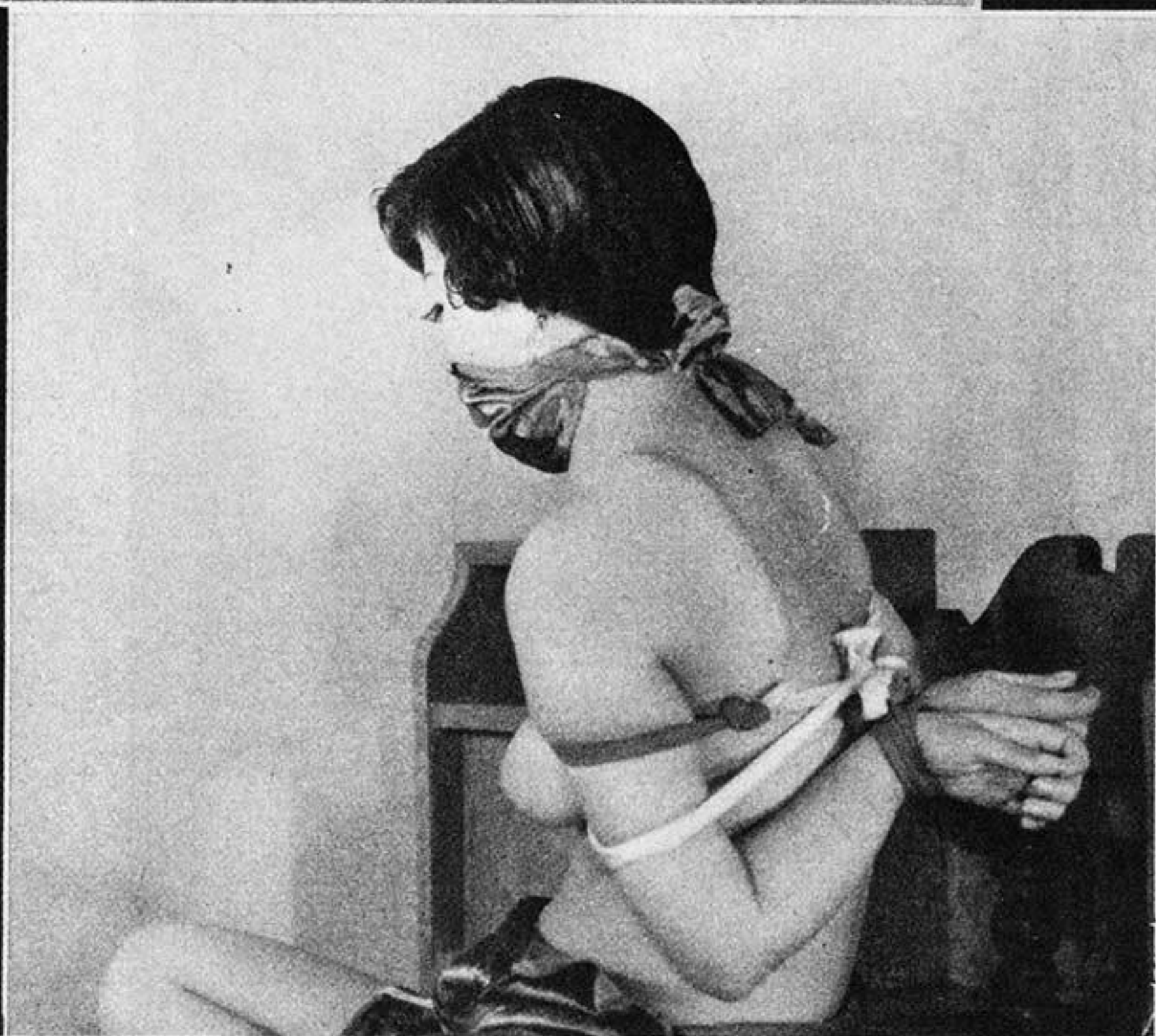
腰
卷



紐
による
幻想

くびれ 川辺砂登子嬢

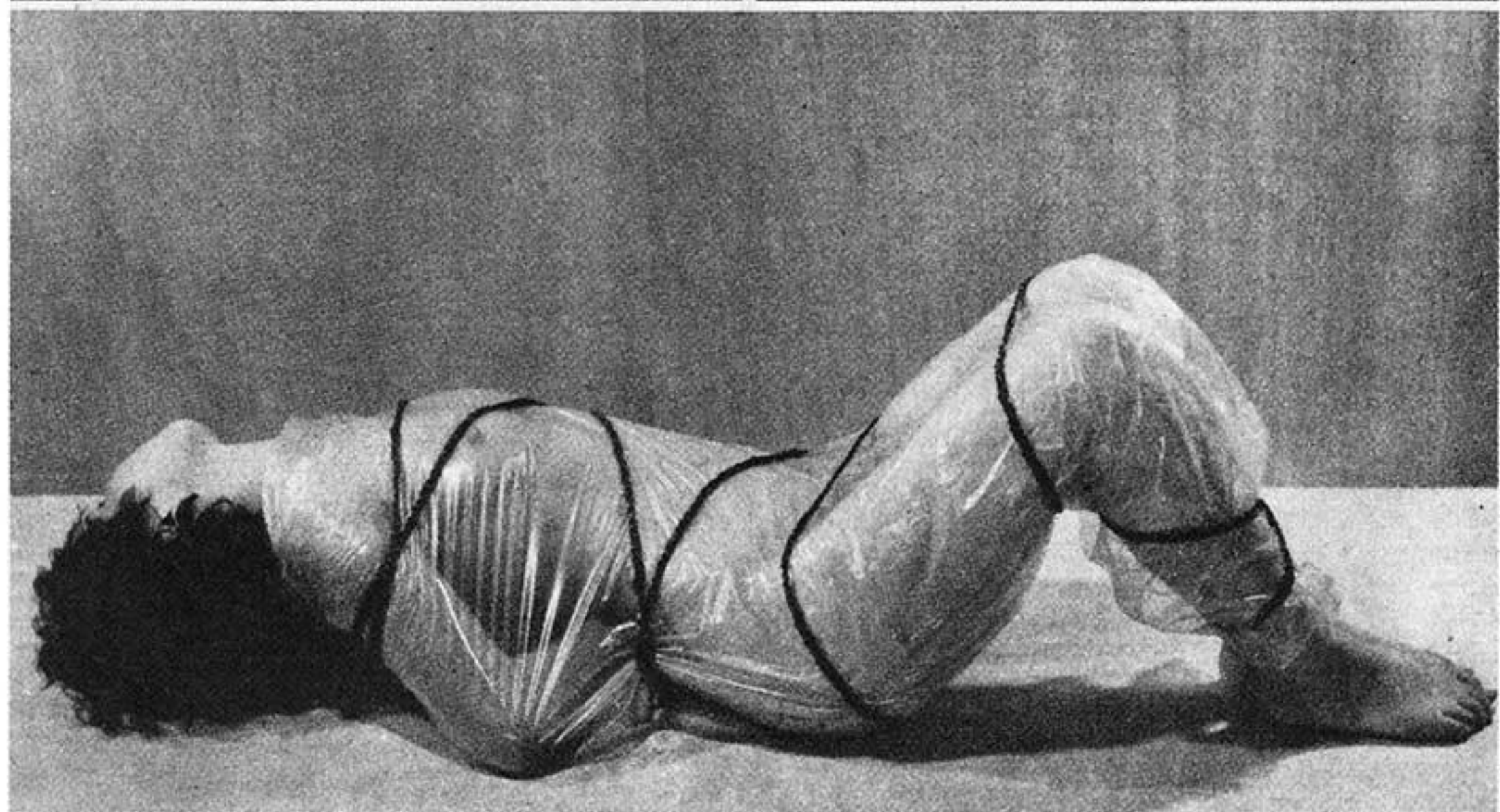
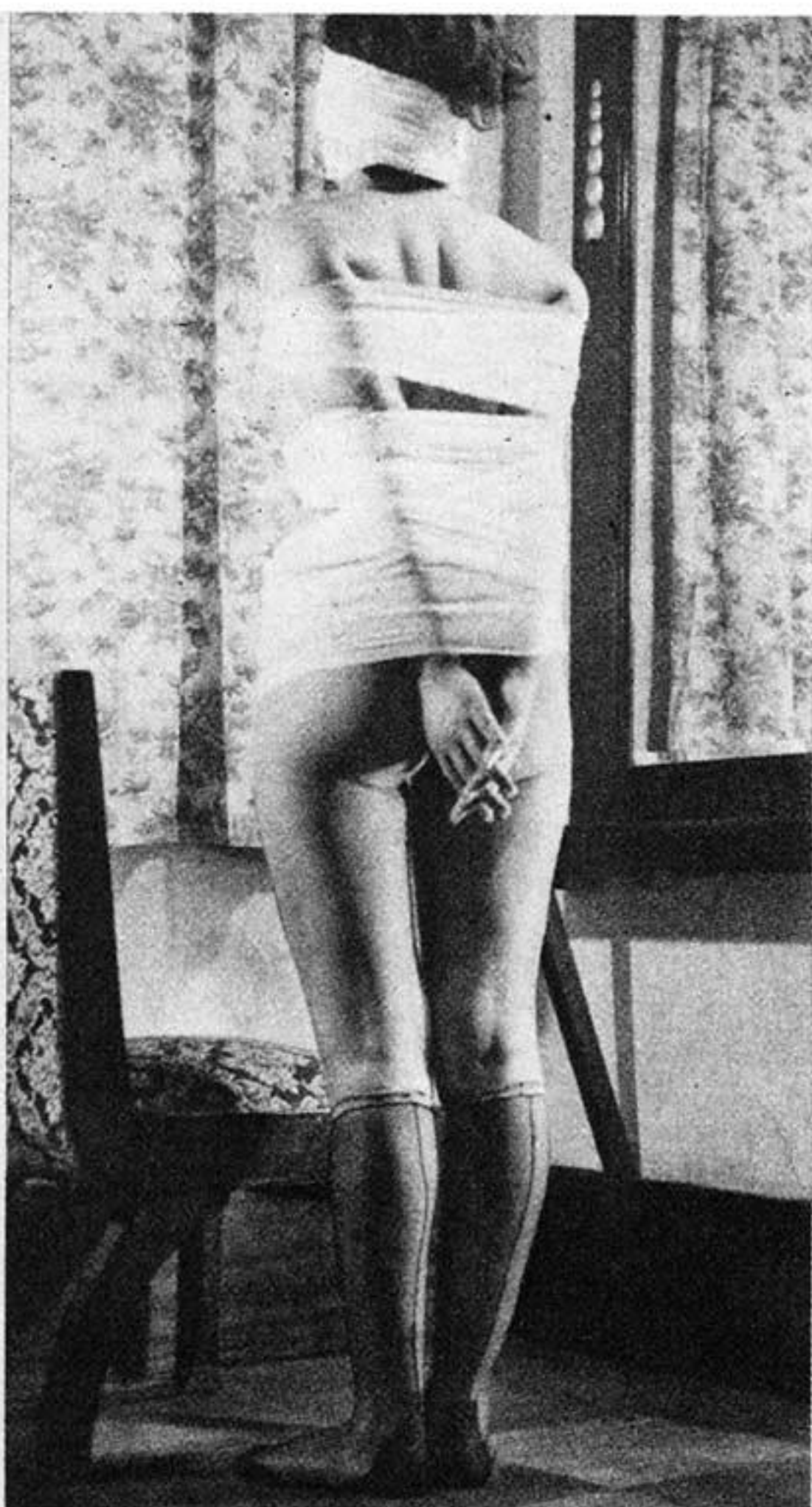
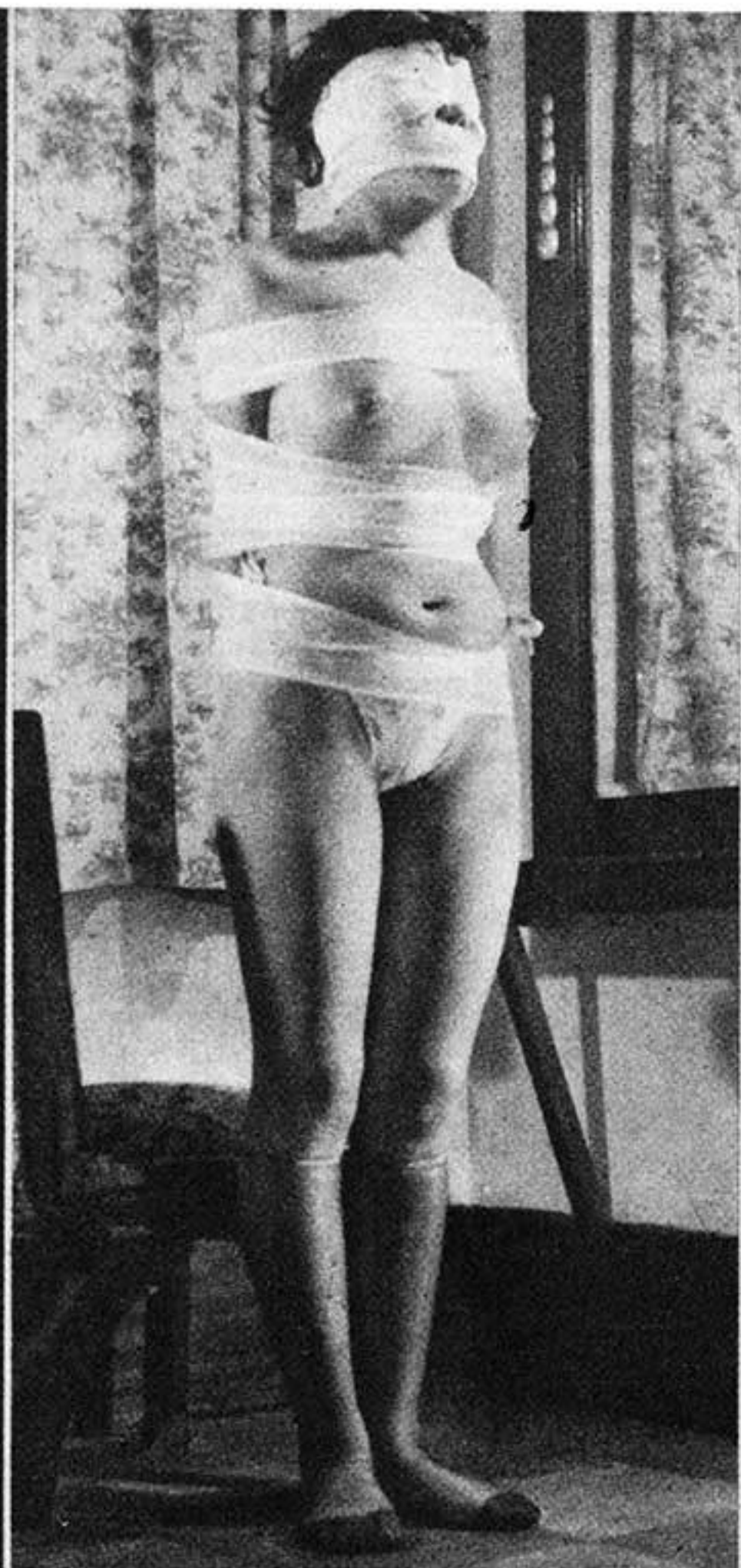
光沢 中富綾子嬢





縋帶

伊吹真佐子嬢





馬乗り

春伊 日吹 二嬢名コンビ 写真

全く、これは勇ましい。誰か、この下敷きにしてほしいという希望者はいませんか。





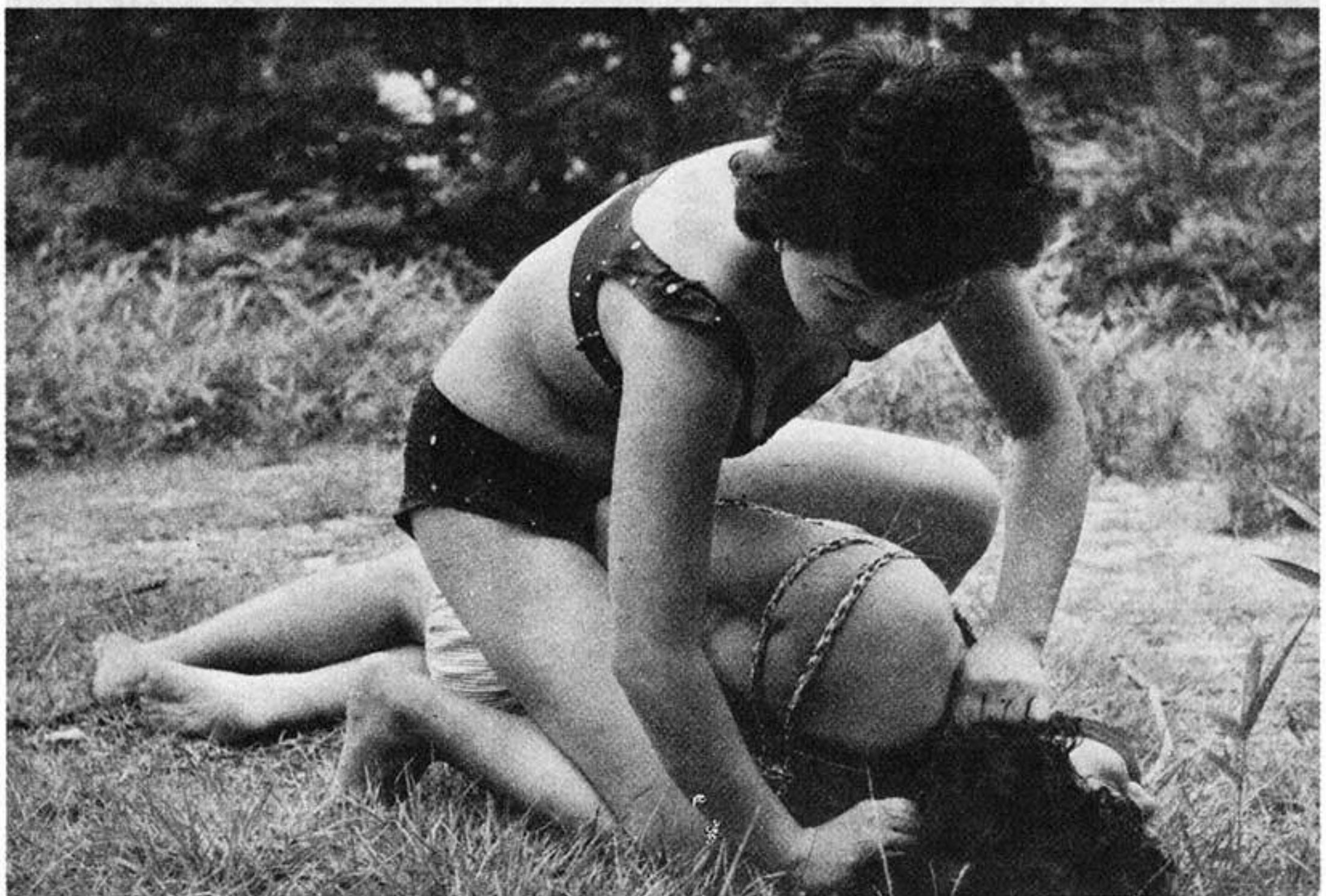
後手を合せて縛る、草の芽がお腹にさゝって痛いといってもきゝません。

縄は胸へ二巻、三巻と締められてゆく、起き上ろうとするのを押さえつける





頭をお尻で押えつけられては、いくら足をバタバタさせても追いつきません。
縄尻を始末すると、ぐっと乗りかゝって猿ぐつわをかませます。





奇譚クラブ

1982年9月号

美利可実業

生人形地獄

美保戸 実彦

あらすじ

龍二郎は名家の生れながら身をもちくずし、女郎屋・天狗楼の女術をなりわいとしている。

父親の代に親交のあった須黒男爵は龍二郎の常顧客であり、龍二郎は男爵から特別待遇を受けている。

男爵邸におもむき男爵が折檻中の奥女中小夜を囑るのを手つだい、美肉のごしようにばんにあずかる。

帰り際、屋敷の玄関にうづくまる乞食の娘を捕えて天狗楼につれ帰るが、父親は乞食姿に身をやつして仇討ちを企てていた土族の者。娘の姉はなんと天狗楼の女郎に身をおとしており、ちようど不都合があつて主人より折責を受けているところだった。



剥き出しにされた秘所の艶

男爵は枕元の電気スタンドの笠を取ると、それを松明のように頭上高々とかかげた。

「む、無体なッ……おやめになつてッ」

敦子夫人は白い頸すじをキリキリよじつて人の字形に縛りつけられた半裸を激しくうねらせた。これまで房事は常に闇の中で行なわれて来た。夫が望んでもほのかな明りでもともしことは許さなかったのだ。男女のことは血筋を断やさないための行為で、それ以上のことに及ぶのは、みだらなこと、下司の行ないと教えられてきた。それがいま、縄を打たれて浅間しい恰好にされた身を、まばゆいばかりの明りの中に曝されたのだ。

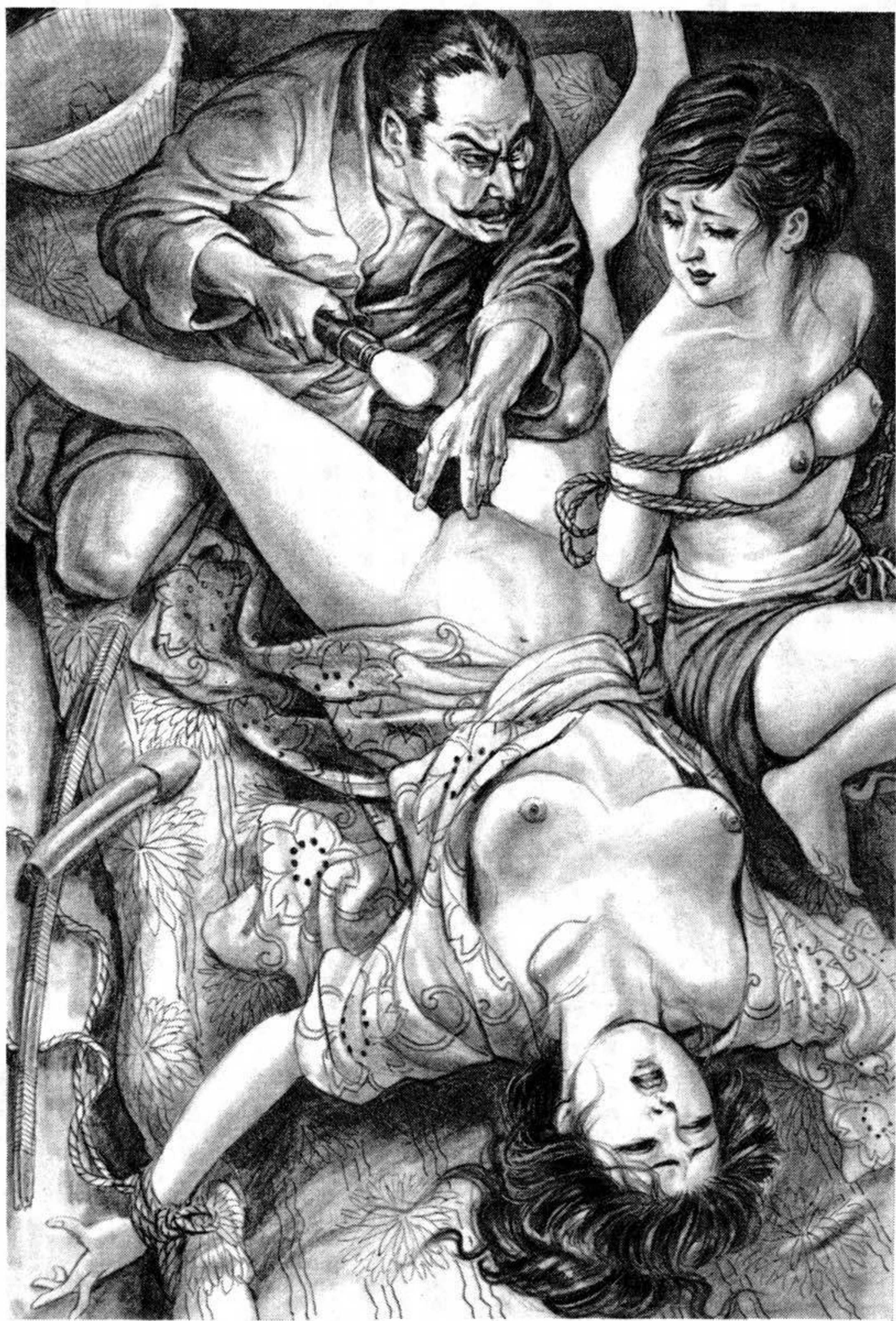
男爵にとっては、それこそが今日まで望んで果されなかったことだったのである。夫人の意志に易々諾々と従ってきたのも、主筋に

当る子爵家をはばかつてのことであつた。が、老子爵がみまかった今となつては、はばかり者は誰もいない。髭の口元が自然にほぐれ、スタンドをかざす手が昂ぶりに慄える。

男爵は縁なし眼鏡を無気味に光らせながら、手にしたスタンドの明りで舐めまわすように、はじめて見る妻の素肌を見降ろした。

日の光をぢかに受けたことのない肌は透けるように白く、それが屈辱の汗を噴いてしつとりうるおったさまは、あたかも支那渡りの高価な白磁を見るようだ。それが女らしい柔らかな陰翳をたたえてうごめいている。これまでは美術館の陳列棚にガラス越しに眺めることができるだけだったものを、ぢかに手にとっていじりまわし、心ゆくまで味わうことができると思うと、自分の妻でありながら、新鮮な欲望がフツフツとたぎりたってくるようである。

男爵はスタンドをかかげつつ、右手で練絹



の寝衣の胸元をさらにはだけ、縄目の間から子を生んだことのないふくよかな乳ぶさを引き出した。根を上下から引き絞られた乳ぶさは、蒼い血管の網の目を透かしてねっとりとし、耀き、頂点の淡い桜色の乳量を粒立たせている。乳首は処女のように小さい。

男爵は大きな掌いっぱい握んで、ゆっくり味わうように揉んだ。弾力のある量感がしっとり吸いついてくるようだ。闇の中で手探りしていたのにくらべると、別の女をもてあそんでいるようなおもむきがある。

「どうだ敦子、お前のちちは人一倍敏感だったはずだが、こうして縄で締め上げられてなぶられると、さらに感じるだろうが」

男爵は白い喉を見せてのけぞったまま、屈辱に喘いでいる妻に呼びかけた。

「……おゆるし下さいまし……いましめをほどこいて……」

「ならん」

ひとときわきつく乳房を握み締めながら、男爵は薄笑った。

「今夜はすべてを見てやるぞ。覚悟するかい」

手を帯にかけて手早くゆるめていく。

「そ、それだけはッ……小夜の前で、そ、そのような無体なことだけはッ……」

「小夜だってみんな見せたではないか」

長くほぐれた帯を抜き取って、ゆるんだ寝衣の前を大きくはぢけた。雪のように白い腹が剥き出しになった。縦長のかたちよい臍のくぼみが深い影をつくって、せわしく息づいている。そこを撫でさすりながら、今やたった一枚身につけている淡い水色の腰巻きの紐をゆるめにかかる。

「これまででは、わたしとまじわる時でも、素っ裸になろうとはしなかったが……」

「おゆるしをッ……お情けでございませッ」

「泣けい。もっともって涙を絞ってやるわ」

男爵はスタンドを畳に置いて、腰巻きを両手でズルズルと引きはぐった。布団の幅いっぱいにはだけられた下肢の脛があらわになり、ついで太腿までがのぞけた。

「それ、もうひと手縛りで、素っ裸だぞ」

「ヒイッ」

「お小夜が眼を丸くして見ておるぞ。それ、もっと泣きわめかんか」

「お、おやめ下さいましッ……ゆるしてッ」

絹地が腰の下からズルズルと引き出されてゆく身も細るような羞ずかしさに、敦子夫人は髻をグズグズに崩してのけぞりあがり、腰をガクガクゆさぶりたてる。死ぬほど羞ずかしい所を曝し上げられるというのに、それを

隠すこともできないみじめさに衝き上げられるのだろう。

そして、ひととき高い悲鳴と共に、腰巻は引き抜かれ、まばゆいばかりに白い腰が剥き出された。ほかほかとした絹の温もりに守られてきた部分が外氣と男の眼にじかにさらけ出されて、チリチリすくみ上がった。

敦子夫人はシートに頬を埋め総身をよじって号泣した。この世にあらうとも思えぬ屈辱この身が露と消え果ててしまわぬのが恨めしい羞ずかしさであった。

ふたたびスタンドを手にした男爵は、ただでさえ羞じらいにおののく股間を、あかあかと照らし上げた。

「小夜、遠慮することはないぞ。奥さまの裸をとくと見てやれ。公卿の血すじを引いているといっただけ誇っている女の裸だ。平民のお前とどこが違うか見てやれ」

「い、いけません、小夜、見てはなりません」

敦子夫人は呻くように口走った。

「なにかもうもんか。縛られていることでは平等だ。アカの連中だってこれほどの平等は得られるもんじゃあるまい」

口でからかいながらも、眼鏡の奥に光る男爵の眼は針のように鋭くなって、夫人の美身をまさぐっている。

抜けるように白い下腹にふっくり盛り上らせている艶っぽい纖毛のかたまり——それは優しくもつれ合って、いかにも育ちのよさそうなおとなしやかな逆三角形をつくっている。そしてそれがふたつに分れて股の奥に消えてゆくあたりに、うっすらと縦割れがのぞいている。男爵はその部分をまともに照らし上げた。



淡紅色と
すみれ色
との合体

「わしのを啜えてまんざらでもない声を出していたものを、はじめて見たぞ」

「ヒューッ」

腰を揉みたてながら、敦子夫人は声を絞って泣いた。

「色といいかたちといい、さすがに上品だ。」

高崎も感心したろう」

「やめて下さいましッ……これ以上の辱かしめは……」

「なに、まだ序の口よ。ほれ、こうされたら何と云う」

男爵は柔らかな陰毛を梳くように掻き上げて、ふっくり盛り上った肉の合わせ目を剥き出しにすると、拇指と人差し指で挟り出すようにして拵げた。

「ああッ」

「×××××を剥かれて、明りにさらされているのがわかるか。スースーと風が体の奥まで入ってくるだろう」

「やめてッ……ああ、おやめ下さいましッ」

「実まで見えるぞ。ホレ、これだ」

グイと根まで剥き上げられて、敦子夫人は気がとおくなつた。錯乱した意識の中に、すっかり露出させられた肉のかたまりのうずきだけがなまなましく伝わってくる。

「意外と大きいな」

光をまともに受けて、ヒクヒクうごめくのを、男爵はしげしげ眺め入った。瑪瑙の小粒を嵌め込んだ実のすぐ下からふたつになった分れた贅が、ねっとりとした淡紅色をはみ出させ、それがふたたびひとつに合わさってとぎれるあたりに、すみれ色の菊の蕾が小さくつぼまっている。それを左右から囲む下肢の付け根の白さと対照的に、肉の花が開いた感じである。

男爵はスタンドを悶える下肢の間に据えて両手でもてあそびにかかった。贅の奥まで拵げて男を啜え込む肉の入口を確かめたり、贅をこすり合わせるようにいじりまわしたり、核をむいたりかぶせたりして、その慄えつつ次第に勃起してくるさまを見守ったりした。

たしかにそれははじめにくらべると倍も大きくくなって、剥かなくても先端をのぞかせるようになった。すり合わされる贅のあわいからも、ねっとり光るものがしたりはじめている。おゆるし、おゆるし、と口走り続けるその声も、昂ぶりに慄えがちになってきている。

「いじりまわされて感じだしたな」

男爵はふたたび大きくくつろげて、光を増した奥を覗き込んだ。

「わしの大きいのを啜え込みたがって、この肉をヒクヒクさせておる」

指をさしのべて、小口を突つついた。

「あ……」

夫人はガクンと腰を衝き上げて、キリキリ唇を噛んだ。

「欲しいのか」

「……お、おゆるし……」

ツンツン小突かれて慄えだしながら、敦子夫人は舌足らずの声をあげる。

「実をいじってやろうか」

「ああッ、そ、そこはッ……いけませんッ」

「お前はいつも『いけません』だ。亭主に体をいじらせるのは妻の務めではないか」

男爵は左の指を二本そろえて肉の口を浅く挟りながら、右の拇指の腹で、剥き出しの実

を擦り上げた。

「ああ、そのようなことを……」

耐え切れずに腰を振りたて、肩をゆすりたてつつ、夫人は き声を洩らしはじめた。

「ほら、お小夜が聞いているではないか。すこしはこらえろ」

「ああッ……いやでございますッ……ゆるして……」

声がうわずりおののき、ふとよがり泣きを洩らすさまは、闇の中で喘ぎさえはばかりうだった夫人とは別人のようだ。すべてのつつしみを剥ぎ取られて女の本性を剥き出しにした感じであった。

「結婚のはじめからこうしてわしの思いのままにさせておれば、夜ごとこの楽しみを味わせてやったものを」

「た、たのしくなんか、ございませぬッ」

「フフ、まだ素直になれんか。体の方はこんなに濡らしておるのに」

「やめて……ひ、ひど過ぎますッ」

「股の奥まで見せていながら、まだ言うか」

男爵はせせら笑いながら、すぐそこに顔をそむけて慄えているお小夜を引きずり寄せた。
「さあ、お小夜、奥さまの××××をようく見ろ」

「ヒィーッ……いやですッ」



奥さまの悲鳴に、お小夜は顔をそむけた。それをグイと正面に捻じ向け、髪を掴んで夫人の股ぐらに突きつけた。

「どうだ、奥さまの××××はビショビショに濡れているだろうが」

「だめよ、小夜、見てはだめッ」

屈辱に真っ赤になって、敦子夫人はわめきたてた。が、お小夜は男爵の奴隷になりさがつていた。言ってみると頭をゆさぶられて、

「……濡れて、いらっしやい、ます……」

蚊の鳴くような声で言い、ああッと身を揉んだ。

「聞いたろう。女中が証言しているぞ。須黒男爵家の令夫人ともあろうものが、縛られて股ぐらをいじられて、気分を出しているとな」
「ああッ」

夫人は身を反り返して号泣した。二十八歳の熟れ切った体が、長い間かまいつけられなかった不満のはけ口を、ようやく見つけたとばかりうごめき出すのを、どうしてもこらえ切ることができないのだ。

男爵はお小夜のいましめを解いた。固く小さな乳ぶさを揉んでやりながら、口を吸った。お小夜は立ちこめる淫風に当てられたように為すがままだ。舌をきつく吸われると、喉を鳴らして細い腕を男爵の首に巻きつけた。

「一緒に奥さまをなぶってみるか」

頬ずりされながら、トロンとした眼を奥さまのみだらに濡れそぼった秘所に向ける。その眼の前で、男爵はそこを開いて見せ、実を剥き上げて、その充血ぶりを見せた。

「お小夜のより年を食っているだけに、貫録があるかな」

「やめてッ……な、なんてことをなさるんですかッ」

「××××を剥き出しにしていながら、ギャアギャアわめくな。女らしくシクシク泣いて見せろ」

男爵はお小夜の手を導いて自分の屹立を握らせ愛撫させながら、自分は夫人の実をゆつくりもてあそぶ。お小夜は時折自分の置かれた立場のおそろしさに打たれるようにブルツと身ぶるいしながらも、昂ぶりを眼元にあらわにして、奥さまの切羽つまったような身悶えに吸い込まれるように見入っている。



お小夜の
舌が鳴り
敦子狂乱

男爵はとろけだした肉を掻きまさぐるようにして動かしていた二本指を抜くと、蟻の戸渡りを這わして、その奥に濡れ光る菊の蕾に触れた。

「ああッ……そ、そのようなところをッ」

夫人はグンと腰をせり上げてブルブルと総身を波打たせた。

「そんな不浄なところを、さわらないでッ。いやですッ……いや……」

いくら叫んでも指の動きを制しられないと覚ると、敦子夫人は次第に声の力を失いながら、泣き悶えはじめた。

「フフ、どうだ乙な気分になってきたろうが。泣き声がずっと色っぽくなってきたぞ。上品に取り澄ました女ほど、尻の穴には弱いというからな」

「……ゆるして……」

喘ぎを切羽つまらせつつ、夫人は腰を揉みたて揉みたてむせび泣いた。汗を噴いた肌は磨き抜かれた象牙のように耀き、ボウと桜色に染め上げられて、女っぽさをムンムンするばかりに発散させている。お小夜までが魂を奪われたようになり、我を忘れて手にしたものをつかつかと握りしめていた。

「小夜、奥さまの実を吸ってやれ」

「そんな……おゆるしくださいまし……そんなことだけは……」

「やるんだ」

狼狽してわめきたてる夫人の股間に、頭を押しつけた。

「両手で剥き上げて、わしのを舐める要領でしゃぶるんだ」

「お、奥さま、おゆるし下さいましッ」

「いけません、小夜、そんなこととしては、ありませんッ」

敦子夫人は小間使風情になぶられる屈辱に耐え切れず金切り声をあげてもがく。が、ここでも男爵の命令は絶対だった。おゆるし、おゆるし、と泣いて詫びながら、両手で腿の付け根を押さえて、縦割れの頂点を抉り出し涙と共に舌をさしのべた。

「ヒイッ……いやあッ」

グンと腰をせり上げた夫人は、キリキリほつれ毛を噛んでのけぞった。

「いいぞ、その調子だ」

お小夜が憑かれたように舌を鳴らしはじめるのを見とどけた男爵は、ふたたび菊の蕾を揉みたてはじめた。

「や、やめて下さいましッ……もう、たえられませぬッ」

いやッ、いやッ、と頭を左右に振りたて、鬘もなにもクタクタにしながら敦子夫人は半狂乱に泣き叫んだ。

蕾を揉みほぐされてゆくに従って生じる妖しい昂ぶりと、お小夜が舐めしゃぶる肉芽から伝わる痺れとが一体となって、身も心も揉

み抜かれるような快感が体内を駆けめぐるので。

お小夜はそそけ立った恥毛に小さな鼻を埋めるようにして、チロチロと舌を動かした。奥さまの気もそぞろな泣き声と共に、そこがピクピク躍るようにうごめくのが、お小夜をさらにけしかけた。

（華族の奥方さまだって、ただの女なんだわ）
そんな想いが実感された。哀訴の泣き声が優越感をあおった。

男爵は、夫人の腰がお小夜の口技にたまりかねて上下にリズムカルな動きを見せはじめのを待って、蕾をまさぐっていた指に力を込めた。綿のように柔かくふくれ上った蕾はズブッと指頭を啜え込んだ。

「あ……」

ガクンとのけぞった夫人の蕾は啜えさせられたものをキリキリ食い締めて痙攣した。指を動かされると、さらに大きく反り返って、ヒイーと絶患せんばかりに喉を絞る。

男爵は捻じめるようにしながら、ゆっくり押し入った。ブルッ、ブルッと尻たばがおののき、呻きが押し殺した悲鳴に変わる。あぶら汗をドット噴き出しつつ、白裸がさらに反り返った。

「もう氣をやったんじゃないか」

男爵は指の根に伝わる痙攣するような収縮に顔を上げた。敦子夫人はぼうとした瞳を天井に向け、大きく口を開けて喘いでいる。縄で締め上げられた乳ぶさは、鳩尾に汗をためて、ツンととがらせた乳首を震わせている。

「お小夜、もう一度だ」

「あ、も、もうッ……」

ふたたび実を吸い込まれた敦子夫人は、白眼を剥いてあごを衝き上げた。男爵は指をゆっくり抽送した。小気味よい食い締めが、ヒッヒッと絞り出される息づかいとともに、指の根に伝わってくる。そしてその食い締めが痙攣にまで高まったと思うと、

「う、うむ……」

今度こそは、はっきりと断末魔の声を噴きこぼして、夫人はグンと弓なりになった。腹をせり上げてお小夜の顔を弾きとばさんばかりに腰を慄わせた。男爵の指は食い切りられるばかりに締めつけられた。

「すごい氣のやりようだったな。こんなに氣をやれるのに、今までは出しおしおしおって」

男爵はグッタリ伸びて荒々しい喘ぎに泣き声をまじえている夫人を見やりながら、尻の指を抜き取った。夫人はヒーと息絶えんばかりの悲鳴を洩らし、さらに深くシートに顔を埋めた。

「なかなかうまかったぞ、小夜。すごいよがりようだったじゃないか」

男爵はわずかに臭う指をシートで拭きながら言った。お小夜は赤く頬を火照らせて、なかば恍惚とした眼差しを奥さまに向けている。「次は本番だ。あの奥さまが男を啜え込んでどんなよがり声をあげるか、よく見ているがいい」



偽りの告白を強要される妻

白絹の寝衣を敷布団いっぱい乱し、その上に人の字形に全裸を曝している敦子夫人の姿は、氣をやったことで一層の美しさと色っぽさを増したようである。

快感に反り上るたびにズリ上った頭は、なかば敷布団からはみ出して、かたちもとどめずに崩れもつれた黒髪を畳にうねらせ、火照った貌をその中に埋めて喘いでいるさまは、みだらな中にも生まれつきの氣品とつましさをにじみ出させて、長年連れ添った妻ではありながら、あらためて眼を瞠る思いをさせる。

ほつれ毛をまといつかせてくつきり浮き出した細い頸すじ、柔らかな頬からあごにかけての線、糸のようにつぶった眼とかたちよい

鼻、喘ぎになかば開かれたおとなしい口元――

―どれも長年にわたって磨き上げられた公卿の血すじを物語っている。そしてその時には近づきがたくさえ感じられる美貌とは対照的に、引きはだけられた股の奥をしどろに濡れ崩れさせているところが、男爵にはこよなく楽しい眺めなのだ。

下級の娼妓でさえ、帯紐を取って客に素裸を見せることはないのに、今の敦子夫人はくろぐろと身をいましめる縄のほかは、身にもとうものを一切剝かれたうえ、下肢を裂けんばかりに開かされて、それを閉じ合わすすべすべしないのだ。そしてこうこうたる明かりの下で、死ぬほど羞ずかしい悦びの極まりさえ見せてしまった――

死んだようになってる夫人の裸身を、硬くふくらんだ乳ぶさ、絞光る腹、スベスベした腰、きほい立つ恥毛と、男爵は満足をこめて撫でまわす。ぼってりと程よく脂肪の乗った肉付き、しっとり掌に吸いついてくるシミひとつない雪肌、そのおのき。ようやくすべてを自分のものにしたという実感が湧いてくる。むっちり肉の緊まった太腿からかたちよく細まる足首へと撫で上げさすり下ろし、華奢な素足にまで達すると、夫人は小さく悲鳴をあげて、彫ったような足指を縮かまらせ

る。

耽美派作家だったら、狂奔しそうな美しい足である。桜貝のような爪を小さくつけていたぶりの手の中で小さくうごめく様子は、たしかに口に啜えてしゃぶりたいほどだ。

縮かまろうともがきまわるのを、一本一本強引に押しくつろげて、指根にかくされた柔らかな肌を軽く搔いてやると、夫人はたまらぬとばかり泣き声を洩らして、腰をもじつかせだした。

「性感帯をここにも隠しておったか」

男爵は土ふまずを爪で軽く掻きながら、指の間をさらにもてあそんだ。

「小夜、お前は左の足をやれ」

命じられたお小夜は裸の体をにじり寄せ、

いきなりその拇指を口に含んだ。

「やめて、小夜、い、いけませんッ」

敦子夫人は動転して金切り声をあげ、縛られた足首をよじりたてた。が、お小夜はそのつぶらな瞳を昂ぶりと敬慕の念に妖しく惑乱させながら、啜えた指を音をたててしゃぶっている。指を開いてその奥に舌をチロチロ這わせる。

「やめて……おねがい……」

「なんだ、その腰の振りようは」

男爵は足の裏を撫でながら、股間に手を伸

ばして柔肉をくつろげた。新たに熱を含んだ女液がトロリとあふれ出た。

「何だこれは、え？」

「……お、おゆるし……」

「足の裏をこそぐられたら、男を啜えなくなつたか。とすれば、高崎に口づけされた時も当然ここをこんなにしたわけだ」

夫人は足の指をピンと反り返したり、ギューと捻じり曲げたりして悲鳴をあげ続ける。足の指の動きと共に、くつろげられた奥の、ねっとりぬめりを含んだ肉が喘ぐように伸縮するのが見えた。

お小夜は一本一本たんねんに指を啜えてしゃぶっている。これまで湯上りの素足をタオルで拭ってさし上げながら果たし得なかった想いを、夢中でぶつけているようだ。

「小夜、もうよい。いつか心ゆくまで奥さまをおもちやにさせてやるから、あとはそこで見物しているがよい」

お小夜は名残りおしげに土ふまずに口づけすると、端近かに小さく裸身をうずくまらせた。

男爵は夫人のしらじらとはだけられた股の間に坐り、膝を夫人の太腿の下に差し入れた。夫人の腰は浮き上がり、男爵の逞しいのが、開き切って舌を喘がせている柔らかな肉と向

き合った恰好になった。左手にスタンドをかかげてその部分をさらに照らし上げつつ、男爵は右手をそえて、濡れそぼつ秘肉を下から上へと掻き上げた。

夫人は逃れようと腰を振りたてつつ反り返った。

「……かんにんしてッ……いやですッ」

「何を言うか。夫婦が夫婦のことを行なうのにやだとは何事か」

「小夜のしている前で、このようなことは……」

「フフ、まだ体裁ぶっているか。お小夜の舌であれほどよがり泣きしおってからに」

「やめて、小夜を次の間にさげて下さいましッ」

「二人だけの水いらずで、心ゆくまで楽しみたいというのか」

「おねがいでございますッ」

「ならん」

男爵は手にしたもので、ヒタヒタと秘肉をたたいた。ヒッヒッと喉を絞りたてて夫人は悶え泣く。夫婦だけの闇の秘めごとを、あるうことか小間使い風情に見られる羞ずかしさ口惜しさに、夫人ははや半狂乱のていだ。そしてそれをなおおびやかすように、秘所を男爵のものでいじりまわされるつらさ。

赤ぐろいそれは反り返って女液にまみれ、燃えるような耀きを帯びている。

「ゆるして……ゆるして下さいましッ」

夫人の哀訴も昂ぶりにとぎれ勝ちだ。そしてその先端を剥け返った実に押し当てられ、クリクリ擦られだすと、ヒィーと啼いて反り上った。

「どうだ、口では何と断言してようと、心地よくてたまらんだろうが。入れて欲しくてドロドロ秘水を吐きおって」

「いや、いやでございますッ」

「フン、女のイヤはイヤッてことよ」

さすがの男爵も血走った思いに衝き動かされて、グイと腰を入れた。スタンドの明りににじんだ襷が押し割られ、ヒクつく小口が瘤のようにふくれた先端を裂けんばかりに啜え込んだ。

「あ……」

夫人は総身を慄わせ、我を忘れて腰を衝き上げた。

「どうやらわしのものを覚えていたようだな。うれしそうにからみついてきよる」

じわじわと捻じ込みながら、男爵は暗闇の闇房で自分の下に喘いだ女とは別の女を犯している気分ひたつた。明かりの下でやっているせいばかりではなかった。肉そのものが

新らしく眼覚めたようにうごめくのだ。

「ああッ……おゆるし……」

舌足らずにおめいて、敦子夫人は畳に這わせた黒髪をザクザク鳴らしつつ頭を振りたてる。

「狎れた亭主に対してさえこのよがりようでは、高崎を唾えた時などは、どんなようだったかな。さぞ腰巻まで濡らしてよがり狂ったのだろう」

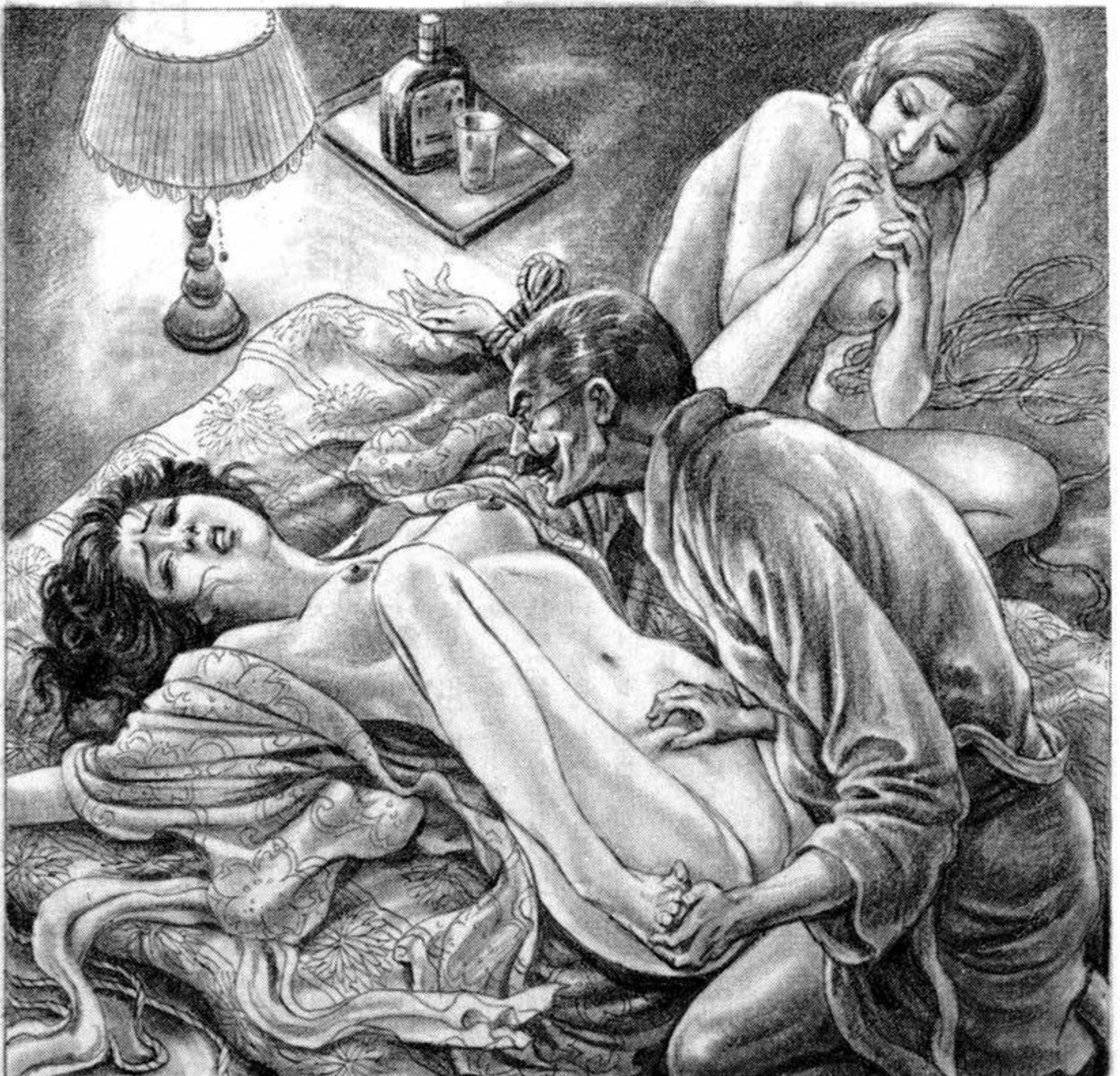
なかばしか与えられない口惜しさ物足りなさに、夫人は口の端からはしたなくよだれまですくみこぼして腰を狂ったように衝き上げてくる。幼い頃から教え込まれ習い性となったはずのつつしみは、どこかへ消し取んだようだ。何もかも忘れて灼けるような逞しい男のものを内奥を衝き上げられるほど深く唾え込もうと、泣き叫ぶ。

「どうだ恋しい男とくらべて」

「……高崎さまのことは……」

なかばまで埋められて小振りを与えられながら元の恋人のことを問われるつらさに、敦子夫人は堰を切ったように号泣しはじめた。

(つづく)



女獣飼育 三



拓植 浩二

女腔開陳

ぼくが、もう五十に近い歳になってきているからか、それとも、日がな、ウィスキー・グラスを空けているからか、時おり、男の物が「ナマクラ」になって、日毎の用に困ることがある。

が、日夜、女は、ぼくのそばに置いている。妻の場合もあるし、美保子やほかの女の場合もある。しかも、ベッドの中ともなれば全裸だ。もちろん、ぼくも。

しかし、軟らかくなっている物が、時に目覚めて硬くなる。その際には、昼といわず

夜といわず、女体に挿入する。

数年前まで、女体の肉腔は、その重畳とした襞のために、男の物が硬直し、屹立していなければ、入れることが出来ないものと思っていた。それほどに腔内の肉圧は強いことを体験している。現に、先月号で紹介した光子などは、まず壺口が小さいし、緊い。中に入れば、全体が縛られるほどに感じる。

光子の場合、まず挿入がむずかしい。ぼくの物が太いことも理由だろうが、蛇の鎌首のような型態にもよるのだろう。よくピストルの玉のような形の物があるが、あれだと、わけなくはいらるだろう。しかし、どうも蛇の鎌

首型のほうが、女を欲ばすことが大きいようだ。

光子を抱き始めた当初、女腔が充分に潤っているのに、また、こっちも硬くなっているのに、中にはいらなくて困った。光子も腰を使い、手を使ってぼくを導いて、やっと入れたということがあった。しかも入口や肉襞の緊縛ぶりと、よがり声に、こっちも思わずハッスルして激しく運動したところ、相手も果て、こっちも果てて身を離してみたら、女の狭い壺口の下端に裂け目がいっており、血がにじみ出していた。

「あ、ごめん……傷つけたな……」

抜いた際にそれを見つけて女に詫びると、「いいのよ。わたしも満足したんですもの！」ティッシュを当てがいながら、女は笑って、ぼくを見つめた。

が、いつも、ぼくの物が硬いわけではない。なのに、女体がほしい。

女腔発見

そう、もう十八年ぐらい前だから、美保子が、東京は神田神保町角のある銀行員として勤めていたころのことである。当時、二十四歳だったと思う。近くの富坂のアパートで独り暮らしをしていた。

一日おきぐらいに抱いて数か月たったころ、
ぼくは興にのって女を全裸にすると四つん這いにさせた。両腕を枕にしている。その恰好は猫が大きくアクビをし、背のびをしたのにそっくりである。

と、ぼくは、女体のもう一つの景観を見出した。秘庭の下端にある女腔が、直径二センチぐらいに大きく開き、腔内深くまで、ぼくの眼前に広げてくれたのである。
ペン・ライトで中を照らした。

「いやア……恥ずかしい！」

ぼくは女の腰の脇にすわって眼前の双臀を手で割り、茂みを裂くようにした。サーモン・ピンクで濡れ光る庭先が、そこにあった。肌色に沿う薄い茂み、そこを縦溝を割って開く。開いた形は、大きなクルミのようで、形といい、色といい、回りの茂み具合といい、開いた中のピンクの平地といい、男にとって、まさに景観以外のなにものでもない。

が、女にとっては、反対に羞恥この上ない形である。全裸にされ、四つん這いにされ、そして秘貝を裂かれて男に見られているのだから。まさに動物、いや物体だ。

中を見た。畳畳とした襷。これまでぼくの見ただことのない世界であった。
しっかりと女の腰をかかえているうちに、女体がほしくなってきた、開いている女腔に、そのまま、セット・インした。いわゆるドッグ・スタイルである。

数回デートして、女のアパートでグラスを重ねるうちに眠くなり、知らぬうちに寝入ってしまった。気がついたら夜中も、とうに過ぎていた。ぼくの自宅のある相模原市に帰るには、終電車も出てしまっている。

二つ折りにした座布団が、ぼくの頭の下にあった。眼鏡は、眠る前まで二人で飲んでいたテーブルの上にのせてある。からだには毛布がかかっていた。

＊

開いた女腔の下端左右に、ぼくの破った膜の残滓がまだ小さくくっついていてる。

そして、モミモミするうちにより声を出した。手を下腹部のほうへと移す。

羞恥と興奮からか、開いた腔のあたりがすぼんだり開いたり仕草をくり返している。

ガードが固い。パンティ・ストッキングの上に、毛糸編みの物。もちろん下には、ビキニ・パンティをつけていた。

その秘庭を入念に指で撫ぜる。撫ぜるほどに女は首を左右に振り、よがり声をあげてきた。そして、ピンクの庭が、ジュースで溢れてきた。双丘は、うっすらと色づいてきてい

「あたし、冷え症なの！ だから……」
しかし、ぼくに脱がされることを覚悟していたと見え、パンティごとそっくり下にたぐると、腰を上にあげて、脱がせるのを手伝っ

ぼくは、まだ三十前の男だ。襦の向こうに綺麗で若い女が、一人で寝っていると想ったら、急に、その女体がほしくなってきた。
立ち上がると、そっと襦を開けて部屋にはいった。むっと、女の匂いがする。上着とズボン、下履きを脱いで、女の布団の中に身を入れた。

女は向こうをむいて寝ているが、ぼくのはいるのを知っていた。ネグリジェの下から右手を入れて、なかばめくれているスリップの下にやると、そこに女の肌があった。
美保子の肌に触れた最初である。これまで

女は隣の六畳の部屋に寝ている。

はキスと抱擁しかやっていない。手をさらに上にずらす。ブラジャーの後ろのフックが脱してあり、右手はスムーズに乳房の上にまで行った。

てくれた。

ほとんどの女がそうだが、暗黙の中でも男との性交渉を認める場合、男に下着類を脱がせられる作業に協力してくるものである。初めの時にしてもそうで、むしろ、その時のほうが、女の姿勢の中に、今、自分の肉体にはいつてこようとしている男に隷属しなければという心根がうかがえるみたいである。

すっかり脱がせた後ろから尻を、しっかりと抱え寄せた。なるほど、ぼくの下腹部にヒヤッとした冷たさが感じられる。

ぼくの尖先が、女の茂みの先端をまさぐっている。たまらなくなつて、筒を無理矢理鞘に納めた。膜を破る時、

「はアアア……」

と、喘き声をあげたが、構わずに突き入れた。そして男の思いを遂げた。

男の“物”にする型

美保子にとっての初体験は、横臥ながらもバックからだった。これは、いってみれば“げもの”スタイルである。三度に二度ぐらの割合でこのかたちで交わるうちに、女にとっては愛の抱擁というより喜びを求め、感じる行為と取られるようになった。深くはいりし、女腔の筋肉も自由に伸縮する。

膝付位にさせて女体を楽しむということに

も、美保子は、わずかの期間で順応していった。これを犯られるようになる、女は完全に男の“物”という意識を持つようになる。しかも、これを、むしろ喜ぶようになった。

女が台所の流し台で洗いものをしている。隣の部屋にいるぼくが、急に欲情を催してきて、女の後ろに行き、スカートをまくる。

「いやアア……いま、昼間よ……」
と、悲鳴をあげる。

かまわずに、パンティを引きさげる。両手の指で浅鯛貝を裂く。そのときには、両手を流し台のふちにかけ、からだを前にこめて、ぼくを受け入れようとし始める。そこを下から突き上げるようにして挿し入れる。

「いやアア……」

と言いながらも、尻を振って、安定したかたちで、ぼくの物を深部で迎える。からだ内の構造物が重力で下にさがるからだろう。そうすると、二人とも、より刺激が大きいわけだ。

これは、いまでもよくやる。

女は、夜、布団の中で交わるのは当たりまえのことと考えているようだが、昼日中、突如、スカートをまくられ、パンティをおろされて、後ろから犯られるのは、恥ずかしいことこの上ないようだ。

が、恥ずかしさの余りにイッてしまうことも多い。いくらも突き上げ運動をくり返していかないのに、ぼくの物にすごい収斂感が伝わり、ついで、女の首が流しの中に垂れることが多いからだ。

光子の場合も同じで、初めのうち、ぼくは女の手前も考えて、いわゆる“正常位”なるかたちにして、女体の両脚を思いきり開き、その間に、ぼくのからだを埋めるようにおおいかがぶさつて、男と女の務めを励んだものだった。

しかし、なにせ光子の壺口が、人一倍小さい。横たわっている女の尻を、ぼくが手で打つ。

また打つ。

「ひやアア……」

から、打つ間に、

「あアアア……」

そして、転がして、両膝をつかせ、俯伏せにして、尻を両手で割り裂いた。

「いやアア……恥ずかしい！」

と叫んで、尻を振った。そこをがっちり抑えて、金色に輝くヘアを開いた。ぐっと尻穴近くまで押し開くと、美保子と同じように、一センチ以上の女腔が開いているではないか。

そこをいじくる。

「あァァ……や、め、て！ そんなところ見られるの、いや……」

女は尻を振り、腕を枕にしながら叫ぶ。が、構わずに腔の入口あたりに指を入れていじくる。

ぼくの物は、まだ、あまり硬くなっていない。それに先端も、まだ濡れていない。が、ぼくのいじくっているあたりは、もうグッシヨリと滴たっている。

ぼくは自分の物をつばきで濡らした。そして女腔に当てがうと、なんと、スムーズにはいっていった。

しかも、「ナマクラ」になっているものが、周りの肉壁の圧力で勢いを盛り返し、硬直した。しかも、相手は細身の美女で、欧米型ときている。今、自分の目の前にあるのは、黄金色のヘアである。

心行くばかりに堪能した。

処女堪能

女が「けもの」スタイルにされるといふことは、恥ずかしいことこの上ないものだが、繰り返すにつれ、自分のほうから、全裸になり、膝について、尻をこっちに向けてくる。美保子だけかと思っていたら、光子もそうだ

った。

羞恥、犯かされる——というのは、女にとって喜びなのだろうか。

たった今、美保子から電話がはいった。来てほしいとのこと。が、この電話がかかってきた際に、ぼくのかたわらに、悦子がいた。

今、二十八歳。十九の時から知っているが、ぼくとの肉体関係はない。女優の片平なぎさにそっくりながら、岩手県出よろしく、肌は、あくまで純白である。眉は濃いし、くちびるは厚い。日本でも大手の土木機器メーカーのK製作所に勤めるOLである。両親の離婚と死別で、縁を遠くしている。

「おいしい煮物があるんだけど、来ない？」という美保子の誘いである。

今日は土曜日、そして夕がただ。

電話の直後、突如、心に、悦子を羞恥のどん底におとしめてみたいという衝動に駆られた。

悦子は、ぼくのかたわら、テーブルに出ているコーヒを口に運んでいる。

「なあ、悦ちゃん……」

ぼくは、悦子をじーっと見つめた。

女を自分の自由にしたい時、自分の物にしたいという欲望に駆られた時には、女の目を、じっと見すえることだ。しかも、こっちは何

も言わない。三十秒ぐらい見すえてから、

「いい……?」

と言って、手をのぼして、女の肩口をたぐり寄せる。間違いなく、女はなびいてくる。

「悦ちゃん！ いい?」

悦子はぼくを見つめながら、こっくりうなずいた。肩口を左手でたぐり寄せると、すわっている両膝で、こっちににじり寄ってぼくに抱かれるのを手伝ったのだが、その時、悦子の全身が、小刻みにふるえていた。

「初めて……?」

小鳥のように小さく抱かれ、目をつむっている悦子は、ふるえながら、かすかにうなずいた。

数年前のことだが、ボーイフレンドにドライブにさそわれて御殿場まで行った。その男は悦子に何の予告もなしに、モーターのドライブ・インにはいったところ、この事態にハッとした悦子は、隣にすわっている男の横顔を思いきりたたいた。

「なによ……わたし、帰るわ！ ここから出て、電車で帰りますからね」

「……」

悦子はドアの取手に手をかけた。男の手が、さっとそれを抑えた。

「何するのよ！ 邪魔しないで！」

なおも車外に出ようとする。

「おれが送っていくよ。何もしないよ」

それから一時間、悦子は男とひとことも口をきかないまま、自分のアパートまで送られて帰ってきた。

このいきさつを、すぐあとで、ぼくは聞いた。とにかく気丈な女なのである。それなのに、今、ふるえながら、ぼくの腕の中に抱かれている。

「キスするよ」

耳元でささやくと、女のうなじが、かすかにうなずいた。

美保子に比べて厚いくちびるが半開きになって、紅く濡れている。ふるえている女体の背をかかえ、腰と臀部をぼくのおぐらの中に納めた。そして、キスをしながら、右手で、着ている物の上から、乳房を揉みしだいた。

そのうち、ふるえが止まった。のみならず、キスの合い間に、口と鼻から喘ぎ声もれ出した。女の両手に力がいり、ぼくにしなだれかかる。小さい女体だ。黒いジョーゼットのワンピースだから、ブラジャーを通してながら、乳房の感触が強い。大きい。

「触わるよ」

女は、キスの途中でうなずいた。

ワンピースの後ろのファスナーをおろし、

ブラジャーのフックを脱した。ぼくは脇下から乳房に手を回した。掌に納まりきらないほどのボリュームをしたオッパイだった。

肩口から衣服を脱がせる。細い首、なで型の肩。今はまだ五月だから、ノースリーブを意識しないせいか、腋毛は濃い。そして一本一本が長い。実に魅力的だ。

両手首を左手でぐっとたくし上げた。ぼくの左腿が女の枕になり、女の両腋の下は、ぼくの前にモロに見える。

「恥ずかしい！ やめて！」

女は、強引に手を引きおろそうとした。それを無視して、女の上半身を、ぼくの眼前に晒した。

「いやア…… やめて！」

ロング・ヘアにウェーブのかかった髪を左右に振り乱して、絶叫する。まさに近所に響くほどの声だ。

その悲鳴が、ぼくの腕の中であがっている。もう三十近いとはいえ、絶世の美女で、しかも、肌は白磁そのもの。美保子は、どちらかといえば、小麦色がかった肌だし、光子の肌は青味がかっているといっている。

悦子の恥ずかしそうな悲鳴を耳にして、嗜虐な興趣に駆られた。女体の後ろ、ウエストくらいまであるコンシーリング・ファスナー

を、ぐっと引きさげた。ぼくの腕に、女体の抗らがいを感じたが、左手で女体を抱きしめながら、ワンピースを脱がせ、黒のペチコートを剥いだ。

「いいな？」

女はうなずくと同時に、腰をあげた。目にはいったのは、黒の薄いビキニのパンティだった。女体全体の力みがなくなっていた。

くるりとパンティを剥いた。

すっかり脱がせ、全裸にする。細い腰、形

良いヒップ。

「こういう経験はなかった？」

ぼくの左腿を枕にした悦子は、なかば向かうを向きながら、目をつむったまま、うなずく。

「恥ずかしい！ 何かかぶせて……」

黒々と繁茂するデルタを晒しながら、苦しそうな表情を浮かべて哀訴する。両手は相変わず、頭の上で、ぼくに抑えつけられて、腋下のらなさまを見せている。

処女開膜

「うん、かぶせてあげるね……」

と、ぼくは手元にあった新聞の夕刊を、一枚、さっとかけた。

「いやア……！ そんなの、かけたことにな

らないわ……」

悦子は、縮込まった形で、こちらに背を向けた。白いウエストと美しく曲るヒップが、そのまま、ぼくの眼前に露呈している。レックスの線の良さ！ 付根が、心持あいている。その白い尻を持ちあげた。

「そんなの、ないわア！ いやよ！」

構わずに、デルタの茂みに強引に手を差し込むと、双丘を思い切り持ち上げた。

「やめて！」

と言いながら、とうとう泣き出してしまった。

双丘を右手で幾度となく、緊く打った。

女の肩口から首回りを左手で抑えながらの連打である。女の調教は尻を連打するに限る。泣きじやくりながらも、素直に犬、猫のたちになった。

座布団を額に当てがうと、ぼくは白い二本のボールの間に割ってはいった。

黒い！ 濃い！

桃の折れ線を両手で割ってみた。

驚いたものを見た！ 膜がおおっていたのだ。茂みを開いてみると、紡鐘形の濡れたピシクも露わな先端を、三分の一ほどおおっていた。ふつう処女膜は、男が破瓜してやぶれるものだし、年かさもいくと、いつの間にか裂けてしまうものだとも聞いている。薄い薄

い膜だ。

「いやよ！ いやらしいこと、よして！」

女は尻を振って、激しく抗がう。

が、左手で女体の腰をしっかり抑え、茂みの先端にあるノブを捜し当て、体内に埋まっている物をそっと引き出すようにして静かに愛撫するうちに、女体からの抵抗はおさまってきた。

「この膜、ぼく、指で破っていい？ 痛くしないから」

女は、こっくりとうなずいた。

ぼくは、そっと引きはがすように、内側には人差指を入れ、親指といっしょに、静かにはぐった。これは男にとって楽しい作業だ。女は、かすかにうめき声をあげた。そして、ぼくも驚いたのは、処女でも、女を「犬スタイル」にすると、「女腔」が大きく開くということだった。丸く、奥深く開いている。大発見だった。

もちろんぼくは、茂みの奥にある腔内に入れた。膝付いた白磁の処女のバックから男の思いを遂げた。

もう一度、女のせせり泣きが聞こえてきた。

＊

その夜、ぼくは美保子の所へ行った。やすもうとしてベッドにはいったら、

「あなた！ 今日、だれか女の人と抱き合ったでしょう？ あなたの匂いがちがうの！」
と言う。

「どういうこと？」

「化粧品がちがいかわかるのよ。女って、敏感よ。……今晚は、いや！」

ダブル・ベッドの中で、くるりとぼくに背を向けた。ひんやりとした腰を抱こうとしたら、

「今晚は、いや」って言ってるでしょ。寝かしてエ！」

と、ぼくの抱擁を拒んだ。

ぼくは、一人で起き、隣の部屋からボトルとポットとグラスをベッド脇のテーブルに置いて、美保子の寝顔をサカナにしながら夜更けまで飲んだ。

朝、目が覚めたら、ベッドの中で、美保子のかたわらでやすんでいた。



狐顔をした女からの手紙

隠者の集う夜・第一話

尼子義久

洗濯のすすぎ水のように必ずしも透明ではなく、清潔なようでその実ひどく汚れている都会の雨が昨夜から降りつづいていた。

人は、時として雨に濡れることにロマンを感じる。しかし、そこに必ずあるにもかかわらず見落しているもの、雨粒の中に含まれる真黒な塵のことを思い出す時もある。

＊

清野修治は勤続五年目にして初めての有給休暇をとった。冠婚葬祭には別枠で特別有給休暇が認められていたし、病気もしないのに休むのは何だか気が引けたからである。

しかし、今日は特別の日なのだ。

第一回目の結婚記念日であり、愛妻の洋子と映画を見て高級レストランで夕食をとりちよつとしたホテルで一泊することになっている。それは、最も大切な日として計画していた子づくりの日、はじめての子供にとって正確な意味での生命誕生日なのである。

「映画は何時からだった？」

昼近くまでごろごろしていた修治は、同じようにまだ布団をあげようともしない洋子に云った。

「三時五十分からよ」

嬉しいことがあると何も家事をしなくなる

洋子が、やはり動こうとせずにこたえる。

「床屋に行つて来る」

「駅前の床屋でしよう？。二時までには帰つて来てね」

「心配しなくても一時頃には帰るよ」

修治は、洋子以上に動こうとしない飼猫を足でつつき、財布とタバコとライターだけをそれでもあちこちのポケットにねじ込んだ。

「お昼御飯どうしようかな？」

「どうせつくる気なんてないだろう。早い目に出て何か食べるさ。雨に濡れるのもたまにはいいものだからな」

「助かつちやった」

洋子はニコニコしながら云う。

「それより、化粧がどうの着替えがどうのなんてことは済ましとけよ」

修治の言葉の中に何かしらソワソワしたものを感じた洋子は、よけいに動かなくなった。雨に濡れると云う言葉の響きに特別製のロマンを感じてしまったからである。

＊

半時間ほどしてやっと洋子も動き出した。丹念に化粧をし、お気に入りの純白のワンピースを着る。郵便受けに手を入れて読む気もない新聞をとる。

「……？」

洋子は郵便受けの中に修治宛の手紙を見つけたのだ。新聞にはさまるようになっていたと云うことは、今日の午前中にとどいた手紙らしい。

「中居道子……?」

ペンがにじんでしまうほどゆっくりと慎重に書かれた文字に、洋子の妻としての直感が働いた。思いきって開封した洋子は、修治が帰って来るまでにと慌てて読みはじめたのである。

＊

『突然このようなお手紙をさし上げました失礼をどうかお許し下さい。』

また、手紙の書き方はもとより女言葉も十分に使えませんから、失礼な文面になることも本心が伝わらないことを恐れるあまりのこととお許し下さい。

無数に降りそそぐ雨の中の一粒のように、中居道子と云う名前など気憶にないと云われてしまうことは覚悟しています。

でも、週に一、二度は街角で顔を合わせて挨拶をしている女、月に一度は必ずあなたに心より尽している女ですから、ぜひぜひ思い出して下さい。

道子が駅前の理髪店で勤め出し、あなたの髪を整えさせてもらうようになって五年の歳

月が流れました。そして、道子はあなたに対してひたすら思いつづけて来たことをやっとのことで打ち明ける決心をしたのです。

どうかこの手紙だけでも最後まで付き合ってください。心からのお願いですから……。

＊

道子は、子供の頃から勉強が駄目で性格も内向的とか暗いとか云われて来ました。

中学を卒業するとすぐ理容師の道に進んだのですが、それは手に職をつける以外に生きて行く道がなかったからでした。

故郷は漁村で父も漁師ですが、年収は一五〇万円程度しかなくとても暮して行けません。

田舎では結婚相手も見つからないこともあり、また道子のような者にでも多額の送金が出来ることなどの理由で出稼に來たと云うのが真実です。末の妹が中学を卒業するまではこの送金をつづけなければなりません。

でも、こんな道子でも二十四才になる現在まで一生懸命に生きて来ました。

毎晩九時まで働き、十時過ぎにアパートへ帰り、その後はただじっとして暮す毎日でした。でもどうか、どうか同情などはしないで下さい。道子は、あなたからたいへんなものを盗んでしまったのです。

何もかも正直に云うつもりでこの手紙を書

いていますから、一度だけ、この手紙だけでも弁解をするチャンスを下さい。

＊

道子は店でコンと云うニックネームで呼ばれていますが、もし顔を少しでも覚えていてくれましたらその理由はすぐわかることでしょう。目は細くて尻上り、面長でほほは痩け、唇が薄っぺらで横から見るとひどくとがっていて、おまけに痩せすぎのチビですからふくよかな女らしい肉体などまったく無縁な狐女が道子なのです。

理容師としての腕は悪くないと信じていますが、なにぶん非力なため洗髪など力のいることは不得意で他人の二倍ほど疲れてしまいます。古い常連のお客様はたいいてい誰々と理容師を指名するのですが、主人夫妻は腕がバツグンですし同僚の女性たちは美人でプロポーションもいいから、大人は皆さんそちらへ行ってしまう、中居道子にははっきり指名してくれるのはあなただけなのです。

残りは一見のお客様か子供ばかりが担当になります。

そんな大切なあなたのことを、道子がどれだけ心待ちにして来たかをわかってもらえるでしょうか。

月に一度、あなたはいろいろな話しをして

くれます。道子はうまく応対が出来ませんし、むつかしい内容の時は返事もろくに出来ず困

ってしまふこともあります。一言一句もらすことなく聞いて来ました。

あなたからサハラ砂漠のことを聞いた時は本当に汗がにじみました。

あなたから古代マヤ文明における生け贄の話しを聞いた日は怖くて眠れませんでした。

何メートルも積もった雪のつめたさ、そしてその味。小さな足跡を残して飛びはねるウサギが雪よりも白いこと……。

日本中のおいしい食べものの話しは何よりも好きでした。

あなたの話しに胸が踊り、心臓の鼓動が自分の耳で聞きとれるようになり、カミソリが使えなくなることもありました。

道子は感動し、血と肉の中に深くメモリーされて行くことを知ったのでした。

あなたのことを夢にまで見るようになった頃に一度手紙を書きましたが、結局は渡せませんでした。

そして、苦悩はつづいて行っただけです。

もっと積極的な性格だったら、もっと美人でプロポーションも立派だったらと思うと涙が溢れて来るのです。

でも、あなたのことを忘れられませんでした。なぜならば、月に一度は必ずあなたに触れられたからです。

＊

今から三年近くも前のことになりましたが、ユニフォームの洗濯が間に合わずエプロン姿でああなたの髪を刈ったことがありました。

理髪店のユニフォームには胸ポケットしかありませんが、それは下の方にポケットがあると落ちた毛が入るからなのです。

あなたの髪はエプロンのポケットに入っていました。どうか許して下さい。

道子はカットしたあなたの髪を持ち帰ってしまったのです。

どうか、どうか許して下さい。

テーブルの上に白い紙を敷きあなたの髪をならべると、キラキラと輝きます。

道子は、あなたのことを思いながらその髪で小指の先ほどの筆の穂を作りました。

スー、スーと手のひらを撫でてみます。

そして、道子はその行為から逃れられなくなって行っただけでした。

あなたの髪で作った筆の穂を手のひらから腕そして肩へ、足先から太腿へと這わせるのです。その筆はみるみるうちにあなたの指と化して行くではありませんか。

ああ、あの電撃のような刺激。

ああ、あの背すじから脳天へ、そして脳天から下腹部へ走るしびれ。

淫らな女とののしられても、道子はもうそのことから決して逃れられないのでした。

抜け落ちないようにしっかりとボンドで固定しなおしリボンで結んだそれを、布団の中に持って入らないと眠れなくなったのです。

乳房を撫でると足の指がうごめきました。乳首の少し外側は特に感じます。

でも、どうか信じて下さい。

道子は決してあなたの髪で作った筆を、いえ、あなた自身の指を汚ならしい部分へ這わせたりはしていませんから……。

＊

疲れて帰ったアパートの部屋で、その髪だけが道子を待っていてくれるのです。

じっと握りしめてみると空想の世界が広がって行き、そこで道子はあなたのものになれるのです。

あたたかく、つめたく、湿気があり、乾燥していて、風があり、無風で、明るく、暗く、どんな世界でも自由に想像し、その中であなたとふたりになれるのです。

髪の毛と云えどもあなたの肉体の一部だと思つと、道子の手の中でそれは心臓の鼓動を

始め、動きまわるように感じます。

道子は布団の中でいつでもあなたを抱きしめ、いいえ、あなたに抱きしめられるのです。髪の手はみるみるあなたの指と化し、道子の胸を這いまわります。

ああ！ 何と素晴らしい時間でしょう。

ああ！ 何と素敵な世界でしょう。

あなたの指は少しずつ下がって行こうとするのですが、道子は必死にそれを止めるのです。腰を、お尻を必死にくねらせて逃げないと、あなたの指はどう書いていいのかわからない部分へ這い寄って来るのです。

でも、どうか安心して下さい。

汚らしい部分にあなたの指を入れることだけはしていませんから……。

＊

あなたの一本の指だけで、道子は長い寂しさから救われました。幸福でした。

でも……、ああ！ どうか許して下さい。

道子は一本の指だけでは満足出来なくなっていました。

一ヶ月の後、あなたから計画的に髪の毛を盗みました。他人の不潔な毛が一本でも混じっていてはたいへんですから、慎重に準備をしカットした髪をなるべく多くとって行ったのです。そして、毎月あなたが店に来てくれ

るたびに盗んで持ち帰りました。

＊

箱に入れた髪に手のひらを沈めると、むず痒いようなそれでいてあたたかい感触が伝わって来ます。

道子は目を閉じます。

ああ！ 道子の手はあなたによってしっかりと握りしめられているではありませんか。

道子の手のひらは汗ばみ、息が止まるほどの感動が全身を満たすのです。

部屋を暗くし、布団に入り、左手は髪の毛を入れた箱の中に、右手は髪の毛で作った筆を持って肌を撫でる……。

あなたの手と指が……。

道子は溢れ出る喜びの声を他室の人に聞かれぬよう、口にタオルをつめなければならなかったのでした。

ああ！ あなたは何と素敵な男性なのでしょう。道子を救ってくれたあなたのためになら、どんなことでもしなければなりません。

何かプレゼントを……。

でも、道子の生活ではろくなものは買えません。それでも、安物ですがネクタイを買ったり、冬には手袋やセーターを編んでみました。渡そう、渡そうと思いがち今日までグズグズしていたのは、道子の性格の内向性

のなせるわざなのです。

＊

そうこうしているうちに、毎月集めたあなたの髪はちょっとした箱一杯になりました。

道子は人間の形をしたぬいぐるみを作り、その中にあなたの髪をつめました。

でも、それは自分で作っていないがいつ頃作ったのか正確には覚えていません。

いくら思い出そうとしてもどうしてもわからないのです。

ずっと以前から、子供の頃から持っていたように思えてならないのです。

しかし、身長三十センチほどのその人形はまぎれもなくあなたの肉体から生れた分身となりました。

ああ！ 道子はあなたの肉体の全てを盗んできましたのと同じことしてしまったのです。

ああ！ あなたの髪を盗み人形を作ってしまうなんて、決して許されることではありません。

＊

ある日、道子がアパートへ帰るとお帰りと声をかけてくれた人がいました。

誰もいない、そうです五年以上に渡って道子以外は誰ひとりとして入ったことのない、入ってくれたことのない部屋なのです。

ああ！ 人形がムクムクと大きくなりあなた自身の姿と化して行くではありませんか。

そして、あなたと一緒に暮しがはじまったのでした。

道子はあなたの命令通り、体を揉むのですが、力がないのでいつも叱られてしまいます。

でも、道子は一生懸命なのです。

＊

お帰り……。ああ！ なんて素敵な言葉なのでしよう。なんと幸福に満ちた響きなのでしよう。いくら疲れて帰ってもその一言だけで道子は元気が全身にみなぎって来るのです。

道子は一日のことをあなたに報告しなければなりません。

お客様のこと、新しい技術のこと、同僚のことから昼食の中味までです。

次に、道子の体は調べられなければなりません。頭の先から足の先まで、道子の体はあなたのものなのですから当然のことです。

小さな傷が出来ていてもあなたは決して許してくれませんから、昼間の仕事は慎重にしないとたいへんです。

でも、毎晩あなたに処女かどうか調べられるのはとても恥ずかしいのです。

あなたは指を入れたりしないから苦しくはありませんが、あんなに見つめられたら顔か

ら火が出そうになります。

道子は全裸にされて寝かされます。

耳や鼻の穴、唇、舌、歯、乳房、おへそ、手のひら、足のひら、爪、汚ない出産口、肛門から全身の毛穴に至るまで、あなたは調べて行きます。まるで、初めて虫メガネを手に入れた子供が、アリの行列を発見した時のように……。

＊

ある夜、あなたは道子に襲いかかりました。肌のどこにも傷などないし、処女もちゃんと守って来たのにです。

道子は押しつけられ、全裸に剥がされ、撫でまわされ、唇を奪われ、乳首を吸い上げられました。両足は力づよいあなたによって持ち上げられ、膝を肩に乗せられたのです。

ああ！ 道子の汚ない部分に、血を噴く魔女の谷へ、ヌメヌメと湿ったカビの生えそうな穴に、ドロリとした粘液を満たした汚物入りのような下の口に、あなたは入ってこようとするではありませんか。

でも、道子は淫らな女の陰部に素敵なあなたを入れるようなことには断固として抵抗しました。汚ないからと訴える道子は、あなたによって齒ブラシをねじ込まれました。そして、気絶するまでゴシゴシとブラシの

洗礼を受けたのでした。

しかし、あなたの怒りはまだおさまってはいません。他室に悲鳴がもれないように厳重な猿轡をされた道子は、一方の足首を机の足に縛りつけられました。

道子は、あなたにさからった罰を受けなければならぬのです。

一方の足首をつかんだあなたは、少しずつ引っ張り、股を開いて行きました。

ああ！ 何と恐ろしい罰でしよう。道子はあまりの痛さのためのうちまわって苦しみますが、あなたは股裂きをつづけるのです。

太腿の肉はひきちぎれんばかりに伸びきり、今にもプチリと音をたてそうになり、ビリビリと股が裂けそうでした。

でも、道子は耐えなければなりません。あなたに支配されている召使いなのですから……。あなたによって暗闇の中より恐ろしい寂しさから救われた奴隷女なのですから……。生涯あなたに尽さなければならぬ飼犬なのですから……。

＊

店では最近明るくなったと云われるようになりました。寂しかったアパートの部屋にあなたが待っていてくれると思うと、自然と立

ち振るまいにもウキウキとした道子の気持ち
が反映されていたからです。

道子の幸福は、全てあなたのおかげなので
す。あたたかい部屋にいる満腹な猫のよう
にのびのびとした暮しがつづいたのです。

でも、道子は再びあやまちを犯してしまっ
たのです。

その日の昼、ちよつとした不注意から指先
に小さな傷をつけてしまい、それをあなたに
見つけられてしまったのです。

あなたのものである道子の肉体に不注意か
ら傷をつけてしまったのですから、ただで済
まされるわけがありません。

道子は、再び罰を受けなければならなくな
ったのです。

あなたは二日間の断食を命令しました。

道子は、一日に塩湯一杯だけを与えられ、
おまけに大量の下剤を飲まされた上に浣腸ま
でされてしまったのです。

道子にはあなたの命令に従うしか道はあり
ません。満腹の猫は一夜にして空腹の野良猫
へと転落したのでした。

どうかお茶だけでも飲ませて下さいと訴え
た道子は、番茶の浣腸をされました。

ああ！ あなたはなんてやさしい人なので
しょう。ついに動けなくなった道子は、店を

休むことが許されたのです。

あなたと一緒にいられるなんて！ なんと
幸福な道子なのでしょう。

＊

そんな道子に突然の不幸が訪れたのは、今
からちょうど二年前のことでした。

つい、お客様の悪口を云ってしまった馬鹿

な道子は、全裸にされ、首にひもをつけられ
ました。部屋の中央に座ったあなたのまわり
を何時間にも渡って這いまわられ、少しで
も休むと殴られ、蹴られ、髪をわしづかみに
されて引きずりまわされました。

倒れると鞭が飛び、くずれると肛門に割箸

やポールペンなどがねじ込まれました。

ああ、なんとつらかったことでしょう。

なんて恥ずかしかったことでしょう。

でも、道子はやっぱり幸福でした。

お客様の悪口などを云わぬようにするため、
忠実な犬にしてくれたことを知っていたから
なのです。あなたはちゃんと道子のことを考
えていてくれるのです。

全身に動物の生き生きとした生命力が溢れ
て行くのが道子自身にもよくわかり、とても
筆に尽くせないような幸福感につつまれてい
たのです。

でも、不幸はその次の日に襲って来たので

す。ふと店の窓から外を見ると、あなたが文

房具屋の娘さんと歩いているではありません
か。道子は彼女のことをよく知っています。

年令が同じでしたし、店も近く、ほとんど
毎日のように挨拶を交していたからです。

ああ！ こともあろうにあの実幸さんと一
緒だなんて……。

そして、その日から道子の部屋からあなた
の姿が消えたのです。

髪の毛をつめた人形と箱一杯の髪の毛を残
して……。

あんなにやさしかったあなたが道子を見捨
てようとしているのです。

道子は悩み苦しみました。

死にたくてもあなたに飼われている体です
から勝手なことは出来ないのです。

人形にすがりつき、心から訴えました。

あなたの好きだった肛門を見てもらい、泣
いて訴えました。

ああ！ どうか道子を見捨てないで。

小さな金魚鉢にたった一匹で暮している貧
弱なリュウキンよりも寂しい生活に戻さない
で！ 道子はひとりでいるのが恐ろしいので
す。ひとりでいると気が狂ってしまいそうに
なるのです。

でも、人形はあなたの姿になってはくれな

かったのです。

＊

決心した道子は実幸さんに会いました。

あなたのことで相談にのってやると云って近づいたのです。

道子は、親切そうに実幸さんをあざむき、少しづつ本心を聞き出すことに成功しました。でも、それは聞かない方が良かったかも知れない内容だったのです。

実幸さんは結婚まで考えていると云い、あなたとも交際するきっかけをつかんだとも云いました。例年行なわれている子供会キャンプの青年部指導員として参加した実幸さんは、副リーダーだったあなたにきびしく注意されたことがあったことを聞かされました。

あらかじめ申し渡されていた危険な場所に女の子三人が行ったことがバレ、お尻をピシヤリとたたかれたことも聞きました。

ああ！ 道子の驚きはどれほど大きかったことでしょう。

実幸さんは、いえ！ あいつは淫乱の汚らしい変態女だったのです。

マゾ女だったのです。

あいつは、あなたにお尻をたたかれた時の刺激が忘れられないと云うではありませんか。あなたに近づき、叱られるようなことをし

てお尻をたたかれないなどと平気な顔で云うのです。自分で編みもしないで買って来ただけのセーターをあなたにプレゼントしたのも、そんな邪悪な考えを持っていたのです。あいつはいやらしい妖怪だったのです。やさしいあなたを恐ろしいサディストにしようと企んでいたのです。そのことを知った道子は、すぐ人形に報告しました。

お尻をたたかれて嬉しいわけがありませんから、まぎれもなく変態のマゾ女ですと報告したのです。

でも、人形は返事をしてくれず、あなたの姿にもなってくれないのでした。

＊

釣り人が貧弱で味の悪い小魚を再び海中へ投げ捨てるように、道子は見捨てられようとしているのでした。

投げ捨てられた小魚は、時にそのショックで死んでしまうことでしょう。

でも、道子はズタズタにされても生きて行くしかない飼犬なのです。

そして、ついに道子は悟りました。

あの淫乱女、マゾ女を殺してしまうしか方法がないと云うことを……。

やさしいあなたを守るためには、あいつの

汚ない首にカミソリをぶち込んで殺すしかありません。のたうちまわり、血まみれになって死んで行くのがあいつの運命なのです。

顔を切り裂き、乳房を切り落し、女陰を引き裂き、いやらしさの根源である尻の皮を剥ぎ取ってやるのがあいつの死にざまだと決まっていたのです。

道子は、あなたの忠実な召使いとしてその計画を進めることにしました。

呼び出しても誰にも気づかれない方法、人目につかないが疑われない場所、安心させるための話し、油断させる手段とそのタイミングなどをきっちりレポート用紙にまとめました。もちろん、現場にも何度か行ってみました。絶対に人が通らない時間も調べ、あいつに声をかけました。

使い古して捨てられたカミソリを持ち帰り、鏡より輝くように磨き上げたものを手に……。

＊

道子は人形に報告しました。

ヒューと云う音をたて血しぶきを一メートル以上も飛ばしながらあいつが死んで行ったことを……。マゾ女の死にざまにふさわしく切りきざんでやったことを……。

そして、証拠の品としてあいつの汚ない尻の皮を持ち帰ったことを……。

土中深く埋められたあいつの屍が、暗黒の世界にうごめくさまざまな虫たちの餌食となることを……。

＊

ああ！　なんて素敵なのでしょう。人形は再びムクムクと大きくなり、あなたの姿と化して行くではありませんか。

瀕死の病人がリンゲル液をうたれたように、道子は刺激的なまでの再生を果たしたのです。さっそく道子は肉体を調べられることになりました。なぜならば、一ヶ月以上に渡って

あなたに調べられていなかったからです。全ての毛穴までも丹念に調べて行ったあなたは、道子の恥毛が五本も減っていたことを指摘し、罰を受けるようにと命令しました。

ああ怖い！　ああ　どうか許して！　道子は実幸のような淫乱のマゾ女ではありません。あなたの罰は恐しいのです。怖くて心臓が止まりそうになるのです。激痛にのたうちまわると、それだけでオシッコをたれ流してしまいます。

でも、やはり道子は許されませんでした。首輪をされ、力尽きるまで四つ這いで引きずりまわされました。

ああ！　道子はなんて淫らな女だったのでしょう。あなたのふるう鞭の音を聞いたたびに、

ドロリドロリと汚ない女の粘液をしたたらせしてしまうのです。

太腿に伝わるそれを見たあなたは、店の三連休を全てつぶして罰を与えることを言い渡したのでした。

＊

連休の前日の夜が来ました。

アパートの部屋中に新聞紙を敷きつめたあなたは、道子に這いまわりながら排便することを命じたのでした。

部屋を暗くし、懐中電灯をスポットライトのようにして肛門を照らしついて歩くあなた。のそのそと這いまわりながら、排便を強要される道子。でも、出る時はどうしても止まってしまうのです。

鞭がうなり、ヒヤリとした次の瞬間には燃えるような熱さが道子のお尻を襲います。

どうか浣腸して下さいと訴えても、あなたは自然排便を命ずるのでした。

道子は鞭が怖いのです。少しづつしか出せない道子は、ボトリ、ボトリと大便を落としながら牛馬のように這いまわりました。

ああ！　あの時のあなたの言葉は決して忘れません。臭いと色が気に入らないなんて……。ああ！　怖い。

トイレに引きずられて行った道子は、大きな浣腸器に満たされた水を注入されたのでした。下腹部がプーとふくらみ、今にも裂けそうな痛みが襲って来ました。

そして、排出と注入は四回も繰り返されたのでした。全てを洗い出された中へ、責めがはじまるのです。

洗面器の上にしゃがみ込まされた道子は、女陰と肛門をタワシで洗われました。

汚ない血を噴く魔女の谷をどうか清めて下さいと叫びながらゴシゴシとタワシが使われて行くのでした。

ああ！　ついに肛門にあなたの指がねじ込まれ、ツルリとした入口近くからあたたかい深部までがゆっくりと調べはじめられたのです。くねくねと腰をうごめかせる道子は、ただあなたから発せられる次の命令を待つだけなのです。

＊

道子は、一生懸命に男根を愛撫し、何度も射精してもらい、大量の精液をコップに溜めなければなりません。

なぜならば、それが道子に与えられる唯一の食べ物なのですから……。

でも、金曜日の夜からはじめられた恐ろしい責めの中で精液だけしか与えられなかった

道子は、ついに日曜日の夜に食べものを求めてしまったのでした。

お腹がすいて死にそうですと訴えたのです。

あなたは怒りました。

罰を受けている者がそんなことを云ったのですから当然のことです。

道子は天井から吊り下げられ、足を全開にされました。ビュービューと風を切って鞭が飛び、背中のみみず腫れになり、お尻は裂け、乳首は血に染り、割れ目からは鮮血がしたたりました。

ああ！ あなたはなんてやさしいのです。う。道子をなぶり殺しにはせず、逆に食べものを与えてくれたのですから……。

あなたは、食パンを十分咬みつぶし、唾液としっかり結びついたホワイトシチューのようにあたたかい食べものを与えてくれたのです。皿を舐めまわしてそれを残さず食べた道子は、這ってあなたに近づき男根を咥えました。腹をすかした道子には冷たいものやあまり熱いものでは体に悪いからと、ちょうど体温と同じくらいの食べものを与えてくれていたことを知っていたからです。

ああ！ あなたはなんてやさしいのです。う。道子がおいしいパインジュースをこぼしてしまわないよう、ゆっくりゆっくりと放尿

してくれるのですから……。

あなたはいつでも、道子の手のひらに排便してくれまますから、とっておいて後でこっそりと食べることも出来ました。

あなたは、爪や垢までも道子のために残しておいてくれますから、たいへん嬉しかったのです。なぜならば、爪でチクチクと肌をついて遊べますし、垢は体に挿り込むと気持ちよくなるからです。

フーとあたたかくなるのです。

＊

道子は、あなたと共に楽しい生活を送りました。もう、とてもひとりで暮すことなど出来ませんでした。

でも、再び道子不幸がつつむことになったのです。それは、ちょうど今から一年前のことでした。

そうです。あなたがあの洋子とか云う女と結婚してしまったのです。

ああ！ あなたはきつとだまされているにちがいありません。

道子は、時間の許す限りあなたの家を見張り、洋子の化けの皮を剥がすための行動を起こしました。

そして、そんなある日、道子はついに発見したのです。洋子と云う女がいかに淫らで汚

ないやつかを……。

あいつはスーパーマーケットに行き、バターとフランクフルトソーセージだけを買ひ、帰りに薬局へ寄ると下痢を起こす座薬を入手しました。家には帰らず、そのままスーパーマーケットに引き返すと、トイレに飛び込みました。道子はすぐとなりのトイレに入り、様子を窺っていたのですが、あいつは三十分近くも出て来ようとせず、いやらしいよがり声を上げていたのです。

まちがいありません！ バターとソーセージも飼猫との行為のために入手したにちがいないのです。オス猫とやるなんて！。

あなたをだまし、まんまと妻になった洋子は変態女なのです。

どうかあいつとは別れて下さい。どうかあの汚ないメス猫を近づけないで下さい。

＊

道子は、あなたにひとつだけお願いがあります。この願いが聞きとどけられなければ、自殺することを決意しているほどのことです。これまで五年間に渡って溜めて来たあなたの髪の毛も、そろそろミカン箱一杯になります。道子は決心したのです。

あなたの等身大の人形をつくろうと……。

小さな人形は今でもあなたの姿になってく
れますが、どうしてもあなた自身と同じ大き
さの人形が欲しいのです。

でも、そのためには血が必要です。

あなたのやさしさの根源であるあたたかい
血液がどうしても必要なのです。

もちろん、お礼もちろんと用意しています。

もし、こんな狐顔をした道子にでもあなた
の血液を与えて下さるなら、お礼にあの汚な
いメス猫、淫乱の洋子をなぶり殺しにしてや
るつもりなのです。

そうです。実幸と同じように、いえ、それ
以上に切りきざんで埋めてやるつもりなので
す。あなたを守るためにもぜひ決行したいの
です。ですから、どうかあなたの血を下さい。
五年間に渡って溜めた髪の毛で作った人形
に、血液が加わればまちがいなくあなた自身
となるでしょう。

どうか、どうかこの願いをかなえて下さい。

＊

もし、OKして下さるなら再び散髪を道子
に命じて下さい。そうしてもらうだけで、後
は道子が全てやりますから。

でも、もし駄目な場合は、どうか店を変え
て下さい。道子は自殺の道を選ぶからです。

あなたは気になさらないで……。

なぜならば、道子の頭が変になっているか
らです。道子は狂っているからです。

この手紙を書いている中でそのことに気づ
きました。

本物のあなたと道子の部屋にいるあなたと
の区別がなくなったのはほんの一年間くらい
でした。今では区別はついていきます。

道子は人形を愛しているのです。

＊

それでもあなたが血を与えて下さるなら、
散髪を道子に命じて下さい。

そうしてもらうだけで、後は道子が全てや
りますから。そして、そのお礼に必ず洋子を
殺してやりますから。

自分で狂っていると云う人は実は狂ってい
ないと聞きますが、あれは嘘です。

道子は自分が狂っていると思っています、ま
たそれが真実なのです。

でも、どうか助けて下さい。

世界中であなただけが道子を恐怖の静寂か
ら救ってくれる力を持っているのですから。
あなたが、再び来店し、中居道子を指名し
て下さることを心から願っています』

＊

洋子は手紙を握りしめ、駅前の床屋へ走っ
ていた。文房具屋の娘が行方不明になってい

ることは事実だったし、スーパーマーケット
の件も記憶にあったからである。

降りつづいていた都会の雨は、容赦なく洋
子の純白のワンピースを濡らして行った。

そこに必ずあるにもかかわらず見落してい
るもの、雨粒の中に含まれる真黒な塵が純白
のワンピースにくっきりとしたシミをつけて
行く。

「あなた！」

床屋に飛び込んだ洋子は見た。

床一面にベットリと溜ったおびただしい鮮
血と、それを丹念にスポンジで吸い取り洗面
器にしぼり溜めている瘦せていてチビの狐顔
をした女を……。

第三話 終



蜘蛛と蝶々

月の巻

松谷雨山



(三)

庭下駄を穿いて行く、木立に囲まれた二間だけの、小さな離れ坐敷の八帖で、草刈と久美子がひそやかに話していた時は、心の苦しさを紛らすためか、草刈は酒盃を手に入っていた。二、三の小料理や火鉢なども、勿論女中が運んだものであったが、料理は缶詰物の間に合せであったし、まるで人のいない空家のように、ヒッソリしているのと、女中もたゞ一人の同じ女であったが、それも酒肴を運ぶと、

あとは姿を見せず、殆んど山の中のように、あたりは静まりかえっていた。時々梢を掠める風の音なども、夜更けを思わせる寂莫たる感じであった。

「今のうちなら、幸いまだ誰にも知らせてないんですからね。東京をこのまゝ、抜け出すとすれば、台湾へでも、逃げるんですよ。あすこなら、二、三度行って勝手も分るから、当分安全な場所もあるんですよ……」

そう云って、ちびりちびり盃を舐めている草刈は、先刻

とは別人のようにゆったり寛ろいでいた。再び東京を脱出する決心をしたのである。

「そうして下さいましたら夫も絶対にあの事は申しませんでしょうし、その内には、証拠もない事ですから……」

久美子は漸く安心して、もう泣顔も消えていた。竹足の丸卓子を中に向き合って、自然、女の役のように酌をしているのと、一つ二つ相手をしたために、目のふちを少しぼおうと染めているのであった。

今度の事件が起らない頃には、役所の課長と御用商人——と云うよりも、殆んど友人関係のような親しさで、草刈がぶらりと遊びに来たり、よく碁を打ちに来たりしたのと、彼の招待で鈴井一家は一泊旅行や海水浴に行ったり、また観劇帰りの食事などの時には、夫と草刈へ酌をしたこともある久美子だから、今酌をしているのは格別不自然ではなかったが、かつて口にしたことのない酒を、たとえ盃に二三杯にしても、つき合わされたり、二人差向ひのこうした場面は、今夜が初めての久美子であった。だがこれも、要するに久美子としては、鈴井の浮沈に関する瀬戸際だけに、草刈勇作へのサービスなのだ。

「この家で、自動車を呼んでいただけますかね?」

久美子は、そう云って、ハンドバックを引き寄せた。時刻のおそいのに気がついて、急に、そわそわと帰り支度を始めたのである。だが草刈は、何か考え考え盃を舐めながら、

「まアい、でしよう……」
と呟いた。

「でも、わたくし、余り遅くなりますと、子供達が何ですから……」

もう十二時はとくに過ぎていたのは知っていたけれど、一大事の相談であっただけに、時間の事も例外に無視していたものの、気になるのは、女中まかせにして来たあとの、子供達の事であったし、もうこれ以上相談すべき事はないと思う久美子であった。

「お子さんがたはもう大きいんだから、まア何ですね……今夜は奥さんも、此所で夜明しするつもりになっていたゞくんですね、ハハハハ……」

低い笑い声であったが、冗談ではなく、草刈はそれを当然なことのように云っていた。

「何かまだ御相談いたすことがございますの?……」

そう云って、何気なく銚子をとりあげた久美子は、チラツと不安な目を向けた。三十四でも、人妻としての、本能的な危惧が掠めたのである。

だが草刈は、微笑を洩して落ち着いていた。そして持前の、錆のある声で、低く言葉を続けた。

「ありますとも、これから重大なご相談があるんですよ。

……ね、奥さん、私は東京へ、昨夜おそく四ヶ月振りで帰って来て、まだ家内にも会わないんです、会えば、その筋へ直ぐ知れる。自首しない内に、刑事に捕るなんて感心しませんからね……」

「奥様も、ご心配なすっていらっしゃるでしようけれど、あとで、わたくしから、いかようにも申し上げますわ……、ほんとに、お可哀想に……」



「いや、可哀想なのは、私の方ですよ。未だこれで私も、気持ちも体も若いんですからね、フッフ……」

「……」

無言で、チラッと上目で視た久美子は、ギョツとしたように目を伏せた。草刈の目が、怪しく輝いているのである。「自首する前に本来なら、第一に家内に会うのを、誰にも知らせずに、奥さん……あなたにお目に掛ったのは、一番あなたの事が気になっていたからですよ。今度の事件だって、何も私がこんなに苦心して、逃げ回らなくてもいいんです。出る所へ出て、早く云うだけのことを云ってしまつたほうが、サバサバするんです。しかし、それでは鈴井氏が、将来社会へ立てなくなるし、従つて、あなたやお子さんも、肩見狭く世の中を送らねばなるまいと、それを思うものだから、今夜ご相談したところが、あなたは、私に自首を止せと云われる……。それもまた一面無理もない話だと思ふが、これからの私は、台湾で十年以上、独りぼっちで、ビクビクしながら暮すんです奥さん……。家内にも会わずにですよ、奥さん……」

「……すみません、ほんとにわたくし、我儘ばかり申し上げて……」

「いや、あやまって貰うつもりで云っているンぢやありませんよ……。ね、奥さん、今夜は、いわば私への、送別会なんだから、うんと慰めて下さるでしょうね?……」

草刈はそう云つて、膝を進めるなり、久美子の手を握つて引寄せた。

「あー、な……何をなさるんですよ!」

真青になつて身を退ろうとした久美子であつたが、その肩へも草刈の手が掛けていた。

「奥さん……送別会をしてくれないんですか……。自首もよしてくれ、家内にも会ふな、直ぐ捕らない所へ行つてくれ、送別会はその嫌だ……。それじゃアあまり虫がよすぎますぜ、奥さん、フッフ……。フッフ……」

草刈の語調も昂奮しているのと、目は情慾に燃えて、ガツシリした体の動きにも、男の烈しい征服欲が表われていた。離れようと一心にもかく久美子を、なおも引きよせようとするのである。恐らく彼は、初めて久美子の、貞淑な人妻の体へ手を掛けたものだろうし、久美子もまた、夫以外の男性に、手を握られて身近く引よせられたのは、生れて初めてだろう。

征服欲と反抗心の争いは、息詰る動きと共に、烈しい火花を散らした。

「送：送別会と、仰言つても、わたくし、何のことか……」
もがきながらオロオロ声で辛うじて呟いた久美子の全身は、人妻としての、異常な恐怖に怯えきつていた。

「まアい、から、じつとしていらつしやい。送別会の意味は、旅立つ人間を慰安することさ。奥さんに、今夜一晚慰めて貰えば、私はそれで満足するんですぜ。ね、奥さん……その位の義務はあるじゃないか。フッフ……」

酒気を帯びた顔は、情慾に輝いて、好色な、愉悅の微笑を漏した草刈は、ピツタリ引寄せた久美子の、衿もとへ、右手を滑り込ませた。

「あッ!草、草刈さん……わたくし……。そ……そんな……」



「長い間、あなたの姿に悩まされたよ。……この胸の……
フフフ……」

「あッ、あッ……そんな……あなた！」

必死に身を守ろうと、もがいている久美子は、余りのこ
とに涙も出ずに、狼狽して、力も、大きな声も、出なかつ
た。衿元へ這込む男の手を外すと、唇が接近してくるのと、
顔と衿を守れば、膝前へ手が迫る恐ろしさに、カッと頭が
逆上して来たし、気もそぐろに、目さえ見えなくなってい
るのである。

「フフフ……フフフフ……」

草刈は、衝動の昂る快感に昂奮を増してきた。女ざかり
の、三十過ぎた人妻の絹衣に、浸込んでいる高雅なジャコ
ウの香——、豊満な、その純粋な素人女の肌の香——、むっと
鼻にくる 粧品や髪の芳香——、そして、着衣越しに感じる
ぬくみと肉体の弾力は、性慾をいやが上に刺戟するもので
あったし、殊に草刈には、久美子の抵抗が快いものに思わ
れた。従来から、その美貌と、肉感的な容姿に思いを掛け
ていて、しかも、一指も触れることのできなかつた人妻だ
けに、今、年来の望みを遂げるチャンスを得た喜悦は、何
か異常な痛快味さえ感じるのである。人摺れのしていない、
淑やかな主婦だけに、驚きのあまりあがっている久美子を、
好色心と精力は、美食を翫味するように、草刈の心へ、享
樂的なものが生じてきたのである。

「あッ、いやッ……」

ハッと膝前を守って、立とうとした久美子が、押されて
横へ手を突いたのと、草刈が唇を求めたのと同時にあった

が、

「ウ——」

と唇をくいしばった久美子は、抱きすくめられるのを、
必死に押しのけ突きのけた。

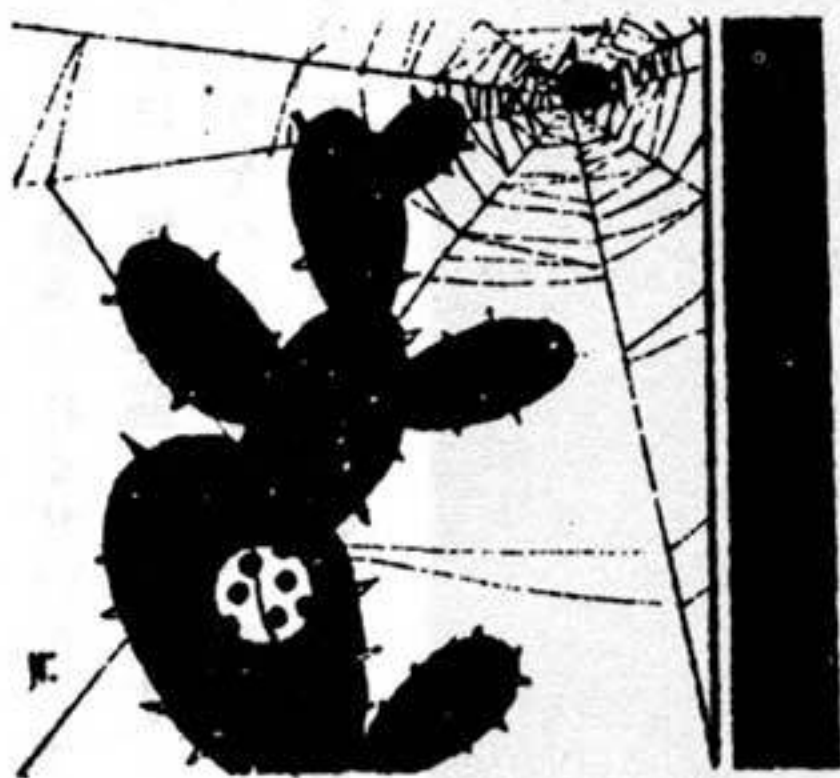
「許してエ！……」

夢中に叫んだ久美子は、立ち上ると、逃げ場を求めなが
ら、追い縋る草刈の手を、払いのけ掻い潜った。だが出入
口は、雨戸が固く閉されていた。

「フフフ……フフフフ……」

草刈勇作は、こみあげてくる歓喜の声を漏して、わざと、
大腿に悠々と、裾も露わに逃げ廻る人妻を、享樂的に——
相手の疲労を待つように、追廻わして行くのであった……

(つづく)



妊婦の魅力

都内・前田 八郎

最近、妊婦の写真集もときどき刊行されるようになり、私のような妊婦マニアにとっては誠に有難いことです。

しかし、ほんとうにマニアの心を満たしてくれる写真というのはなかなか無いもので、結局、自分で撮影して楽しむのが一番のようです。

妊婦といっても、やはり妊娠8、9カ月の丸く突きだした腹のふくらみに魅力があり、眺めているだけでも興奮しますが、撫でてみると、なんともいえない感触で、世の男たちがどうしてこんないいものに興味がないのか不思議になります。

一般に、妊婦は性欲が失われて



いるか、薄いと思われるようですが、そんなことはありません。むしろ、夫たちに敬遠されるせいか、オナニーぐらいでは追いつかないほど性欲が盛んなのです。

私は、そんな妊婦ばかりをハントしては、モーターへ連れて行ってセックスをしてやるのです。妊婦の性器は柔ら

かく充血していて、それは気持のよいものです。相手が妊婦なので、そう乱暴なプレイはさしひかえなくてはなりません。ロープで縛るぐらいは平気です。

乳房が大きくなっているのも、乳房縛りをするにも絶好ですし、丸い腹を強調する縛りも楽しいものです。考えて

みると、妊婦はみんな、医者へ行って両足をひろげて診察を受けるという、ちよつとしたマゾ気分を味わっているのですからSMプレイへの誘導もそれほど難しくはないと思うのです。

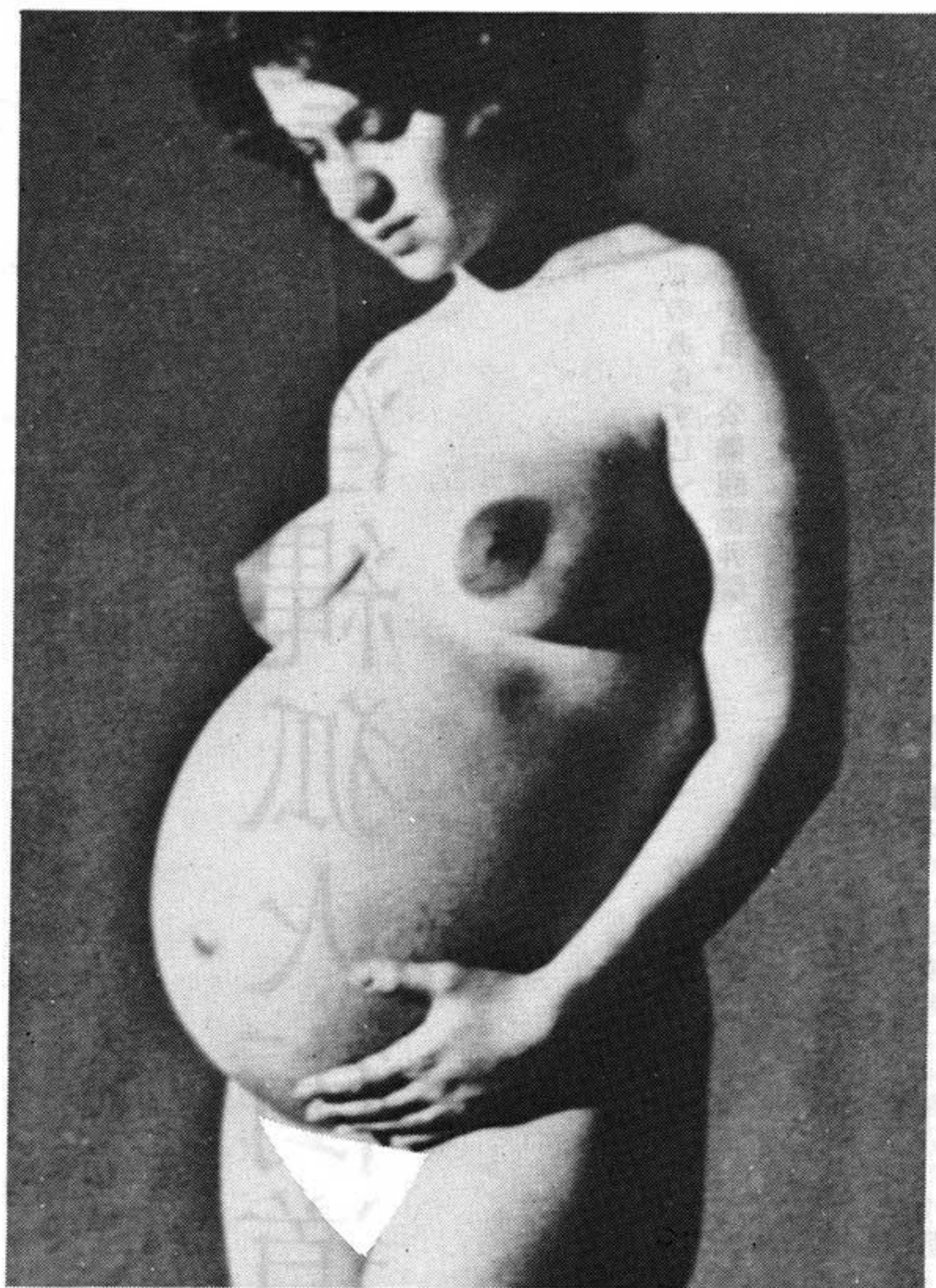
実際、私がハントした妊婦のうち、縛られるのを嫌がったのは10人中3人ぐらいで、あとは、面白そうね、とむしろ積極的でした。

妊婦の体は普通でさえ変形しているのですから、その上、更にロープで縛ると、奇妙な肉塊といった感じになり、妊娠していない女にはない色気を漂わせてくれます。

ただ、妊婦をハントするのはなかなか大変で、私の場合、路上ハントのほかに、妊娠しそうな若妻や、あまり避妊をしない人妻と日頃から親しくしておき、妊娠するのを待ちます。

われながら気長なハント法とは思いますが、結局はそのほうがうまくいくことが多いようです。

私の望みは、妊婦マニアが集まって愛好会のようなものをつくり、妊婦を思う存分楽しむことです。



美濃村 晃

伝記

淫縄狐火街道

第四回

小日向一夢・画

へ前号までのあらすじへ

慶安六年八月二十日、公儀隠密井関半九郎は、隠密旅の途次ふとしたことから丹波福知山四万五千石の城主稲葉淡路守紀通の発狂自刃を知る。稲葉家城代家老の黒岩図書は藩主発狂自刃の場合は稲葉家は廃絶となることを察知して藩の御用金三万両を、由良ヶ岳山中の赤洞山に埋めたのだった。その隠し金の絵図面を城代家老に預けられた狐火のお紺は、お家再興のために絵図を江戸の本家に届けに行くことになる。

色

鬼

「じゃあ、そろそろその、女盛りのいい女ってえのをいただきに行くとしようかい」

女に飢えている権太は兄貴分の八助に云われて富田屋の土蔵の二階へ行こうとしていた。

この男は、浪路を裸にしていたぶつているうちに淫らな欲情のとりことなり浪路を抱こうとしたのだが、

「その女は隠密番頭井関半九郎さまにさし上げる女だから抱くことはやめろ

／＼

と、八助に止められたのである。

八助は、

「おめえと俺との二人の楽しみのために土蔵の二階にはちゃんと二人の女が閉じこめてあるんだ。安心して腰の抜けるほどやってくるがいい……」

と、けしかけたものだ。

「て、へへへへッーあにきはたまらねえことを云ってくれるぜえー二階にいる女と腰の抜けるほどやってこいだって……へ、へへへッ

こてえられねえなあ……」



びつしよりのお紺

その、土蔵の二階の中央の大黒柱には、二人の女が真っ裸のまま縛りつけられているのだった。

「・・・あッ、い、いたいッ。お紺さん、何とかしてッ、ああ痛いッ！」

「小雪さん。そんなにもがくから縄が肌に食い込むのよ。あたしのようにじっとしてればこんな縄くらいそれほど」
のこたあないのさ」

お紺は、若い小雪が丸裸にされて縛られたことに気が動転してしまっているのをなだめながら、気分を落ち着かせようとして必死になっていた。二人が気分を落ち着かせてこの土蔵から逃げ出すことを考えねばならないのだった。

「お、お紺さん！」

と、小雪は声をあえがせてお紺に助けを求める。小雪は若いだけにこのような場所でまる裸にされて縛られている不安に耐えられなくなっているのだった。

「小雪さん！し、しっかりするんだよ

ッ」

お紺は、若い小雪をはげますことで
せいっぱいだった。

「あ、あッ！男たちがここへ上ってき
ますッ！お紺さん、ど、どうしたら
いいんですッ

権太が、淫らな笑いを浮べながら階
段を上ってきた。

「へ、へへへへッ。おッ、あにきの
云った通りだ。女が二人もいやがるぜ、
フへへへ」

「な、なにをしようと云うんだいッ！
ちくしょうッ、あっちへお行きよッ！」

お紺は強気に言いはなったが、二人
の女の裸を見た権太は、禪を突っぱら
せて動こうともしないのだった。

「へへへ。おいらの女はどっちだいッ」
眼を血走らせてギラギラさせている
権太はすぐお紺を見付けた。

「ああ、おめえだな？女盛りでたまら
ねえからだをしてるってえのは？へ、
えへへへへ」

「ああッ！な、なにをするんだようッ
！」

「なにをするたあ知れたことだア：お
めえを抱いてむりやりにたまらねえこ

とをやりに来たのさ。さあおとなしく
やらせろ！」

と、権太はお紺の乳房をわしづかみ
にして迫った。

「あッ！よ、よしておくれよッ！」

お紺は男の手をふりはなそうとする
が、縛られているかなしさでどうする
こともできないのだ。

「へ、へへッ。たまらねえ手ざわりだ
ア」

権太は、お紺のムッチリとした乳房
をゆっくりともみしだきながら、

「おら、乳首をしゃぶってやるぜ！」
とポツチリと突き出た乳首を唇に含
んで舐めはじめる。

「あ、あーッ。い、いやーッ！」

お紺は、男のいやらしい右手が固く
合わせた太腿の間にねじり込まれるの
を感じて思わず身をひねった。

「ふふ、おとなしく股をひらきな。う
んとたまらねえ目にあわせてやるぜ」
「う、うッ！ち、ちくしょうッ」

「ふ。そうして強がっているな。いまに
いい声で泣きはじめやがるぜ、へ、へ
へへへッ」

権太はさも勝ち誇ったように、ニタ

ニタと笑いながら、指をまげてお紺の
花芯にふれてくる。

「あ、あッ！そ、そんなところを！」

「おめえ、そろそろぬれはじめてるん
じゃねえかい？」

権太の指先がお紺のしこりを剥き起
こし、太い中指はふるえる花芯をなぞ
りながら花びらをむきあげる。

「へッ。おめえもうびっしよりじゃね
えかよう」

「く、くやしいッ！」

お紺は、権太の指先でなぶられただ
けでそんなになつたわが身の弱さをの
ろった。

「おめえ。辰造親分とも寝たってなあ
……へ、へへへッ」

「けッ、ち、ちくしょうッ！か、勝手
にしやがれッ！」

「そう云う声が、もう鼻にかかってき
ているぜ、おいお紺、こうされると気
持がいいんだろう。ほれ、ほれ！」

「ああ、う、うッ！。ひいひいッ」
必死に耐えようとするものの、近郊
の女泣かせで通っている権太の達者な
指使いにかかつてはどうにもならな
かった。

「う、うッ、うーん、くううッ……」

気を張りつめて、権太の誘いにのらないようにしているのだが、権太はしつこく弄んでお紺を休ませない。

「ほれほれ、ここの肉豆を、こうして下からなぞりあげられると、ほら、たまらねえだろう」

男は指にべつとりと唾液をぬりつけて、そのヌラヌラした指先でたまらなところを、

「ほーら、ほらッ」

と、撫で上げ撫でおろしするのだった。

「ひいッ！ひいひいッ！」

思わずお紺の口から漏れる悲鳴。

「へ、えっへへへへ。たまらねえなあ……いまにおいらの太いのを入れてやるんだからなあ……それまで泣きながらがまんをしていなよ、………て、へへへッ」

権太は、もう待てなくなって禪の横から赤黒く猛りきった醜悪なものをむき出しにして、

「ほら、どうでえ………これで泣かせてやろうか………へ、へへへッ」

と、お紺の眼の前でわざとふりたて

て誇示するのだった。

「俺のものの味を知ったら、どんな女だってヒーヒー泣きわめいて腰が抜けてしまうんだぜ………ほら、どうでえ、そら味わってみるかよ………フ、へへへッ」

権太の顔は欲情に燃えて赤鬼のようになっっていた。

「よ。もっとこっちへ来なよ」

縄尻をとってひき寄せられると、お紺は逃げ場がなかった。

「へへ。ビチョビチョじゃあねえか。おめえがこんなに悦んでるたあ思わなかったぜ」

抱きしめて、乳房を吸いながら、指を股間に這わせてくる。

「あ、あッや、やめておくれッ」

「へッ、なにを云ってやがる。からだは悦んでいるじゃねえかよ」

権太は落着きはらって、ゆっくりと指を亀裂になぞらせて上下させる。

「う、うーうッ」

お紺は、ガクガクと体を反応させて悩ましい声を漏らすまいと眉根を八の字によせて喘いだ。

「へ、へへッ。こうされると今にも声

が出そうになるだろう」

「あはッ！あはァーッ！」

お紺の切ない声が土蔵の中にひびいて、傍にいる小雪をハラハラさせるのだった。

「お、お紺さんッ！し、しっかりしてッ！」

「おめえは黙って見てればいいんだ。あとで八助あにきがかわいがってくれるぜ」

権太が小雪の頬をひっぱたくと、小雪は、

「ひいーッ！」

と泣いてつつ伏してしまった。

「あッ！小雪ちゃんに手を出すと承知しないよッ！」

と、お紺は強がってみせるが、息が切なげにはずんでいるのだった。

「お紺よう。他人のことより、おめえのほうが身体に火がつかかかっていたんじゃねえのかよう………え、おいッ！」

指をなめずりながら権太はもう一度お紺の股間を撫でおろし肉豆の周辺をこねまわしはじめなのだ。

「ふうッ！ふうッ。ふうーん」

指を、円を描くようにゆっくりまわ

されるとみるみるうちにお紺はうわず
ってくる。

「あ、あ、あーッ」

「へ。へッ／またあふれさせてきやが
ったぜ」

権太の分厚い唇がお紺の乳首を吸い
はじめると、お紺はもう耐えられな
かった。

「ああ／、も、もうなんとかしておく
れよう……ふうーん、た、たまらな
いよう／」

「へへ。もう腰がぬけそうだなア、お
紺よう」

お紺は、乳首を吸われながら同時に
肉豆をむき上げられて周辺をなぞられ
ると、地獄のような快美がつきあがっ
てくる。

「はアッ／ハアッ／ふうーッ。む、む
ッ」

こんな厭な奴にこんなにされて気を
遣ってなるものかと、お紺は必死にこ
らえているのだったが、どんなに気を
そらそうとしても、権太の責め巧者な
指の動きの前には、女盛りのお紺のか
らだはおそろしいほどの反応を示して
濡れそぼった。

「へ。こうされるとたまらねえんだろ
？いますぐにほんものを入れてやるか
らな」

「ふうん／く、く、くうッ／あはーッ
／」

「たまらなかったら、おねがいします
と云うがいいんだ。それ、それ……ふ、
ふふ」

権太の奴は、お紺を絶頂寸前まで追
い上げては楽しんでいやがるのだった。

辰造の小雪なぶり

「まあ、お遊びはそれくらいにしてお
いてだ……この女達への用件をまず
済ましてしまおうじゃねえかよ」

そう云ったのは、つい先刻まで土蔵
の階下に居て権太がお紺をいたぶって
いるのを待っていた辰造だった。

辰造は井関半九郎の命をうけて、稲
葉家の腰元小雪と浪路が持っているは
ずの隠し金の絵図面を探しにやってき
たのである。

「そ、そりゃないぜ、親分ッ／」
もう一步のところでお紺を抱けると
いう寸前だった権太は、べそをかい

いやがる。

「ばか／ふんどしからはみ出している
ものを片付けろッ／」

と、一喝しておいて辰造は、小雪の
傍にしゃがんでやんわりと訊ねた。

「ああかわいそうに。若え娘がこんな
羞しい姿にされて縛られて……おめえ
さんは、福知山藩のお腰元衆で……
えーと、たしか……」

「小、小雪ですッ／向うに居るのは浪
路さまでございますッ／た。たすけ
てッ／お助け下さいましッ／どなたさ
まかは存じませぬが、わ、悪者にとら
われて困っておりますッ／おたすけをッ
／お、おねがいたしますッ／」

と、素っ裸の身体を床にすりつける
ようにして叫び哀願した。

「ふ。ふふふ。ふふふッ／ 早やま
っちゃあいけねえなあ。まだ何も助け
るともなんとも云ってねえんだぜ。う、
ふふふッ／」

「あ、あッ／」

小雪は、敵か味方かわからぬ人物に
助けを求めた迂闊さを後悔したが、そ
れはもう取り返しがつかなかった。

「ふむ、やっとながつかないかい。おめ

えをいま助けてやるわけにはいかねえ
んだよう……く、ふふふッ」

「な、なんとッ。し、痴れ者ッ！」

齒がみをして口惜しがる小雪。

「おめえさんが持っているはずの絵図
を出してもらおうか！」

「えッ！そ、そんなものは持っていま
せぬ」

「くそッ！早く出さねえと痛え目をみ
ることになるぜ！おいッ」

辰造は、小雪の縄に締められた乳房
を見ながら、ニタリニタリとして云っ
た。

「お紺の裸を見るのも久しぶりだが、
こんな若い娘っ子の毛の生えたまんじ
ゆうを見るのも久しぶりだぜ。へ、へ
へ、お紺のような女盛りを責めるのも
いいが、おめえのような若え女を責め
るのも……へ、へッ」

辰造め、小雪のむきだしのおしりを
そろりとなでて舌なめずりをしやがっ
た。

「きやーッ！」

「へ、へへ。大きな声を出すじゃねえ
か、まだおれはなんにもしないねえの
によう」

辰造は心の中で、この女は責め甲斐
があると秘かにほくそ笑んだのだった。

「なあおめえさん、小雪とか云ったな
あ……」

「は、はいッ」

「おめえ、福知山を発つとき、城代家
老の黒岩図書に、何か絵図のようなも
のを預かってこなかったかい？」

「えッ？そ、そのようなものは、存じ
ませぬ……」

「やい小雪ッ！正直に云わねえと痛え
目を見ることになるんだぜ！おい、聞
いているのかようッ」

辰造は、手にした弓の折れでピシリ
と板敷きの床を打った。

「あッ！」

小雪は、わが身を打たれたようにピ
クリとふるえてとび上った。

「あ、あッ！そ、そんな山地図など渡
されておりませぬッ。し、知りませぬ
ッ！」

「うふふふッ。そうだったのかい、
それでもう白状したも同じだな。われ

われの探している絵図面は、山地図だ
ったという訳なんだな、ふふふッ」

「そ、そんなッ、山地図など何の関り

もありませぬッ！ちがいますッ！」

「まあいいさ。そのあわて方を見た
だけで、山地図が、おいら達の探してい
るものらしいと判ただけでもありが
たいのだ……ふふふ」

「あ、あッ！く、くやしいッ……」

小雪は、ふと何気なく漏らしたわが
身の失言を悔んで齒ぎしりする思いだ
った。

「さて、その山地図が、どこにあるの
かを言ってもらおうかい」

「う、そ、それは……」

「ふん。正直にしねえと、痛え目を見
ると教えたはずだぜ」

「あ、あッ！そ、やめてッやめてくだ
さいッ！」

辰造が弓の折れを持って立ち上った
ので、小雪は打たれるものと勘違いを
しておびえた表情であとずさった。

山地図詮議

「こんな小娘の一人や二人を白状させ
るにやそんなに手間もとるめえが、こ
れで山地図が井関さまの手に入れば、
三萬両の隠し金のご褒美はタッピーと

載けるはずだぜ」

と、辰造は、自分にもみんなにも聞かせるように云ってニヤリとした。

この土蔵の二階には、脇本陣富田屋の悪番頭八助と、逢坂山のかご屋の権太が、素っ裸のお紺と小雪の縛られた姿を眺めながらニタニタしている………

……という場面だった。

「ぶ、無礼なッ！こ、この縄を……ッ！」

と、縛られた裸身をくねらせて必死に縄から抜けようとしてもだえる小雪は、今年十八になったばかりで、福知山藩の腰元中では随一と云われた美形だった。

「け、へへへッ。この女は年が若くていい女だから、辰造親方がどう責めるのか見ているのもおもしれえや……へへへッ」

権太は、先刻お紺とやりそこなっているので股倉のものはもう石のように固くなって、ピンピンしているのだった。

「ああたまらねえ。イキのいい素っ裸の女を二人も目の前に見ながら抱けねえなんて、こりや地獄だぜえ………くそッ！せめてさっきのお紺と腰がぬ



けるほどのやつをやったときやよかったなあ……ああたまたねえたまたねえなあ………

と、権太の奴は、女を見るとすぐにもとびかかってきそうな眼の色をしているのである。

そんな男たちの中に、小雪は手足を縛られてすっぱだかのまま投げだされていたのである。

「さあ、その山地図とやらをここへ出してもらおうか！」

辰造が、小雪のあごに手をかけてグイと仰向かせる。

「あーッッし、しりませぬッ」

「へッ、まだ強情を張ってやがる、どうしても痛い目にあってえんだな！ちくしょうッッ」

辰造は、弓の折れをふり上げて小雪を打とうとしたが、

「おっとっとと親分、待って下せえ」

「なんだ、八助。どうして止めるんだ」

「へへッ、親分の前ですがね、弓の折れでぶっ叩いたところでこの女は白状なんかしやしませんよう」

「じゃあ、どうすりゃいいんだ！」

「女には女の責め方がありまさら、こ

の武家娘は、おいらと権太の二人にまかせてくだせえ。きつと白状させてみせまさら」

八助は自信ありげにそう云った。

「ふむ。で、どうするんだ」

「へえ。手と足を同じ縄で縛って左右に引っばいに抜げるかにしぱりというのにしてやるんですよ。これをやられると、たいていの女ははずかしくて息もできねえくらいになりますんで……へ、へッへへへッ………」

「ふんふん。それでも白状しないときはどうするんだ」

「へへッ。このあたりで、たいていは白状するんですがねえ………それでも白状しねえときには………」

「ふむ、そのときにはどうするんだ」

「へ、へい、そのときにやあ………」

蟹縛りのままでオ○○○いじりをやりますんで………へ、へ、へへッ。若え女で権太の奴の豆いじりにかけられて、ヒーヒー泣かなかった女はいませんや。権太の奴は指で駄目だとなると、おしまいには舌まで使って責めやがるんでさあ」

八助は、権太の豆なぶりのありさま

を辰造に話してきかせた。

「そりゃあ、はじめのうちは豆しやぶりの責めをやられる女は気持ちよくてうっとりしていますがねえ………うっかり一度気を遣ったら最後でしてねえ。そのあと、二度も三度もむりやりに気を遣らされるのはもう地獄の拷問と同じことださあ………へ、へへッその地獄責めを、この小雪という小娘にやろうと思ってるんで………」

と、八助は云った。

「うむ、おもしれえや、ここで見ていてやるから、その地獄責めとやらをやってみせてもらおうかい。けへへおもしろそうだぜ」

辰造は舌なめずりをしてすわり直した。

(次号につづく)



S M 天国・飛び歩る記

尻立て開脚の絶景

賀山 茂



《編集部より》

本誌では、賀山茂氏に「ロープ・ハント」をお願いしていますが、今月号から、そのハント域を広めてもらい、全国行脚の意味をこめて「S M 天国・飛び歩る記」として、更に活躍を期待しています。今後も、賀山茂氏や縛悦介氏らに続くハンターの出現をお待ちしていますので、どしどしご投稿ください。

われわれSM人種にとって唯一の灯であった「奇譚クラブ」(旧誌)が廃刊になってから幾年月……。

その頃はまだSMという文字はポピュラーでなくSMは一部の人のシークレットなお遊びであった。生まれ乍らの「SMっ子」である私は辻村隆という良友をえて全国的にSM行脚を始めることができたのである。

さて東京を皮切りに私のSMアルバムをひもといて皆さんにお目にかけてよう。

SMプレイもひと通りこなした私は形だけのSMにはあきたらなくなり、此の道の人に会うたびにMっ気のある女性はいないだろうかと声をかけていた次第でした。或る日モデルクラブを経営している宮村さんから電話がありSMプレイの出来る女性を紹介しましょうという事で気の変らない中にと昼食を一緒に食べる約束をしました。早速モデルクラブにかけつけますと宮村さんが、「どうも、賀山さん、昼食は何にしましょうか」と声をかけるので例により女性優先で女性の好みにまかせましょうと申しました。女性がさっぱりしたものが良いそうですと云って結果は日本そばを食べるハメになりました。ムードも色気もない近所のそば屋に飛び込みました。宮村さんは「賀山さん、こちらが竹井朝美さん

です。竹井さん、こちらが縛りの好きな賀山さんですよ」と簡単に紹介します。私は竹井さんが普通の平凡な女性ですので何やら期待はずれでガッカリしました。やけ食いでザルそば二枚食べた私達は満腹の中に店を出ました。宮村さんは、私は用がありますのでこゝで失礼します、と歩き出すので、私が声をかけようとする、と、「大丈夫ですよ」と一言いってスタスタと行ってしまいました。私は何はともあれ、竹井さん、車がそこにありますので行きましょうと声をかけますと彼女は私と一緒に行動を予定していたように黙ってついてきます。

車に乗ってハンドルを持つなり住所はどちらと聞きますと「横浜です」と云うので湯島のホテル街の方面へ向いました。「SMって知っていますか」と恐る恐る尋ねますと「ええ」

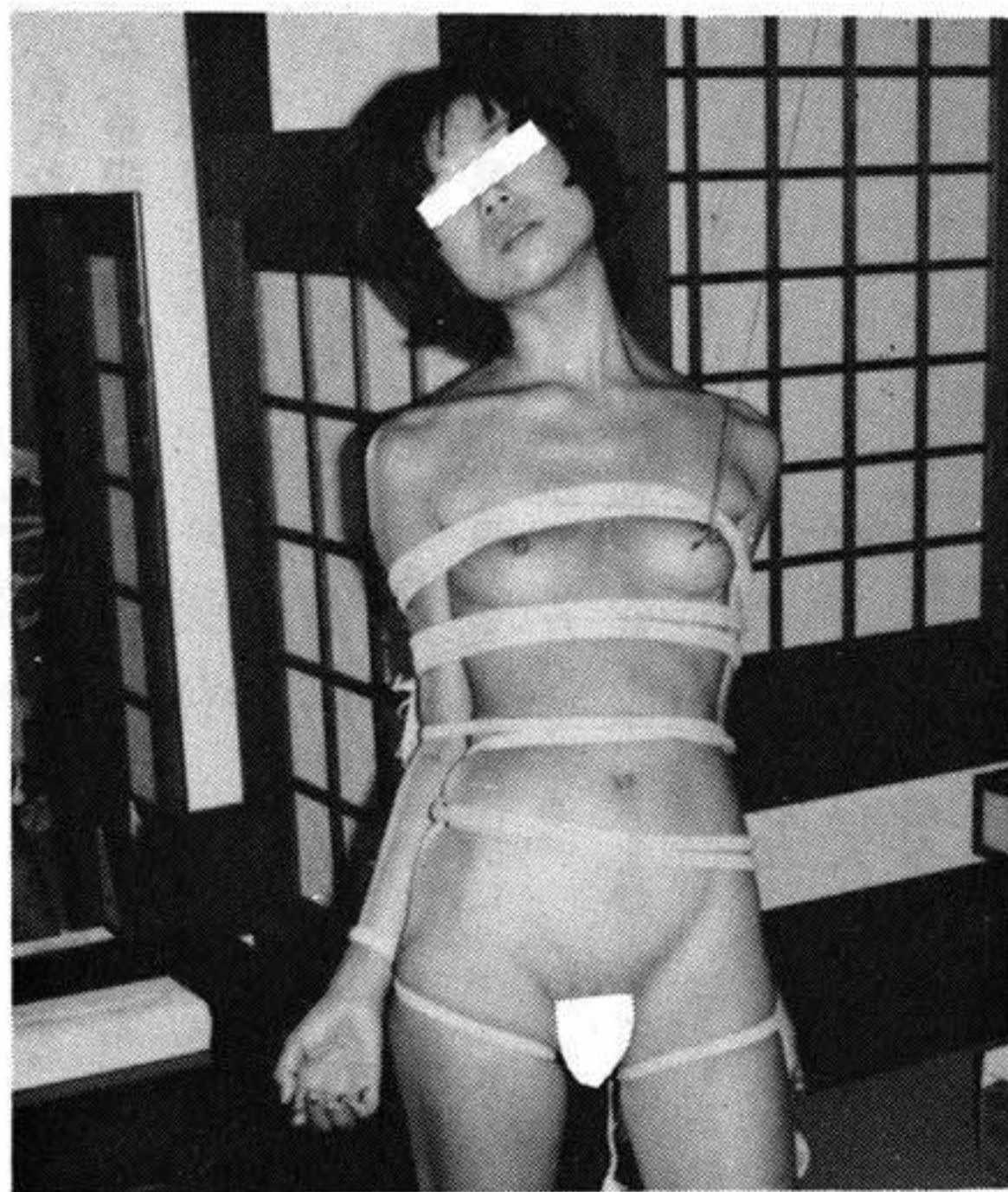
と答えるので続けて「やったことありますか」と云うと又しても「ええ」と云う言葉が返ってきました。びっくりした私が「本当ですか、きついのですか」と問いかけますと「縛って吊されたことも有ります」と言葉少なめに答えるのです。たんたんとした彼女の表情に何か感じた私ははてな、とわけがわからないのと期待感とが交錯してきました。期待が裏切られてもしょうがないと心を決めた私は行きつけのホテルの好みの部屋を指定しました。

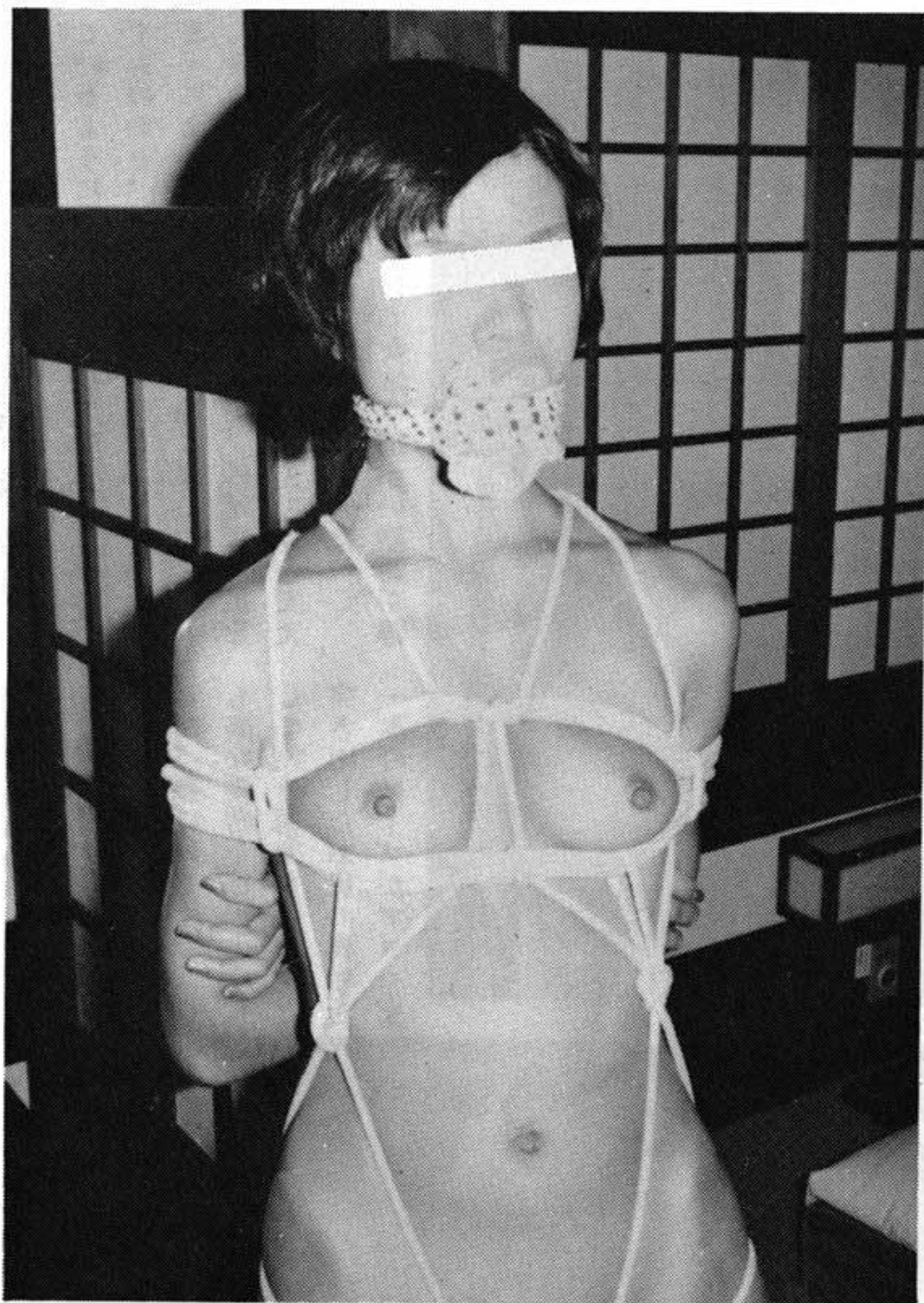


竹井さんには一風呂あびて貰い、私はビールを立て続けに二、三杯飲んで景気をつけました。本音をはくと余り好きなタイプでないと丸つきりコミュニケーションがないのでSMに対する気持が不安であるので盛りあがらないのです。しかし、事ここまで来たらやめるわけにもゆかず神にも祈る気持で心を鬼にして彼女に立ち向いました。湯上りの彼女をそのまま中央の柱に立ちポーズで遠慮なく縛りつけました。竹井さんこれがSM流の貴女

ウ人形のようなです。ご挨拶の縛りも終り、なかなか手答えがあるので私はニッコリしてなかなかいけそうだねと声をかけて見ました。こうなるとがぜんSMの虫がおき上ってきて、再び乳房の上下をぐるぐる巻きに縛りサラシ責めのスタイルにして2本目のビールの栓をぬき彼女を眺め乍らコップをあけます。飲み乍ら勝手な言葉を投げかけ、いたぶりを始め

かにひたっている風情です。これに勢いをえてゴムテープを持ち出し、彼女の左乳首に輪をひっかけ無惨にも吊しあげました。一ぱいに引張りあげたので、さすがに苦しく初めてウメキ声をあげました。私は一切お構いなく股ナワを掛けて暫らく放置をして置きました。時間がたつにつれ、彼女の表情は微妙に変化してきて、耐えているという彼女のM性が表





に出てきました。私は改めて宮村さんが大丈夫ですよと言いのこした意味がわかったのです。

自信がわいてきた私は柱を中心に縛り方をいろいろ変えて彼女を眺めることにしました。賀山流の縛りの特性はあくまで縛り方は綺麗でなければならない。従ってナワ目は常に対称的であり、それによって女性の美しさを引

き出すことにあります。

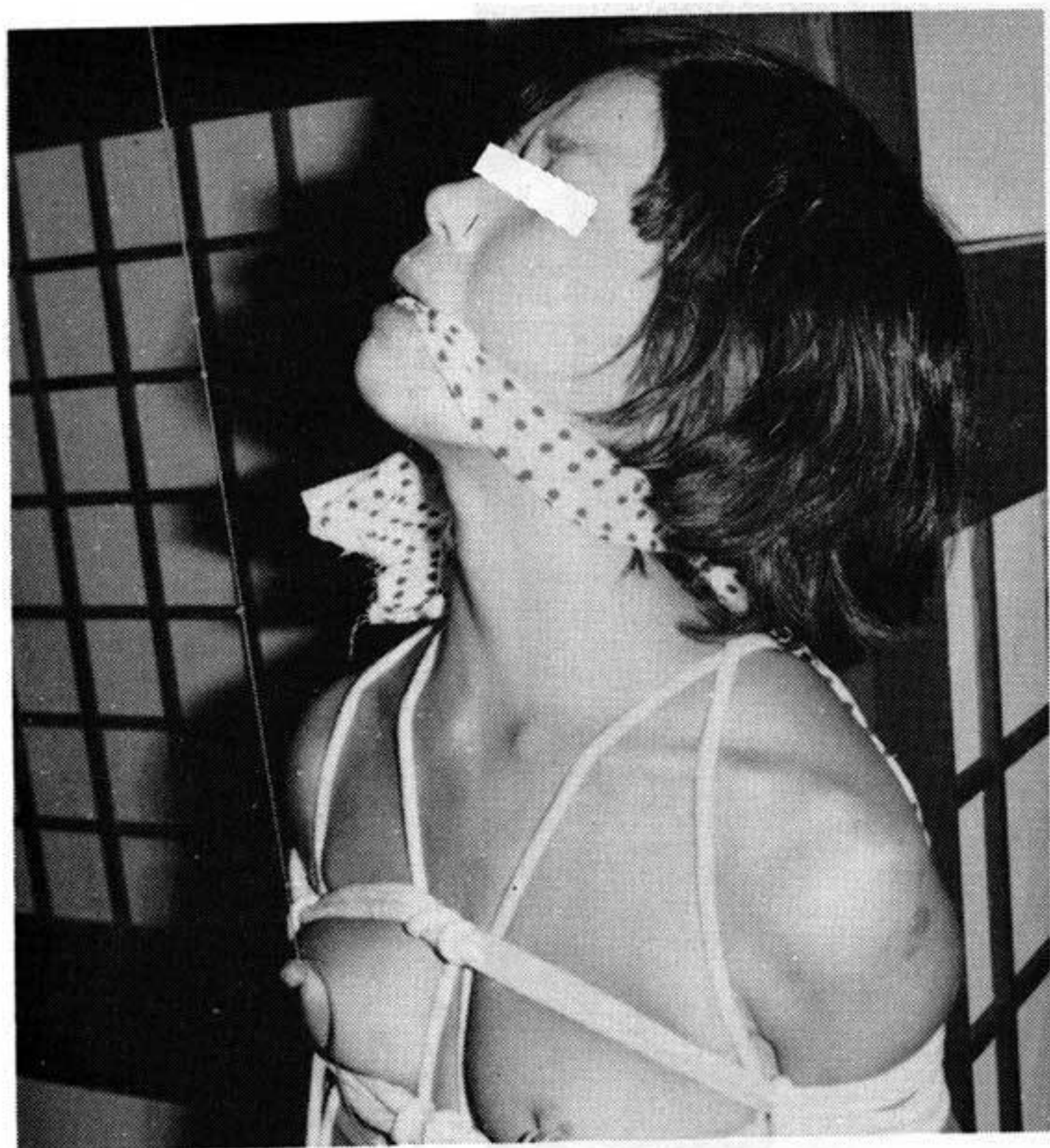
おもちゃをあてがわれて喜々として遊ぶ子供のようにならぬ夢中で彼女を縛り、無心にナワ掛けしている私を、この人はどういう人なのだろうと、くい込むような目付きで彼女は私を見つめます。私はじっと見られ何かでれくささもあり、再びゴムテープを持ちだして「右のオッパイもやってあげなければ不公平

だなあ」と右の乳首を乱暴にゴムテープで吊しあげました。彼女は痛さのあまり私を見つめる余裕がなくなり、目を閉じてジッと耐える姿勢に戻りました。

再び調子にのった私は右の乳首だけでなく左の乳首にも苦痛をわせるために、左乳首に今度は洗濯ばさみを取り出しガツチリとはさみ込んでみました。あっと云う悲鳴をあげ、左右の乳首を同時に違うパターンでいじめられているので全神経が乳房に集中して一生懸命こらえているのを見て、朝美さんに初めて愛情を感じました。

時間がたつにつれ、左右より攻めこんだ股縄が異常に痛い込んでいき苦しさは下半身にも襲ってきたようです。腰をこ刻みに動かし始め苦痛をうったえる朝美に好みのタイプではないと云うこと等はもう問題でなく、たゞMおんなの美しさを体全体からあふれさせておりました。勿論、言葉などかける余裕はなく、柱から解放してやろうと近づいても朝美はなす事なくじっとしています。青ずんで小さくなっている乳首を見てクリップとロープをとってやりますとくずれるように畳に坐り込んでしまいました。

負けず嫌いなのか顔だけは上にあげて目は大きくあげ、天井の一端をにらんでいるよう



です。しかも、口もとを見ると苦しさを訴えているように息をはずませています。私は許すものかと、そのまゝ、追い込むように後手のまゝによつん這いになれと命じました。

朝美は不自由な姿勢ですが、必死に手足を動かして頭と左右のひざとつま先で体を支えて、なんとかよつん這いになりました。

凹凸がハッキリして女体の細かい陰影が浮

きぼりにされ、神の作った造形美の偉大さを
知り、女体の神秘を見い出しました。改めて
乳房と共にお尻の持つ美しさを発見したので
した。畳に体をすりつけるようにして少しで
も楽な姿勢を保つように
している朝美を見ますと
突き出したお尻の真中を
一本のロープがアヌスを
かくすようにして女の急所を割るようにきび
しく食い込んでいます。とっさにそのロープ
に手を掛け、持ち上げる動作をしました。朝
美はヒィッと云う声と共にたまらず下腹部を





天に突き出すように出来るだけ高くして少しでも痛さからのがれようと思いました。必死に努力し、耐えている朝美はいじらしく思え、また大変可愛い此の世の最高の女だと思いました。今までは全体的にフラットな体だと思っておりましたが意外に立派なお尻を見せられ、縛りでなければこの美しさはどうてい出せないことだし、やはりSMだなあと自らSM礼賛をしてしまいました。

朝美「おまえの〇〇〇〇ちゃんがかわいそ

うだぞ、こわれちゃうぞ」

「さあ、何んでも云うことをききますと云えば許してやるぞ」

朝美は苦しそうに顔を動かしてわかったという感じを出しておりました。私は「反抗する気だなあ」とわざと知らん顔をして朝美のお尻に手をかけロープを引っ張りあげますとたまらず「ハイッ」と云うのでした。「ハイではわからない。ハイ、何んでも云うことをき、ますと云いなさい」

朝美は仕方なさそうに「何んでも云う事をき、ます」と小さい声で答えました。

朝美が全面降伏したという事で私は朝美のヨコにどっかりと腰をおろして、改めて朝美の体を見廻し奴隷になった朝美の検査を始めました。上下にきっちりとなワ掛けされている乳房に手をふれ、もみ出すと同時に右手で背骨を上から下へなで廻すようにしてアヌスの所までくすぐりますと体をよじるようにして逃れようとしませんが、ガッチリとロープで固定されているので体をよじるのがせい一ぱいです。私は体勢をかえて左右に開かれている朝美の両足の真中に坐りました。肛門科の先生よろしくアヌスなぶりを始めます。お尻の左右に手をかけアヌスを開きますと、目の前三十センチの近くに鮮かな朱色の小さいつぼみが小さく息づいており、思わずキッスをしてしまいそうでした。更にその下にはロープがくい込んでいる湿地帯がやわらかそうな林とともに展開しております。ロープがくい込んでいる左右の丘を撫でるとわずかなはずみを手の指に感じました。私は今日のフィナーレに朝美の剃毛を実行しようと思いました。朝美に話をすれば「いや」という事はわかっているのでもき、ます」といったのをよいことに事後承諾の形でやってみようと

決意しました。今日あったばかりの朝美であり、抵抗できない姿勢が良いので四つん這いのまゝ、やってみることにしました。股縄が掛けてあり、なかなか作業がはかどらず、皮膚のやわらかい所なのでキズをつけてはいけな
 業を終了しました。ロープを全てほどいて朝美を浴室につれて行き、シャワーをかけて大
 事は部分を綺麗に洗ってやります。私は充分に満足しており、まさかこれだけの成果があがるとは考えてもおりませんでしたので「朝美ちゃんお疲れさま今日は大変満足しました、有難う」と云いました。朝美は「ハリから吊されると思っていました。正直い



って腰を少し痛めているので吊りをさせたらキツイなあと思っていました。今日ぐらいのプレイなら大丈夫です」私はこの小さな体のどこにM性がかくされているのか、わからないので是非これから交際をしましょうと朝美のくちびるにキスをしました。

朝美もすっかり気を許したのかキスに答えてくれるので浴室で二人は抱きあい、ペッティングを始めました。

私はSMとセック



スを別の次元で考えておりますので、あわてて作業を中止して二人ならんでタイルの浴槽のフチに坐ることにしました。「朝美ちゃん、セックスは好きかな嫌いなかな」と云いますと「少し好きだけれども私のあそこの構造は非常に浅いのです、だから男性自身が入ってくると気持ちが良いより痛く感じるので、性行為そのものよりもタッチプレイの方が感じます」とハッキリと云います。

先程までの朝美はどちらかと云うと、物も

しやべらず静かな感じでしたので多分SMプレイで興奮したのではないかと思いました。私はあつかましく「朝美ちゃん、最後に一つお願いがあるんだが是非やって下さい。剃毛されて綺麗になったところでオシッコを見せて下さい」というと、朝美は一寸考えるようにして「私、まだ人に見せたことないしトイレに行かないと出ませんよ」と云うのです。私は「未だ一度も放尿シーンは見たこと

ないの出なくても良いからやって見て下さい」となおも頼むと、やっと承知してくれました。タイルの床にトイレスタイルで坐りましたが、どうやら小便をする気分になれないうと音と共にタイルがぬれてきたので

朝美はどうとう放尿シーンを私に見せてくれたのです。SM万才！

涼子 繚乱

巴鳥訓右

切腹、せつぷく、セツプク……一つの言葉をいろいろに発音してみても、どうしてこんなに胸に迫るものがあるのでしょうか。

女、それもまだ二十才すぎたばかりの娘の身で、こんな言葉にこれほど魅かれるなんて

——でも、この言葉を口にするときの、胸の高鳴りはどうしても抑えきれないのです。

夜ひとりの部屋で、しんと静かな気持ちになって眠りに就こうとするとき、思わずわたくしの唇から、吐息のようにせつなくもれる独り言。

——ああ、切腹したいなあ……

そして次の瞬間、胸が高鳴り、こめかみが疼くほどに血の流れが沸き立つのです。

わたくしは右手で堅い握り拳をつくり、左のてのひらは、ためらいがちに、なめらかな腹を直かになでさします。水がにじむように心の奥ふかくからにじみ来る想い、それは——ああ、早く切腹したい、一とおもいに、そして心ゆくまで、この、なめらかに張りみ

ちたおなかを、われとわが手でかき切ってしまいたい——

というねがいなのです。

はやる心を抑え抑えて、わたくしはいくたびか腹なでおろし、またなであげて、心のうずきのなかで眠りを求めます。

わたくしの心の耳に、もう一人のわたくしの声が忍びやかにきこえるようです。右拳を腹の中央においたとき、

「涼子、もういいでしょう、お眠りなさい」と。けれども月のうちの幾日かは、わたくしはその声にさからいます。

「いやよ、涼子は切腹したいのよ、もう早く切腹したくて、どうにもならないのよ、眠れるはずがないわ」

ひそかに心の中で呟いて、わたくしはガバとはね起きます。勉強机の下にかくしてあるカートンを引きずり出します。そこには腹切り支度一式がしまい込んであるのです。

白い布をドレッサーの前に、少し離して敷

きます。それは三尺四方に広がるのです。その上に、ドレッサーへ寄せて三宝をすえ、そのまた上に擬刀をのせます。擬刀は白木の短刀作りなのです。白いハンカチをふうわりとかけます。

わたくし自身は、はしたないことですが、純白のショーツ一つで、その白布の中央に坐ります。ドレッサーは、ちょうどわたくしの膝前ちかくすえられている三宝まで、鏡面に映しています。桜いろの頬が少しづつ上気して来ます。

眼をとじて、今はこれまでとばかりに、——今こそ年来の宿願どおり、わたくしは切腹します。われとわが腹、みごとにかき切ってみせます。

わたくし自身に云いきかせながら、双のてのひらで、胸乳をおさえ、はずむ呼吸をととのえます。そのとき、

「そんなに切腹したいのね、へんな涼子」

もう一人の涼子の声がきこえて来ます。

「ええ、もうこうするほかに涼子のみちはないのよ、第一、そうしたいのが涼子自身のねがいなのよ」

「じゃあ、早く切腹なさいよ、本当はこわいんじゃないの？ こわくて腹が切れないからそうやって恰好だけつけて、胸を抱いてごま

かしてるんじゃないのかしら？」

「まあ、ひどい、あんまりよ、わたくしはただ心の高ぶりをおさえようとしているだけじゃないの、口惜しいわ、心しずかに切腹したいからこそ、こうしてはずむ呼吸をととのえているだけよ」

「おかしいわ、切腹したくてしょうがないんでしょ？ だったら何も考えずためらわずに切腹しちゃえばいいのよ、こわくて震えるんじゃないの？ その手は」

「云ったわね、じゃあしっかり見ているのよ、眼を逸らしちゃ駄目よ、涼子は、切腹するといったら本当に切腹するんだから……」

わたくしはカッキリ眼を見ひらき、鏡のなかのわたくしを見つめます。

「眼なんか逸らすもんですか、本当に涼子が切腹するかどうか、しっかり見張っていてやるわ」

「まあ、いやな言い方ね、見張るだなんて、見届けると云ってよ」

「じゃあ、見届けてあげる、さっさと切腹なさい、口先だけでなく、本当に切腹するのよ」

「涼子の切腹、このとおりよ、しっかり見届けておきなさいね、いい話の種になるわよ」

わたくしはいよいよ切腹するのだ、そのほかにこの人生にのこされているものはないの

だ、と自分に云いきかせ、しばし瞑目して心をおちつけます。でも本当は、切腹への期待感で、わたくしの胸は一層波立つのですわ。

さて眼をカッキリ見ひらくと、三宝へ手を伸ばし、短刀をとり上げます。白紙を刀身に巻きつけます。つまり古式どおりの腹切刀に作るわけです。絵巻きの刀身の中ほどを握った右の拳を右膝におき、左の掌でゆっくり腹をなでおろすのです。

素腹の鳩尾から臍窩を通って右へまわり、臍窩をとりまくドーナツ状の隆起に沿わせてなであげながら、左へ、そして左下腹へ、まるで「の」の字を描くように、そしてそのま

ま何度も円を描くのです。

そのあいだもわたくしの声帯は、低いながらも力をこめて、

「せつぷく・かっぷく・はらきり・とふく」

と、まるで呪文を唱えてでもいるように、何度もくり返し、唇から烈しい希求の思念をほとばしらせるのです。

その、わたくしひとりに許された秘呪文が

まるで早口言葉のような早さになったとき、

——ああ、わたくしはもう、早く、一秒も早く切腹してしまいたい、一瞬も早く切腹してしまわねばならない。

そういう希求の極点に達し、意識している

かないいかもわからない心の高ぶりそのままに、右手を伸ばして、おのずからわたくし自身腹へ向く擬刀の先を、はっしと左の脇腹へ突き当てるのです。

ちょうどドーナツ状の隆起がスロープのなだらかな終末を見せ、脇腹とのあいだに浅いくぼみの環になっている辺りに、擬刀の先が烈しくぶつかります。いくら擬刀でも、金属ですからやはり痛みがあります。

「うむッ……ああ、とうとう……せつぷく……せつぷく……涼子、切腹するのよ、どう」

わたくしはもう一人の涼子に挑むように、云います。

「涼子、まって、わかったわ、もうやめて、

まだそれだけなら助かるわ、引いちゃ駄目」

もう一人のわたくしが惑乱して、わたくしの切腹をとめようとします。一旦は、けしかけるように、腹なんか切れるものですか、とあざけた涼子が、涼子自身の決心の真実さにおどろいているのです。いい気味、と胸のすく思いになります。

「バカね、女でも一度ほんとうに腹切ると決めて、刀をわれとわが腹に突き立てておいてから、とめられたからってやめられると思うの？ わたしは死にたいなんて思ってたやしない、けれど切腹はしたいのよ、したいことを

してそれで死んでも仕方ないわ、苦しみよりもよろこびの方が大きいのよ、ちっとも辛くも淋しくもないわ」

ここでわたくしは、さすがに一と息ついてから、ゆっくり伸ばした左のてのひらで、擬刀のつかを包み込みます。あっぱれ、みごとと云われるほどの腹の切りようをしとげるには、浅くては不本意なのです。巻き残してある刃先がすっかり腹のなかへ入らねばなりません。そのために左のてのひらで力一杯、刀身をわれとわが腹中へ押し込むのです。

下唇を噛みしめて、苦鳴をもらすまいとするわたくしの演技を、鏡の中にみつめながらわたくしは、云い知れぬほどの心の充実にひたります。

「なぜかしら、わたしはこんな姿を試みたのよ、笑うでしょうね、いいわよ、笑っても……いいわよ、笑われたって」

「笑うなんて……涼子、すてきよ、ほんとうに美しいわ、もう充分刀は涼子のおなかの中に届いているわ、ね、もういいでしょう、満足したでしょう、そこでやめて、まだなんとななるわ、引いちや駄目、引かないで、ね、おねがい、やめて」

「いいえ、引くわよ、心ゆくまで腹真一文字にかき切ってみせるわ、あなたは見届けるだ

けでいいの、とめだては無用よ、腹の切り損じなんて、みっともないわ、いやよ」

切れない擬刀でもこれだけ力一杯押しあてていると、しんじつ痛いのです。

「涼子は、涼子は、こうしてまことの、しんじつの切腹、しとげたい、腹真一文字にかき切りたい、ああ、切腹、せつぷく、セツプクッ……」

云いながらわたくしは、左手の力を右手に移しでもするように、今度は右の上膊に力こぶが出来るほど、右腕に力をこめます。そして右へ引くのです。

ズーンとしていた痛みが今度はチカッとする痛みに変わります。ジリジリジリと、擬刀の先はわたくしの腹部で一番ゆたかな辺り、そう、ちょうど臍窩の一寸足らず下通りを、ゆつくり左から右へ……

「せつない……ああああッ、せつぷく、せつない」

思わず噛みしめた唇を破りそうな叫びを、わたくしはおさえかねます。そして、正中線まで来たとき、わたくしは一と息入れます。

もう額はにじみ出る汗で冷たいくらい、そのくせ体はほてって、熱さにたえられないくらいです。

「じれったい、切れないわ」

「りっぱ、涼子りっぱよ、でも涼子どうしても死んじゃうの？」

「死にたくはないわ、別に死ななきゃならないわけもないわ、でも、こうして切腹してしまえば死ぬんでしょね、それでもいいの、これだけ思いっきり切腹することが出来るなら、腹真一文字にかき切れたら、もう死んだって仕方ないわ」

覚めてしまえばわれながら、狂気の沙汰としか思えないことを、わたくしは酔ったようにやりとげようとするのです。

少し腹をおし出し気味にすると、切腹の苦痛にたえかねて反り身になった、戦国落城の姫君にでもなっているような気がして、うれしさに胸苦しいほどの高ぶりを感じます。

正中線と直角になった擬刀の先が、少しも腹中に没していないのが物足りなくらいで、そこで一と呼吸、また一と呼吸、心のなかで嵐のように、切腹への思いがつのって来るのです。一気にかき切ってしまいたいのです。

それをおしこらえて、また少しづつ右へ引きます。じれったいのをこらえて時間をかけるのです。切腹のさまを表わすのに、キリキリと腹真一文字にかき切る、などという形容がありますが、真刀でないかなしさ、サリサリという、肌の金属にこすられる音のみが耳

に届きます。

それでもせつなくて、せつなくて、よろこび・かなしみの交錯する思いに浸りながら、わたくしはなおも、擬刀の切腹に挑みます。

右の脇腹までやっと充分引きつけて、今度は擬刀の先を臍窩の少し下に押しあて、

「これが一文字切腹……涼子、一文字切腹しとげました。この上は十文字腹、いざこのとおり」

そう呟きます。だって、一文字の切腹ではわずか一尺あるかなしかの切りようしか、出来ないのですもの。あまりにもあっけなくて物足りなくて、それこそ無念きわまる腹の切りようですわ、わたくしは、

「えいッ」

声をかけながら、右手の甲を下に、刃を上へ向けて、刃先を腹へ押しつけます。そのまま上へかきあげるのです。鈍い痛みが臍窩のすぐ右の通りを上へ攻めのぼって来ます。ちようど臍窩の真右を通りすぎるとき、もう惑乱しそうなほどわたくしは、心のおく深くから噴きあがる複雑な感情、新井洗が、人間の心の奥のはずかしさ、と歌った、あのような感情かと思われますが、よろこび・かなしみはずかしさ・せつなさ、それに何か誇らしさのすべてが、まざり合う微妙な色合いの感情

で、わたくしの心は染めあげられて行くのです。

もしわたくしが数百年前に生まれていて、落城の刻にめぐり会わせた城主の姫であったらどうでしょうか。

「姫、大殿様はすでにお腹を召されました、姫もはやご覚悟を！」

侍女の一人がそう云って、わたくしの胸を刺そうとします。わたくしは、

「わらわも城主の娘、そなたの手でも借りとうはない、われとわが腹、みごとかき切って果てるゆえ、見届けておくれ」

そう云い切って、いさぎよく白綾の小袖を押し肌ぬぎ、練絹のように白くつややかな素腹をあらわして、環をめぐらすように肉づきゆたかな、臍窩のまわりを愛撫したのち、心ゆくまで腹真一文字にかき切って果てるでしょう。

またもし、せめて三十数年早く生まれて、太平洋戦争の敗北に終わったとき、女子軍属でもあったとしたら、やはりかねて用意の白装束に身をととのえ、いさぎよく双肌ぬいで、大きく広くあらわした素腹を、思う存分十文字にかき切り、あふれ出る血とはらわたのなかに倒れ伏して、無念腹をとげるでしょう。

古い小説なんか読んでいますと、その中で切腹して果てる武将や武士が云い残します。

「よおく切れるッ」

とおのれの腹を割く鎧透しの切れ味を嘆賞しながら腹十文字にかき切り上げる武将、

「腹を切るになんの障りもなきものかな」

と、やはり腹切刀を嘆賞する武士、

「こころよい切れ味じゃ」

これも腹切刀を讃美する若殿の言葉です。

「ああ、いい気持ちだ」

というのは、愛する女性を助けて悪旗本を斬り、その責めを負うて腹かき切った瞬間の若侍の言葉です。

「これでめでとう腹が切れる」

というのも、切腹の場をしつらえさせた武士が、鎧透しを手にしての言葉です。

こんな言葉をわたくしも口にしてみたくて仕方がなくなります。

——ああ、よく切れる、こころよいほどよく切れる。

——ああ、いいわ、うれしい、せつぷく、涼子、切腹したわ、もう思い残さない、この気持ち。

そんな言葉がきれぎれに口からもれます。いまの涼子にとって、一番残念なこと、それは正當に切腹する機会の恵まれる世に生ま

れ合わさなかったことでは、ないでしょうか。

狂か痴か、わらわばわらえ、そしらばそれ、われはただわが心のままにひとすじに、切腹の道ゆききわめたし、という激しい希求が、日に日に強くなりまさり、またそれを、さすがに死後の名をおもんばかって、なしとげ得ない矛盾こそ、わたくしの最大の悩みでなくてなんでしょうか。

わたくしはもう一度、鏡のなかの涼子に問いかけます。

「涼子、そんなに切腹したいの、死にたいの？　なぜ？」

「死にたくなかないわ、でも切腹したい」

「切腹したら死ぬわよ」

「死んでもいい、涼子、切腹したい」

「バカよ、涼子は」

「ええ、バカですわ、でも切腹したくてたまらないのよ、どうしよう？」

「じゃあ切腹しなさい、見ていてあげる」

「ありがとう、うれしいわ、でも今夜は一度切腹したからまたね」

「なんとか云って、こわくて切腹なんか出来ないんでしょう？」

「こわくなかないわ、でもこんなにこころよい切腹というもの、本当にしてしまっているのかしら、それがこわいの」

鏡の中のわたくしは黙ってわたくしを見つめています。そのわたくしの腹、白くつややかで美しい腹の中心に、うすあかく描かれた十字は、鏡の中のわたくしのおなかにも描かれています。これこそ、よろこび・かなしみ・やさしみ・せつなさのクルスでなくてなんでしょうか。わたくしは、切腹という行為に殉じたいのです――。

涼子は涼子の腹切刀をしまつて、もう眠ります。いつかほんとうの切腹をしとげて、永遠の眠りに就くまでの、仮りの眠りの一と眠りを今夜も眠ります。おやすみなさい、でも涼子、切腹したいわ、こんなにせつなくて、眠れるでしょうか。ほんとうに眠れるのでしょうか――。

腹切らむねがいせつなく秘むる身の

涼子は腹を切る夢を見む

そうした悩みの夜夜のなかで、わたくしはほんとうに切腹の夢を見てしまいます。そのいくつかは、目覚めても記憶にはっきりしています。それを一つだけ書きます。

これはもしわたくしが、ほんとうに切腹するときの遺書になるかも知れないからです。

女剣士涼子

道場正面中央の神前に額づいてから、体を逆に向け直しました。正座してあらためて、おどろきに眼を見はっているこの道場の門下たちに一礼し、

――本日、師範代として剣を執りながら、むぎむぎ当道場の看板をうばい去られたる不覚、涼の切腹をもっておわびいたします。

云いきると、前に横たえた脇差のつかを左手に握つて、右手で鞘を払う。眼前に切先を立て、鉢巻の白布をとって刀身にきりきりと巻きつける。額の汗を吸って、しつとりと冷たい。

しかし重い脇差を女の腕であやつて切る腹です。すべらぬように水で白布を湿すかわりに、涼はおのが汗にぬれている布を、わざと刀身に巻きつけます。

切先三寸残して白布で巻きしめた脇差を、一旦は揃えた両膝の左がわへおきました。

刺子の稽古着の紐をといて思いきりよく双肌ぬぎになります。双の上膊にきっちり袖が抜きにくいのをです。

珠のようにつややかな上半身があらわになり、白い胸の昂まりの中心に、うすくれない

の乳首がポツと突き立っているのを見た人人は、思わずホーッと感嘆のどよめきに揺れま

す。そのどよめきものかわ、人目にもかまわず、涼は袴の紐をも解いてぐいと下げ、腰骨ぎりぎりでキツチリと結び直します。

袴ゆえ腹切る苦痛にも裾を乱すことはありませんまい。心安んじて今はわれとわが腹、みごと切りおおせるほかに、涼の心には何もありません。

形よく縦長に切れ込んだ臍へその更に二寸ばかり下まで、思いきりあらわにした腹を、みごと真一文字にかき切ることしか、涼の念頭にはありません。

「桐原涼、ただいま申訳の切腹つかまつります。同門のよしみに、みなさまお見届け下さいませ」

キツパリと涼は云い切って、脇差の鏢もとを握った左手を、一杯に前へ伸ばし、右手でしっかりと白布で巻いた刀身を握ると、左の腹へピタリと切先をあてます。

臍をめぐる腹筋のまろやかな隆起が、心なしかふるえるようです。ふるえは怯えよりも期待でした。

一瞬道場の若侍たちが息を呑む気配に、涼は眼をとじ、せつぶく、せつぶく、と心の中

で呟きます。次の瞬間、クツキリ黒瞳がちの眼を見ひらくと、宙を睨みすえて、腹と右手に力をこめます。

けれども左手に重い脇差の鏢つばもとを握り、右手は刃先に寄った辺りを握っているのだから、力の入り具合がうまく行きません。

いっそのこと、大刀の柄つかがしらを床板につけ、刀を引きまわすかわりに、おのれの腹を左へ左へねじるようにして刃やいばに切らせる方が、力が少なくてうまくすむかも知れません。

でも涼は、われとわが手で腹かき切るのです。どうあってもみずからの手で切腹をしとげたいのです。

ぷつぷつとせつない音を立てて、刃先が左の脇腹へ食い入りました。ああ、とうとう切腹出来る、これでいい、わたくしはうれしさにふるえる胸の、高鳴りを抑えながら、刃をきりきりと引きまわします。

小気味よい切れ味をわれとわが腹でたしかめながら、わたくしは切腹をしとげます。真一文字、ああ、切った、切れた、とうとう切腹しとげた、涼子の切腹、このとおりよ！

叫んだとき、誇らしさに耐えきれなくなつて叫んだとき、わたくしは眼がさめました。

薄明りのなか、うぐいすの鳴き声がきこえます。晩春のなまあたたかい朝の目ざめでし

た。また切腹、夢の中でしてしまいました。

灼熱とも冷徹とも云える感覚がまだ腹に残っているようです。にじみ出して白い腹をくれないに染めた血汐が、眼に見えるようでもありました。

多勢いた若侍の顔がぼやけていて、だれも涼の切腹をとめもせねば介錯もしようとしなかったことも、やはり夢のなかのことだからでしょう。

自分で自分の切腹する姿を夢に見る——見られるわたくし、見ているわたくし、ああ、あの鏡の前での切腹の擬態が、こんな夢をわたくしに見させるのですわね。

どうして、涼子、こんなに切腹したいのかしら。結婚よりも切腹にあこがれる涼子、バカな涼子、でもその涼子がわたくしなんですもの、しかたありませんわ。



一文字腹

三富浩生

本来切腹は正十文字が正統とされていたらしい。室町時代、管領・細川政元に後嗣なく

まず九条閑白尚経の末子を養子とし、九郎澄之と名乗らせていたが、心がわりして阿波細川家の六郎澄元を迎えた。そのとき使いたのが摂津の守護代薬師寺与一元一で、彼は使命を果したものの、政元の狂態がつるにつれ行末を案じ、政元を弑し澄元を奉じようと永正元年九月淀城に籠った。しかしあえなく落城、捕われた与一は己が建立にかかる一元院で切腹することになった。最後にあたり、

「皆皆ご存知のごとく、我は一文字ごのみにて薬師寺与一、名乗りも元一、この寺も一元院と名づけたのである。されば腹をも一文字に切り申そう」と云い残して腹かき切る。

わざわざ断わって一文字切腹をとげる辺り当時の切腹は十文字が通常であったと思われる。では一文字の切腹はどの辺りを切るか。

これより先、太平記に見える村上彦四郎義

光の最期は、敵に囲まれた吉野の城で立腹を切って果てた。鎧をぬぎすて練貫の二つ小袖をおし肌ぬぎ、大刀を白く清げな膚に突き立て、左の脇から右の横腹まで一文字にかき切り、つかみ出したはらわたを投げつけたのち大刀をくわえてうつ伏したのである。そのうち越前国金ヶ崎落城にあたり、新田義頭は主と仰ぐ尊良親王に自害の法を示すとて、逆手にとった刀で左脇から右脇肋骨二、三枚かけて、腹一文字にかき切ってみせた。

戦国時代切腹の勇壮を競うて敗北を補償するような気風が強くなり、正十文字に大きく腹を断ち切りはらわたをつかみ出す型が盛んに行なわれたが、一文字でも劣らぬ惨烈さを示す例が出て来る。その一人に、多崎八郎という武者は、奥州須賀川城を守ってたびたびの合戦に名を挙げたが、主君二階堂治部大輔が年貢横領などで本家の二階堂為氏に攻めら



吉岡春夫 画

れたとき、剣の名手白杵新左衛門と戦い、筋金入り七尺余の八角棒を切り折られた。群がる雑兵を制して白杵が自害をすすめたので、「君がお志にて武士の本意を遂ぐることに、冥途黄泉まで忘れがたし、さらば、急ぎ腹切り申さん」云いつつ三尺余の大刀を抜き、左手の脇腹から右手の脇まで突き通し、南無と唱えて向うへ押したので、腹はおのずから上下に切り割かれ、はらわたのあふれ出るところを白杵が介錯した。

江戸時代の文献自刃録には一文字の切腹について、

「臍の上一寸ばかりの上通りに突立て、右へ引廻すなり、或は臍の下通りが宜しと云う」とあり、臍上一寸か臍下一寸またはその間を真一文字にかき切るのが一文字の法と云えよう。臍下一寸ぐらいが刀もつ手の脇が直角となるので、もっとも切り易いという。

レスポスの園 4

結城紀子

私は東京・青山にある私立の女子中学へ入学しました。四月、入学式のあと、母と渋谷で、入学祝いのプレゼントを買ってもらっために、デパートの売場を右往左往している時でした。私に女の証しが突然、訪れてきたのです。初潮としては、当時、ごく普通の年令だったので、あわてた母が、白のパンティを通して、紺の制服に汚れを残し、デパートのフロアにまで黒点をつけて、ボンヤリしている私の手を引いて、トイレに駆け込みました。

「紀子、いい、これが生理というものなのよ。女ならば誰でも毎月やってくるものなのね。だから、心配しなくてもいいのよ。」

小さなトイレの個室の中で、母は私の下着を脱がせて、まだ生え揃っていない若草に附着した血をぬぐい、ティッシュペーパーを、くるくると丸めて棒状にすると、私の割れ目を指先で拡げて、血のしたたるそこに当てようとしています。

「お母さん、何するの。嫌よ。」

小学校の保健体育の時間に女の子だけには知識として生理の時の手当ての方法を教えていましたから、私もある程度は知識があったのですが、当時はやっとアンネナプキンが普及した頃でしたので、緊急の場合、その用意がない時は、ハンカチを折って当てるというふうに教えられていたのです。それが、母のように、今思うと、タンポン状の形にしたティッシュを私の中へ押し込もうとした行為に私が驚いたのは当然でした。母もあわてて、そのことに気付いたのか、ティッシュを平折りにして重ねて手当てしてくれました。どうも、母はその当時から外国製のタンポンを愛用していて、咄嗟の時に、私にまで棒状にしたティッシュを当てようとしたのでしよう。母の指先が私の未開の秘め処に触れた時、どうしたものか、私は生理の手当てをしてもらっていることも忘れ、母と淳子先生の姿を思い浮かべていました。一年前の夏、私の垣間見た光景は、それから時折、私の脳裏に鮮烈な刺激を与え続けていたのです。女同志がベットの上で絡ませ合った脚を震わせながら嬌声をあげている光景。12才にもなれば、男と女がどんな行為をするのかということぐらひは、どんな女の子でも感付いています。

でも、女同志が裸で抱き合っている姿から、すぐにそれが女同志の性行為だという連想は12才の女の子には浮んできません。でも、母の指先が淳子先生の下腹部へのびて、私の覗き見している場処からちようどその指先が、淳子先生の女の部分——今思うと、かなり薄いへア——をたどり、割れめの中に消え、さらに割れめを左右に押し開いていく光景がはっきり見えていました。何をしているのか判らないが、とてもいやらしい、見るだけでも汚らしい行為なのだという認識が12才の少女の脳裏に芽生えたことも事実です。その母の指先が私の女の部分を清め、生理の手当てをしてくれている。本当ならば有難い行為なのに、何故か身体が固く拒むように反応するのは、母の淳子先生の割れめに入りこんだ指先と私の生理の手当てをしてくれている指先が私の内でダブっていたのでしよう。こんな私が後年、レスビアンと呼ばれる人種になったなんて、自分でも信じられません。



プレイ探訪記

S M クラブ

むらさき生

一年ぶりの上京だ。今回のかげの目的は週刊誌で評判のS・Mクラブの探訪だ。先日リサーチのため目ぼしい所へ二、三電話してみた。テープがなって「もう一度〇〇番へ電話をして下さい。」とか「〇〇の喫茶店から電話下さい。マネージャーがお話に参ります……」とか「こちらは男性のMのみ扱っております……」とか何となくいがわしい匂いが一ぱいだスリルとサスペンス、チャレンジ精神の旺盛な我輩は上京する日を楽しみに腕をさする毎日であった。

その日は残念ながら雨であった。待ちに待ったプレイ挑戦の日にふさわしい雨であると考えよう。夕刊新聞の広告欄を見ながらアチコチへ電話をかけてみようと思つて電話ボックスに飛びこんだ。良さそうな所を狙ってかけた。「こちら〇〇です」若い声だ、しめたと思つた。「男性Sですがどんな内容ですか」と云うと「一寸待って下さい。」と今度は中年の女の人が出て「これからられますか」というので「良かったら行きます」と答へると「〇〇

ホテルのロビーにて電話を下さい。迎へを出します」「では直ぐ来て下さい」と電話はきれた。我輩はままよと次に電話をするのをやめてタクシーで指定のホテルへ向つた。やゝ暫らく待つ程に品のないおばはんがやって来た。案内されて〇〇マンションへ入った。一寸気持が悪い。遊びにはもっと明るいフンイキが必要だ、少し緊張気味で応接椅子に腰掛けた。「いらつしやい」と云う声と共に太り気味のママが来た。初めてなので説明して下さいと云うと「普通コース七万円、ハードコース八万円、殿様コース十万円です。セックスは出来ません。だけどアナル、セックスは構いません」とのこと何やら不思議だ。

ハードコースは血が出て良いです。すさまじい。次にアルバムを見せられた。どの子が良いか指定するのだ。見ると私の好みの女も居ないので適当に話をして退散するかと考えていると、「大学生でアルバイトの子ですが今帰って来るから待って下さい。良い子ですよ」と云うのでヒョットしたらという気持ちで待つ事にした。何やら田舎っぽい若い子が戻つて来た。ママはなんとか押しつけようとして「食事に行つたんですよ、氣立ての良い子で何んでも出来ます。如何ですか」どこへ行つても同じではないかと思ひ又きらいなタイプ

でも無いので妥協することにした。ソフトコースでお願いしますと云うとママは小さい紙を出してサインをして下さいと云うので何かと思つて見るとセックスはしませんと云う誓約書だ。笑つてサインをして彼女の案内でプレイをするホテルへと出掛けた。歩きながらいろいろ話をきくと意外に彼女はスレてなく経験もまだ余らないと云うので一安心だ。彼女の後についてホテルに入る。SMホテルというやつだ、部屋に入る。何やらアッチコッチに仕掛けがしてある。時間制限も有ることなので直ぐ彼女に服を脱いで裸になつて貰つた。彼女は素直だ。もっとも彼女はプロなのだ。

軽いタッチで「立縛り」そして我輩の得意の乳房責めだ。カメラをむけて先づ一発シャッターをきる。少しきつめでいこうと思ひ、豆しぼりの手拭で猿ぐつわをする。そして丹念に縄がけする。勿論Gミの実の様な乳首もゴムナワでくくる。うめき声が彼女の口からもれる。決してイヤな表情ではない。乳首が感じるのか、三本の「股ナワ」が感じるのかM気タツプリなのだ。「片足吊り」でそのまま暫らく放置する。部屋の中を見ると消毒済みのガラスの入れ物に亀頭型のバイブレーターが入っていた。壁にはムチが無雑作にかかっ

ている。産婦人科の診察台みたいなものも置いてある。

M 氣が有るならば縛りの型ばかりやってい
る必要にない。此の際、ロープなしで奴れい
にして遊んでやろうと思った。先づ十字架に
固定して奴れいの宣告をした。そして奴れい
の誓いをさせた。何んでも云う事を聞く彼女
に氣を良くした我輩はパンツ一枚になり足の
指をなゆさせ、足の裏もなめさせた。左右の
足を充分にシャブらせたあと、四つん這りで
尻をあげ足を一つぱいに開かせた。

「おまえのみにくいものをスッカリ見せるの
だ。」我輩はバックに廻って尻をたたきなが
らパツクリと口をあけた秘密地帯をのぞいた。
床の鏡にもスッカリ写っており、二元プレイ
をしている感じだ。乗りに乗った我輩はガラ
スのいれ物から赤いバイブを取り出し太古に
うごめく生物を思はせるその口にくわえさせ
た。散々いたぶったあと、仕上げに彼女を開
脚器に足を一つぱいに開いてガツチリと固定
した。犠牲台の彼女は、何をされても抵抗で
きない姿勢で横たわっている。赤いバイブを
再び装着させた。ブルブルブルンブルンとい
う音と彼女のウメキ声がハーモニーしている。
ローソクは駄目と云はれていたが、赤いロー
ソクを取り出した。彼女の白い腹の上に赤い

しまが出来る度にピクンと腹がバイブした。

続いて乳房の型を取る目的で集中的に乳首に
ロウをたらすと彼女はたまらず悲鳴をあげた
のだ。驚いて約束違反はいけないと思い、や
めた。責めあぐんだ我輩はママがアナルセッ
クスは構いませんと云う言葉を思いだした。
フィニッシュを考え愛用のバイブを持ち出し
彼女のアナルにあてがった。スイッチONに
すると蛇の如く穴をさがしてうごめき廻った。
そして入口を散歩したあと無遠慮に穴に飛び
込んだ。

前と後からブルンブルンで彼女はたまらず腰
を使おうとするのだが太もものつけ根を固定
されているので思うように動かず、うめき声
だけが大きく小さくゆれていた。

一風呂浴びていると彼女も入って来て背中を
丁寧に洗ってくれた。アフターサービスか
今回はラッキーにも素晴らしいプレイが出来た
ので此の道の愛好者に報告する。



新人求む!

SM界で現在、活躍中の作家、
イラストレーター、カメラマン、
縄師などの方たちは、ほとんど旧
「奇ク」誌から巣立ちました。そ
の伝統と実力は、出版界でも高く
評価され、新誌からも有望な新人
の輩出が期待されています。将来
SMに限らず、出版界での活躍を
希望する方は、作品(小説、イラ
スト、劇画、劇画原作、写真など)
を添えたお手紙を本誌編集室宛に
お送りください。また、芸能界や
ショウ・ビジネスを希望する女性
は、最近の全身写真(水着または
ヌードの立姿)と簡単な略歴、得
技、希望職種などのほか、S・B
・Hの各サイズを書き添えたお手
紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会



あぶ派紳士録①



古い手紙が出てきた

先日、思いもがけない時に、ずい分古い知人から手紙を貰って驚いたことがある。

その知人と云うのは、ペンネームを“宝塚二三夫”といって、旧号時代の奇譚クラブに投稿していた常連のマニアさんだった。

彼の手紙の中には、一枚の縛り絵が入っていた。そして、手紙の文面の中にはこんなことが書いてある。

“新らしい絵を送って戴いたので、以前に戴いた絹絵を一応お返しいたします。今度の絹絵は、小生のお願いした通りの出来ばえでした。縛られた裸女の羞恥に悶える表情もよく、むりやりにM字しばりにされている極限の恥態のポーズは素

美濃村 晃

晴らしいものでした。拝受の御礼まで”

と云うようなことが書いてあった。これは以前に宝塚氏にたのまれて描いた絹絵のことだった。一度目のときは、私が上京する前の頃だったはずなので、もう何十年も前のことになる。宝塚二三夫氏の奇クへの投稿写真は一見おとなしいものだった。みんなどれもこれも素足をむきだしにした女の子がそれほどおもしろくもなく縛られている場面で、そのタイトルは、“ボクの責め方”だった。

私ははじめ本人に逢うまでは、宝塚二三夫という人は、強度の足フェチシズムのある人物かと思いこんでいたのであるが、逢って話をしてみると大違いで、後年一緒にSMあそびを楽しむようになってからは、彼氏の好みがある程度判ってきた。そこで彼氏の好みにあわせて描いた絹絵が左のページにある私の絵だったのである。

むりやりに舐め狂う

彼と一緒に一人の女性を囲んでプレーをしてみても判ったことは、宝塚氏は足フェチどころか希代の舐めくるい魔で、裸にして手足を縛り上げた女の子の一番敏感なところをむりやりに舐め狂うのだった。

はじめのうちは、女の子も、

「きやーッ。やめてえーッ！ああーん！」などと、快感にのたうっているものの、しつこく舐められると、どんなにがんばるにしても、たえることができなくなってきた。

「あーッ！いい、いっちゃうーッ！」

と、最後には昇りつめてしまうことになるのだった。宝塚氏の遊びはそれで終わったわけではない。女の子が一度二度と昇りつめたあと、

「もうイヤーッ！もうゆるしてえーッ！」

と、泣き叫ぶのもかまわず押し伏せてむりやりに舐めまくるのであった。彼のたのしみは、むりやりに三度も四度もイカせることなのだという。

「そうになると、女はもう欲も得もなくなってしまうって腰が抜けたようになってしまいます。それを責めるからおもしろいのです

よ……」

と、彼は云うのだった。

そんな彼が、一番はじめに私に描かせた絵が下段の構図だったのである。

私はふしぎな気がしたものだ。本来ならもっと刺激的な構図を好むのがマニアの常なのではないかと思ったりしたものだったが、よく考えてみると、現在とちがって周囲に何もなかった昭和三十年代の頃のことだから、こんな絵でも充分に刺激はあったものかもしれないのである。ただしこの絵は凸パンでは消してあるが、女のおしりと足のかかとの間からは黒々とした陰毛が見えているのである。

あとでよく話合ってみると、宝塚氏も私と同じような年代で、御他聞にもれず「天狗の安」に触発されてこの道に入ってきた同好の士だから、やっぱり、うしろ手縛りの背後ポーズを見せられると感じるのだそうである。

彼は、前に述べたように女を裸にして舐め狂っているのが無上のたのしみになっ

ているというのだった。
私は現在までにいろいろな種類のマニアとつきあいがあるが、いけにえの腰が

抜けるまで舐め狂うという彼のようなマニアは、あまり知らなかった。

この彼に、M字しばりにされて縛りつけられた女性は、

「ひいーッ！もうやめてえーッ！おかしくなっちゃうーッ！ゆるしてえーッあーッ！」

と、絶叫をあげて、何度目かのけいれんをくりかえすのだった。

私は、この世界にながくいたおかげで、このT氏のほか、まだ多くのユニークな不思議な人達を知っている。それらの隠れたマニア

の人々の生態を本誌の編集長が書いてみな

いかというので、ふとそのつもりになって

いるところなのである。本当は、私などよ

り辻村さんとか、鬼六さんとか、このペー

ジには最適の人材が数多くいるはずなのに、

とりたてて私にお鉢がまわってきたのは、私

がもともと編集者上りだから字数行数までち

やんと処理できるだろうと考えてのことらしい

が、そんなことを云うなら、かの濡木クン

も編集者だったし掠陽児もそうなのである。

みんな同じ仲間なのだ。



道の錯倒

ある女装マニア

直所田

私には人には言えない妙な性癖があるので、今から読んで頂くこの告白記は、私が実際に体験してきた事なのです。私と同じ性癖をもっている人も、あるいはいるかも知れません。よくもまあ変な事をする人もいるもんだと、思う人もいるかも知れません。多分、後者の方が多いと私は思います。しかし、私にとっては非常に大事なことです。今から書く私の秘密は私の生活の中で大きなウェイトを占めています。読者の皆さん、最後まで私の秘密の性癖を観賞して下さい。世の中には随分色々な人が生きているんだなあと、私は身長一七三センチ、体重六三キロ、スポーツの好きな男性です。はたから見れば、ごく普通の男、スポーツマンタイプの男と見られる私です。そんな男が、どうしてあんな性癖をもっているんだろうかと、他人が気付きもしない様な事なのです。その性癖というのは女装なのです。女装と言っても、単なる女装ではなく、SMを取り混ぜたものなのです。現在では、女装をする男性が非常に増えているとのこと、私もその中の一人です。変身する喜び、女性下着の独特の感じ良さ、スカートから見える足、ヒールの高いクツ、全てが私にとっては素晴らしいものなのです。

では、何故、私がこのように女性の身につけているものを、自分の身につけようなどと思ってしまったのかは……、このことを話すとなれば、遠い小学生の頃に戻らなければ、いけません。そして、SMと非常に関係あるのです。女装とSM、私にとってこのふたつの魔物は、切っても切り離せられないものなのです。私の胸の中に今も鮮烈に写し込まれています。それは一枚の絵でした。着物を着た若い女性が、後手に縛られ、サルグツワをされ、白い足が着物のすそから流れている絵でした。私はこの絵を見た瞬間、体の中を何か熱いものが、走った感じを覚えました。まだ小学生の私でしたが、この絵は非常に強烈なものでした。それ以来、私の体の中にはSMという灯が確かに、小さな灯ではありましたが、ともることとなるのでした。

小学校、中学校、高校と大きくなるにつれて、その灯もだんだんと、大きくなるのでした。途中で消そうと何度も思いましたが、どうしても消しきれず、今日まで来てしまったのです。最初はSMからでしたが、縛られている女性を見ると、私は、一度でいいから、あんな風にされてみたいものだと思う様になるのでした。そして、女性の身につけているものを、自分で身につけてみようと思いだし

たのも、中学生の頃でした。最初は、母の下着や洋服を身につけ、一人で楽しむのでした。

時には、よそ様の洗濯ものから、とってきたものもありました。しかし、それらは全て他人の物、自分の物を持ってみたいと思うのは誰でも同じでしょう。自分の物が持てるようになったのは、社会人となってからでした。

社会人となった私は、女性用下着を集め、そして、スカート、ブラウス等、女装に使用する物を買いきりいきました。最初は恥かしく、とても勇気がいりましたが、今ではすっかり慣れ、平氣に買える様になりました。

部屋にとじこもり、女性の下着を一枚一枚身につけていく時は、ほんとに素晴らしいものです。ショーツをはき、ブラジャーをつけ、ガーターベルトをつけストッキングをつけます。そしてスリッパを着ます。このスリッパのすべすべした感触、ああ、何て気持ちいいんだらう。私は女性に生まれなかった事を悔やみながらスカートをかぶると、そこには、

男は居なくて一人の女性がいます。「私は女」「素適な女、こんな私を誰かキリキリと縛ってくれないかしら。」なんて思うのでした。化粧は余り上手ではないけれど、ある程度の事をして私は鏡を見ます。「あなたは、誰？」

なんて自問自答しながら、変身の喜びを感じるのでした。「誰か私を縛ってくれないかしら、

後手にきつく、足首、ひざを、ぐるぐると巻きつけて、サルグツワをきつく締めてくれないかなあ」と私は一人で思うのです。しかし一人では仕方ありませんので、自分で自分を縛るのでした。まず、足首を4重位にきつく締め、次にヒザへと行きます。これも幾重にもしてぐるぐるときつく縛ります。足を縛ただけで、私はもう、たまらない気分になっているのです。

そして、サルグツワをかませます。手ぬぐいで顔がゆがむ程きつく締めます。このサルグツワが私は何よりも好きで、これをされない

とSMをしている気にはならないのです。下を向くとヨダレが糸の様に何度も垂れて私の太ももの上に落ちるのでした。「ああ、私は縛られているんだなあ」、もうこの気持ちだけで私は満足しそうです。このサルグツワをして、次は体の上部へと行きますが、一人では完全なものにならず、とても残念に思いながら、ただ胸をぐるぐる巻くのでした。手首が締まってないので、縛られたという気持ちは何かものたりなさを感じるのですが、一人ではどう仕様もありません。この恰好で我慢し、私は一人もだえて悦に入るのでした。

こんな日が何度となく続き、一度でいいか

ら人に本格的に縛ってもらいたいと思ってる日が続くのです。私の自縛写真、女装写真をポラロイドカメラで撮るのでした。一体、どんな格好をすれば女らしく写るのか、鏡で見てポーズを決めるのです。早く他人様に女装の私を縛って、ムチ打ち、ロウソク責め、アヌス責めをしてもらいたいと思う毎日です。こんな私で良かったら、誰か私をSMプレイへと導いてくれませんか。



挿絵画家

募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応募を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。

○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。

巻頭論稿

自らの問題として

倒錯研究の新展開を読んで――

林 弓 志 雄



〔一〕

前月号の、成瀬亮氏の『倒錯研究の新展開』は、その題名に恥じず、多くの示唆と新味をもって迫るものがあつた。

それにも拘らず、読後、私の心に一抹の寂寥さが感じられるのはどうしたことであろうか。読み返すうちに、それが成瀬氏の

立場にあることが諒解された。

成瀬氏の論説は、正鵠を得ている点においても、数多くの引例においても、また構成においても、実に円満な常識が働いていることが強く印象されたのである。

したがって、氏は『現代に生きるものの悩み』の共通性を謳いはしたが、『倒錯する者の悩み』については、殆んどかえりみ

られるところがなかった。

要するに成瀬氏は、冷静なる傍観者の立場から、倒錯研究を学術的に論じておられるようであるが、そして、そのことは、また重要な社会的、学問的意義をもつものではあるけれど、私の読後感としては、ハツキリ申して、物足りないの、一語に尽きよう。

成瀬氏の、このような一般論的立場に対して、私は、倒錯者自らの問題として、倒錯の研究に呼応したいと思うのである。

さて、成瀬氏は倒錯の本体及び正常と異常の限界について

『では、なにが正常で何が異常なのか……誰にもよくわからない、と答えるのが正しいであります』

といい、また

『正常と異常の差は、行為そのものではなく、その行為と環境と条件によるものだと、いうことがハッキリしてくるようです……この一番大切なことを、今まで指摘した論説は不幸にして私がはじめてかも知れませんが』

と極めて自負に満ちた態度で論破しておられるのである。私は、この成瀬氏の所論に反駁するのではなく、ここに自らの問題という基点から、成瀬氏の所論と、全然異ったカラーの見解を述べてみたい。

成瀬氏の説は、R・ミヘールズの、性の世界は境界線の世界であるという解釈と軌を一にするもので、性の謎は、正常と異常をアイマイにするというのであるが、私

はこの点で、私なりの仮説の定義をまず下しておきたい。即ち

正常とは、倒錯せずにおれる者のことであり、異常とは、倒錯せずにはおれない者のことである。——と。

(二)

問題は、倒錯せずにはおれない者の側にあるので、倒錯的情緒が、成瀬氏の云われるように、『人間には誰にだって多少の倒錯傾向がある』という普遍性も、倒錯せずにおれる者にとっては、むしろ問題外である。それは恰度、芸術心は多少なりとも誰にでもあるが、芸術せずにおれる者にとっては、生命の糧としての価値を持たないのと同断であろう。

『私は倒錯せずにはおられない』という、ぎりぎりの血の叫びや、狂わんばかりの魂の激しい嘆きを訴える人の心には、妖しい生命の神秘がひそむのではないかとさえ思われるのであるが、成瀬氏はこの問題について、特に同性愛の素因と心理の項で「それが、果して、現在社会の圧迫によるものなのか、それとも、あくまで個人その

ものの性本能の抑圧から招来されるものなのか」といい、

「心理的かつ後天的倒錯ということになります」

と結論づけておられる。

倒錯が、心理的かつ後天的だとする理論の根拠についても、私には多少異論はあるが、そもそも、倒錯せずにはおれない、ということとは、肉体的、精神的素因でなくてはならないであろう。

例えば、受動的同性愛者のすべては、内分泌の比重が、女性ホルモンの方が優っているという事実だけをとり上げていても、肉体上の素因に触れることができるのである。

肉体上の素因については、現在未だ明らかにされておらないものもあるだろうが、この肉体上の神秘さは、外見上は成瀬氏の言われる通り、肉体的にも機能的にも完全な男性であるだけに探り出し難いものがあるだろう。

ホルモン産生の比重は残念ながら現代医学では計ることはできないが、しかし、四肢の柔軟さ腰部曲線の優美さ受動感覚の繊

細さなどの諸点から診査して、女性ホルモンの過剰を指摘することは可能である。(男でも女でも、両性ホルモンが分泌していることは説明するまでもないだろう)

そこで注意すべきことは、同性愛者において、受動的な者は、その一生を通じて、ソドミアの傾向が持続されるということであって、俗に言う男色家^{デカ}なる者に限っては、一時的な好奇癖から、そうなる者もあるということである。

同性愛者の場合、アクティヴとパッシヴに区分するが、実は、その真性な者は殆んど移行型であることも知っておく必要がある。

さて、私はここで、精神的素質について述べねばならないだろう。

倒錯心理というものは、真実の意味では、人間の気質の一つとして見るべきものだと思うのである。後天的な環境や条件のみよって発現するものでも、導き出されるものでもないようである。

性格は後天的に造られるが、気質は先天的である。とする説が正しいと認められるのなら、倒錯は肉体以前のものでなければ

ばならない。

事実において、倒錯する者は、この先天的な気質なるが故に、それを内因的な業^{カルマ}として、痛切な、苦悩を味つてもいるのである。変えることのできない人間の定めとして、悦び、もたえ、苦しみ通しているのである。

仮りに倒錯が「心理的かつ後天的」なものとするならば、ヒロポン患者並に、矯正院でも設けて、環境と条件を是正すれば、或は、地上から一掃できるかも知れない。だが——私達の倒錯の気質は、いかなる權威を以てしても、剥奪したり、変更させたりすることは不可能なことである。

(三)

倒錯は背徳か。この問題は、こゝに至つてまったく噴飯に価するもので、倒錯は氣質であるから、背徳とか罪惡とかの道義的な物尺で計ることのできないことは明白である。

フェティシズム、マゾヒズム、サディズム、同性愛——そのどれ一つをとってみても背徳だの、罪惡だのに相当するものはない。

い。

仮りに、私とSが同性愛を愉しもうと、私がA女に鞭で撃たれようと、彼女を縛つて悦ぼうと、道徳に反するということは言えない。

しかしながら、一般に、倒錯する者を変態性慾者と呼んで、指弾し軽べつするところの、慣習道徳との間に、避け難い対立があり、眼に見えぬ迫害を蒙っていることは事実である。

その迫害から逃れ出ようとするために、私たちは、ある時には日蔭者のような、心理的ヒケ目を感じてもいる。

そして、さらに重要なことは、自己の内面的道徳との間に、重苦しい相剋を感じていると言うことである。なぜならば、倒錯せずにはおれぬ自分と、生活全体のバランスを保つために、不断に深刻な心の葛藤を演じなければならぬからである。

ここで成瀬氏の言われる「本態と変態の差は、行為そのものでなく、その行為と環境と条件による」という説を意味してみたと思う。

この論法は、生長の家の谷口氏の好んで

用うるもので、つまり谷口氏に言わせると「性行為それ自体は善でも悪でもなく自然であるが、その相手の人、時、所を間違えると罪にもなり不道徳にもなる」ところなのである。姦通だの、強姦だの、少女姦など、みな、人、時、所の分別のつかぬために起った犯罪であり、不道徳であけるわだが、成瀬氏の言われる、環境、条件とは同義語であらう。

なるほど、倒錯者にとっては、余程環境と条件に配慮を要すると思われるし、その戒めもあだにはできないが、しかし、そのことは、倒錯であらうと正常であらうと、社会生活を営む者のすべてが自戒すべき倫理であって、格別に、倒錯者にそれを言い聞かせようとする成瀬氏の態度は頗る奇怪なことと云わねばならない。

明らかに言って、私は甚だ不快なものを覚えるのであって、釈然とせぬものが心に残るのである。

先にも私は、倒錯する者には、全生活とのバランス上の苦悩があると言った。しかし、その苦悩は、私達の近代的教養によって、きびしく倒錯情緒が不断に抑制され、

規範され、純化されるところから生れてくることに思い到らねばならない。

それに較べて、反社会的な——背徳的な性行為（犯罪的な集団暴行や、強姦、少女姦などを含めて）は、もとより倒錯とは何の関るところもないが、統計的に言って正常な性感覚を持つ者が、社会的な原因や、その無知からくるところの逸脱によって惹き起しているのである。

この問題については、今少し多岐に亘つての意見を述べたいが、先に倒錯者の人間的苦悩に触れて行きたい。

そもそも、宗教にしても芸術にしても、それが深い人間の本性から発露するがために、苦悩を通して真理に近づくこととするのだが、倒錯もまた、性の享樂リクリエーションであり耽美ではあるが、人間の本性から流露するものであって、負える十字架の苦悩は決して生優しくはない。

ならばこそ、倒錯と人生に思いをひそめて、懊悩することは、倒錯者のひとり往くべき道であるかも知れない。

こうした、人間の良心に刻み込まれた苦悩は、成瀬氏の言う心象や素因だけの究明

で事足りぬことは云うまでもあるまい。

成瀬氏は、芥川文学の「好色」についての解説をかねて「私の言う『倒錯行為を営むに到る素因と心象の追求』とは、こういう芥川文学に見られるものを指しておりました」と言っておられるが、この作中の平仲は、決して異常者でも倒錯者でもない、と断っておられるように、よし、愛情生活の中で倒錯らしいものが匂ったとしても、倒錯者のそれとは、似て非なるものである。

倒錯者の道は、そう云ったところにあるのではなく、むしろ、ジャン・ジュネの「泥棒日記」のように、そしてジュネの全作品を通じてみられるように、孤独で、妖しい倒錯者ジュネ自身の骨を刻むような、文学的精進によって歩みつづけた道こそ——私たち自信の道であると思う。

言い換えると、私たちは。その内奥うちにもっている倒錯と、全生活のバランスとの釣り合いや、現実とのギャップや、慣習道徳モラルとの深刻な対立、摩擦の中で、いかに耐え、いかに生き抜くかということを、倒錯研究の新展開の課題とすべきであり、倒錯研究を人生問題として真剣に取り上げてい

かねばならないと思うのである。

でなければ、およそ、倒錯研究の意義が単なる好事家の趣味には迎合されるだろうが、私達にとっては、生命なき空^{そら}ごとしか感じられないのである。

〔四〕

成瀬氏も、その論文中に倫理や風紀の点から「ムリな取締りはやるべきではありません」

と言っておられるが、むろん、本誌の如き特異の性格をもっている文化誌を、道徳的美名の下に弾圧されるようなことがあれば、それはファツショの再出現だと非難もされようし、また——私たちが人生上の価値を本誌に見出しているという絶対的な支持を想えば、みだりに、無理解のために文化的悲劇を招来してはならぬのであり、文化社会の健康のためにも本誌の意義を昂めることに意を用うべきである……と私達は衷心願って已まない。

そのために、不当なる倒錯者へのいくつかの濡衣を干さなければならぬだろう。このことは倒錯者とは何か、の一般的疑問

や、現在行われている偏見への是正のために、そして倒錯者自らのために、今後もその努力を怠ってはならないと思う。

私は次の諸点について少しばかり、その意味での見解を述べたい。

私達は世俗的な好色家でない。成瀬氏は、デカダンス派の文学を解説して「どうやら、デカダンス派文学の特徴は倒錯趣味の本質とピッタリ一致するようでありまして……」

と述べておられるが、私はとんでもないことだと思う。官能的刺戟に酔い痴れて、酒色の墮落の中に人生を混迷させている、世紀末的な現象としての官能主義と、倒錯の本質は全然異っていると思う。

その証拠に、私達はデカダンスな風潮に（文学論は別とする）激しい嫌悪の感情を抱いているものである。例えば、現代風俗の表象とも言われる「売春街」の実体に対して、そこで、好色家共がくり展げてい

る性慾解放の姿態は、倒錯とは似ても似つかぬ愚劣なものばかりである。好色家共はそこで少女の肉体を探し廻っている。そして「ある薬品で子宮筋を緊縮させた女」を抱いて少女姦の妄想を満悦したり、アルパイト嬢と称する売春婦にうつつを抜かしたり、愚にもつかない卑俗、ワイセツの濁った性の泥沼に這いつくばっているのだ。こんないやらしい醜悪さと……倒錯の情緒が一緒であるなどとは、錯覚も甚だしいと言

う外はない。倒錯への陶醉には、決して動物性の好色で割り切ることはできない、綾なもの^なものが匂っているのである。それは、本誌に現われる倒錯文学が、いみじくも示してくれているのである。

私達は危険分子ではない。ここでいう危険分子とは、出歯亀的な者を指すのだ。彼らは野獣のように、自己の劣情を満足させるために手段を選ばない、そのために、強姦傷害などの、忌むべき犯罪をすら起すのである。

彼らには、性の深い欲び、哀しき、耽美という文化的感度がない、春情した劣情の遂行だけがあるのだ。

恐るべき性的無知^{インセンシス}、悲しむべき教養の欠除、人格の喪失である。かかる輩と、倒錯者を混同する社会の非常識には痛憤するばかりである。

屢々問題になる少女姦についても、倒錯者への濡衣はひどいものがある。少女姦といえは変態倒錯者の仕業だと、取締当局も思い、新聞記者もそう書き、世評もこれに頷くのである。なんという偏見だ。

強姦者は倒錯でも何でも無い、通常の人間である、彼らの目的は劣情の満足である。少女には隙が多いということ、少女特有の性魅力（孔子もいつている。男女七才で席を同うせず……と）の誘惑、そして抵抗が殆んどない、などの条件が、強姦者をして少女に毒牙を磨かしめる結果となるのである。

それと最近の集団強姦は、たしかに時代的性格だと思える、これらの強姦者は、決して倒錯者ではない。倒錯者は犯罪とは縁の遠い存在である。

残酷なる殺害 バラバラ事件とか、生首事件とか、リンチとか、一連のグロテスクな探偵小説的事件も、よく性的サディズムと混同される。

彼らの多くは、性慾に關係のない破カイ心理をもっているものであって、性的サディズムとは全然異分子である。

私たちのサディズムは、性の享樂であって、成瀬氏の指摘されたように「異常なる愛情行為」に過ぎず、少しも兇悪は認められないのだ。

文化社会の平和と秩序の攪乱者は、私達の側にはない。むしろ、政治それ自身の中に、社会自身の中に、そうだ、デカダンスと貧困の中にこそあるだろう。

〔五〕

最後に、自らの問題として、二、三の倒錯心理について、私の疑問を卒直に披瀝して、成瀬氏や広く読者各位の御教示に俟ちたい。

成瀬氏は同性愛問題について「パッシブの側にまわる男性が、本来堪え忍び難い疼痛であるべきなのに、そうした倒錯行為を悦び……という事実は一体どう解釈していいのでしょうか」と言われ「われわれをひどく悩ませます」と疑問を投げかけておられる。

そこで私は想うのだが、男性の直腸を、女性のヴァジナに代替させることは、男性同性愛の性行為として見られるが、しかし

決してその全部ではないのではないか。

或は、成瀬氏はここである種の先入観的な誤解に捉われておられるのではないかと思う。実際面で、同性愛者が、必ずしも男女のそのの如く不可欠に、そうした行為をしているのであろうか。私はそう思わない。

疼痛も伴わないで、アクティブ側もパッシブ側も、充分に満足できるテクニクがあるということは知っておかなくてはならないだろう。（断っておくが男娼の用うる常套のあれではない）

したがって「直腸の刺戟」のマニヤには、男もあれば女もある、それに堪えられる体質と、そうでない体質もあって、マニヤは堪えられる体質の人々であろう。

と言うのは、外人には Paedicationul-herm の風があつて、それを強要して、ひどい裂傷を負わせ、失神させた例も沢山ある。その反対に、女性であつて、しきりにそのことを求める人もあつて、局所の疼痛は堪えられないほど激甚なものではなく、充分刺戟の興奮を味わうことができる告白している。

同性愛の場合、パッシヴ側の男性が、激痛に泣きながら、呻きながら、恋しい男に身を捧げる心情には、愛にすべてを捧げつくす、あのマゾヒズムな情感が漂っているように思える。

だが、こうした疼痛を伴う行為が、日常に繰り返されることは、必ず、肉体的疾患を起させるに違いない。

したがって——必ず、そこには限界というものがあるべきだ。つまり疾患を予防するための方法が、代償的に用意されていることは想像に難くない。

将来、こうした性行為に変遷があると思うし、形態のテクニクの変化もあることだと私は信じているが、これについて、なお、私の疑問とするのは、直腸刺戟の己み難い願望だけで同性愛に耽る者があるだろうか……と言うことである。

以上、私は成瀬氏の論説を読んでの所感を極めて雑把に羅列したが、すでに紙数の限度が来たので、急いで結論的なことを言わせて頂こう。

成瀬氏は、今や日本の異色ある文献雑誌

としての本誌に、「きびしい科学的メスを以て、倒錯行為を鋭く追求し、徹底的に解剖せよ」という意味の希望を述べて、それが、倒錯研究の新展開の視野であると示唆された。

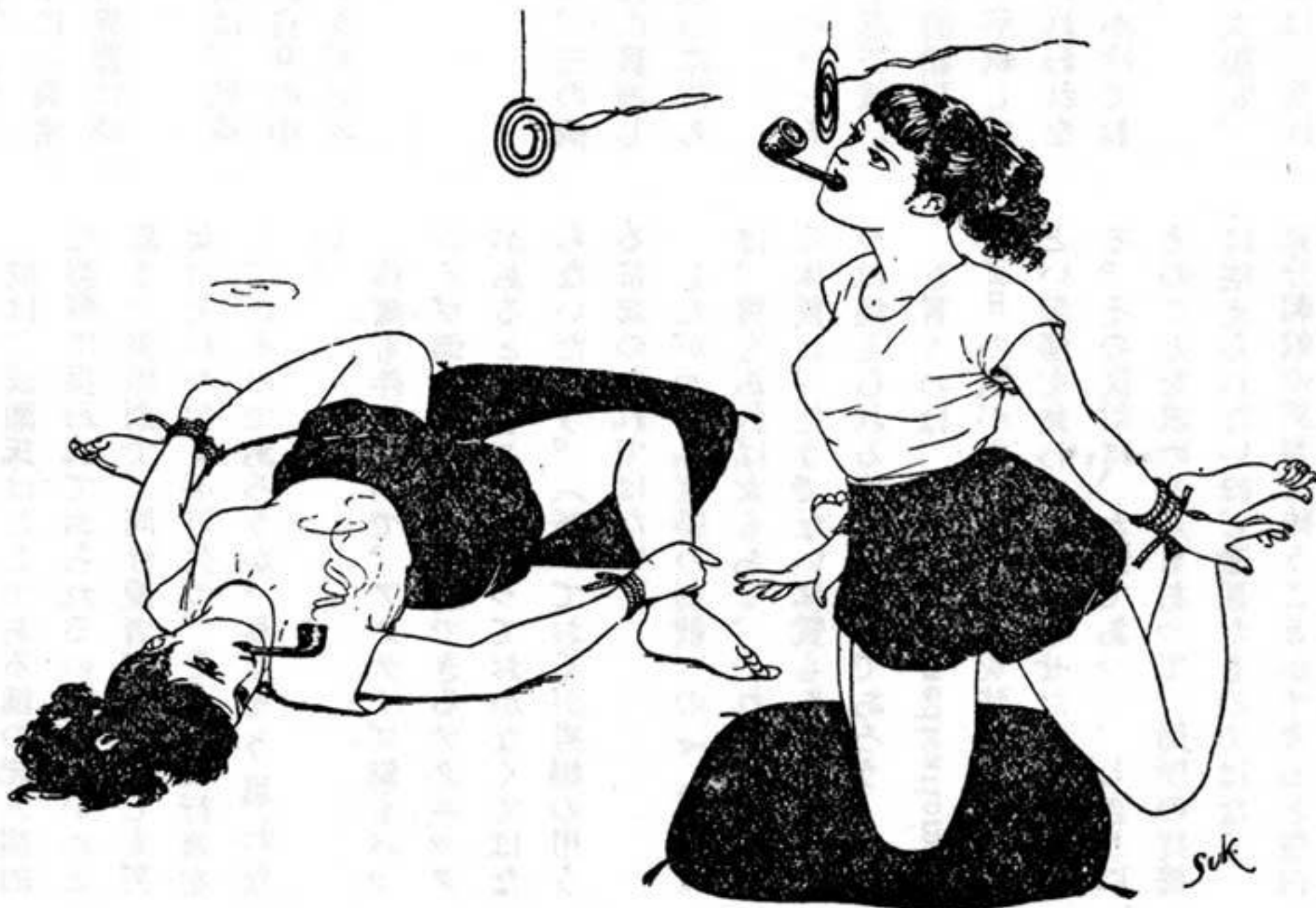
この成瀬氏の主張に私は異議なく賛成したい。たしかに、それは本誌にとって半面の使命であるからだ。

だが、他の半面の使命は、倒錯者の人生問題の解決、その人間的苦悩の救い、と言うことであることを私はここに「自らの問題」して論じたのである。

かくて、本誌が、文化的意義の純化向上と、高いモラルの昂揚に多大の貢献をされることを衷心より期待して擱筆したい。

(三〇、一、二五)

煙草 畔亭数久画・(京都・R大生アイデア)



(昭和三〇年五月号掲載)

私の体験記

女サデイストの手記

長瀬 昭子 画と文

つたない『私の体験記』が、はからずも三月号誌上に掲載されました、本当に光栄に存じます。女性であり乍ら私程ひどいサジスチンは珍しいでしょうし、あまり珍しすぎて、作り話ではないかと疑われそうな気も致します。でも私としましてはありのまゝを、少しのつゝみかくしも誇張もなく書いたつもりですし、今からも嘘は書きませんから、別段思い残すことは御座居ません。私には私なりの理窟がありますから、狂人とは思わないで下さいませ。

私は女性の美しい肉体を讚美致します。殊に女性の肉体に力が充滿して、緊張しきった

時程美しいものは他に類がないとさえ思います。スポーツに舞踊に此の種の美しさは、絶えず表現されて居ります。でしたらもっと端的に美しい女性が肉弾相うつ格闘を演じたならば、此れ程美しいものが他にありません。女性美の極致はメトミにあると、私は信じて疑いません。此んな所に、私の満足感があるのではないでしょう。それに女性同志の格闘には女性特有の柔い感触がありますし勝った時の優越感又格別です。私は、優しく淑かであるばかりに（私だって不断はそうですが）メトミの味を知らない世の女性の方々を、かえって気の毒に思う位なのです。前

置は此れ位にしまして、本文に入ることに致しましょう。

当地には銭湯と云うものが一軒もありません。と云いますと不審に思われる方がおありかも知れませんが、事情を知っていれば少しも不思議なことではありません。当地は炭礦地帯で会社の大きな共同浴場がありますのを会社以外の一般の人達まで利用していますし会社もサービスだと思って黙認していますので、たとえ銭湯が出来たにしても、金を払って銭湯に行く者は誰も居りません。そんなわけで絶対に銭湯が出来ない道理なのです。

然し炭礦の共同浴場と云いますと、殺風景な薄暗い場所を想像されるかも知れませんが何うして何うして当地の炭礦は大手筋の大会社ですし、其れに浴場は未だ真新しいのですから、清潔なこと、設備のよいことは、小さな温泉場の浴場等は顔負けでしょう。広さは普通の銭湯の四倍はあり、浴槽も床も真白いタイル張りで窓は広く明るく、此所に入っていますとさながら大温泉場に来た様な錯覚さえ起きて参ります。勿論入場無料ですから、番台もなく番人も居りません。

ですから私の家には浴室はあるにはありますけれど、態々手間と燃料を使ってわかすよ

りは共同浴場を利用した方がずっと便利で経済的ですので、何時もタオルと石けんを持って出かけることにして居ります。午後になりますと此の広い浴場も相当混雑しますので、静かに入浴するのが好きな私は、成る可く人の少い午前中に一人で行くことにして居ります。こうしますと何うかした時には入る時から出るまでたった一人のこともあり、ほんとにゆっくりした気分になれますが、あまりお湯が豊富すぎてもったいない気持さ致します。今からお話し申上ますのは、そう云った静かな浴場内での出来事で御座居ます。

確かあれは昨年の十月頃だったと思います。が、午前十一時頃の一番人の少ない時、私は何時もの通りゆったりと浴槽にひたって居りました。其の時私より先に来ていた奥さんらしい女が二人居りましたが、一人は直ぐに上って行きましたので、残りの一人と私とが残ったことになりました。私は手足を伸ばして充分温まってから浴槽を出て、入口とは反対側の床に座って身体を洗い初めました。途中で誰か又一人『ガラガラ』と界の硝子戸を開けて入って来た様でしたが、私は別段ふり向きもしませんでしたので、其の時は誰だか知りませんでした。しばらくしてからお湯をく

もうと思つてふりかえった時、浴槽につかっている其の女と顔が合つて、

『あら!』

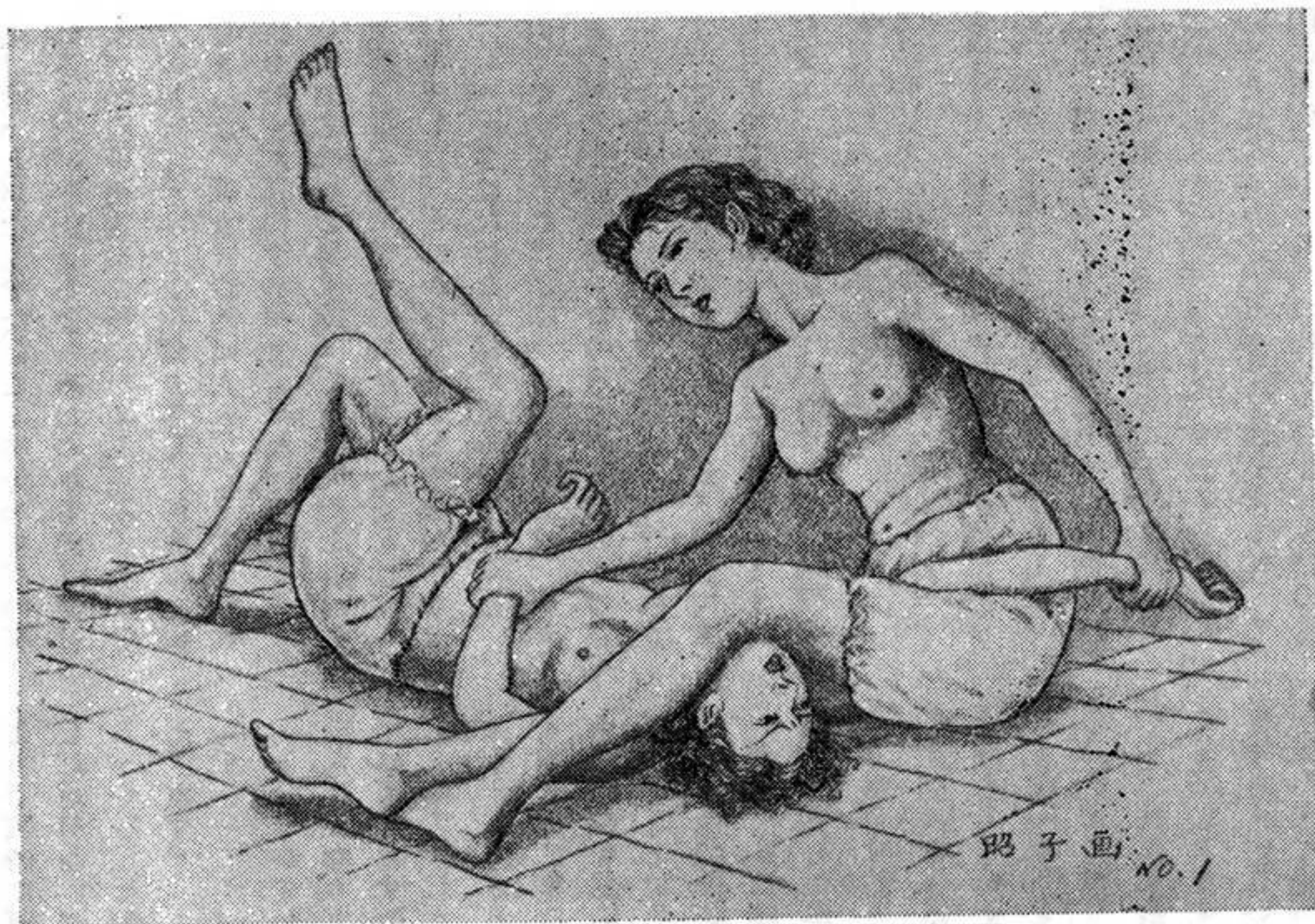
『まあ!』

と同時に、思わず声が出てしまいます。何とそれが思いがけもなく洋子でした。洋子は『私の体験記』にも書きました様に、何ヶ月か前、私の家の二階に誘い上げて、無理無態に組み敷き散々いじめ抜いた可愛い女性なのです。其の後何うかした時には顔が合つて彼女は恥しそうに頬を赤らめるのでしたが、まさか此んな処で、しかも真裸でいきなり出合うとは予期していませんでしたので思わず声が出たのでしよう。彼女もきつと同じ思いだったにちがいありません。でもまさか此所から直ぐ逃げ出すことも出来なかったでしようし、人前もありますので赤くなり乍ら努めて平静を装っている様子が私にもはっきり分りました。するといたずら心とでも云いますか、何となく彼女をからかって見たい様な気持になり、直ぐに腰を上げて私も浴槽の中に入って行きます。そして態と彼女に話しかけて見ました。でも二人だけではありませんから変なことをしたり云ったりは勿論出来ません。誰でもが普通にかわす挨拶めいたものな

のです。彼女も内心では怒っていたのかも知れませんが、案外平氣そうに私と応待しますので、かえって私の方が感心すると同時に拍子抜けがした様にも思います。やがて彼女は浴槽から出ると、さっきまで私が座っていた方の床に、かゞみ込んで身体を洗い始めました。若い未婚の女性は入口の方を向いて洗うのを好まない傾向がある様です。

私は洋子の裸体は初めてですので、浴槽につかたまゝ、見るともなしに見て居りました。洋服を着た場合にすんなりしてスタイルがよいだけに、裸になるとふっくりした女性的魅力には幾分欠けている様にも見受けられますが、いかにも若々しい新鮮さがあふれてほんとに美しいと思いました。其の内、私より先に来ていた女は硝子戸を開けて脱衣場に出て行きます。後は私と洋子だけが広い浴室を占領しました。

ふと私は考えるのです。此処でもう一度洋子をいじめることが出来たら何んなにすばらしいでしよう。でもいくら何でも思いますが何うしても此の考が頭にこびりついてはなれません。入口の脱衣場の方は今、着物を着ている女が出て行ってしまえば大丈夫です。と云いますのは、浴室と脱衣場の間には



すり硝子の戸がぴたりじまっていますし、脱衣場と外に出る出口との間にも同じ様な硝子戸が立っていますから、誰か脱衣場へ入ってくればいやでもガラガラッと音がします。それに脱衣場は、かすかなら此所からでも硝子越しにすけて見えますので、私にはすぐ分ります。外からのぞかれる心配は絶対ありません。でも洋子に声を出されれば大変です。板壁一つへだてた向う側は男湯ですし、時折ザッと云う音が聞える所を見ますと、誰かぎきっと入っているのでしょう。然し少し位声が聞えても男が女湯に入ってくることは先ずありませんし、それに洋子だって恥しい処を人に見られるのはいやでしょうから、態々声を出すことは無いに違ありません。でも苦しまぎれに思わず叫び声を出すことは考えられますの

で、あまりひどいことは出来ないでしょうけれど、大抵のことでしたら大丈夫と思いましたが。

そんなことを色々考えて居ります内、さっき脱衣場へ出て行った女は着物を着終えたのでしょう、下駄の音を残し乍ら出て行ってしまいました。其の瞬間私は『今だ』と思いました。ぐずぐずしていて誰かぎき入ってくれば二度と機会はありません。そう思うと私は直ちに持っていたタオルを其の場に投げ出す様に置いたまま、黙って洋子に近よりました。

彼女はお湯をザーッと肩からあびて、石けんを流し終った所なのです。私が近付くと、彼女もびくくりして、おびえた様な表情を浮かべます。彼女もまさか此んな処で何かされようとは、想像もしていなかったのでしょう。湯に上気して桜色に艶々した彼女の頬が、殊の外愛らしく眼にうつりました。

急に彼女の唇が動いて何か云わうとしています。私は小声で

『しっ！声を出しちゃだめ。向うに聞えたらどうするの。見られたら大変だわ』

とまるで威圧でもする様に、さゝやきました。洋子はハッとして顔色が変わります。其の時の彼女の悲しそうな表情は今でも忘れませ

ん。きっと声を出せないことが分って、のがれるすがないときあらめたのかも知れません。私は早速彼女の後にかみ込み、両手を肩にかけてぎゅっと引張り乍ら、仰向けに倒しました。彼女は意外に大人しく、大した抵抗もせずに私のするがまゝになっています。

そこで私は其の場に座ったまゝ両脚を伸ばして膝と膝の間に彼女の細そりした首をはさみ込みました。それから足先と足先をからませてしっかりと離れない様に組み合せてから、両足に力を入れてぎゅっと伸ばします。自然私の膝の間がせまくなりますから、間にはさまれた洋子の喉が、ぐっと締めつけられます。此れは『女レスリング』と云う映画で覚えた手でした。洋子の顔は足の間にはさまれたまゝ、私の方を向いていますので、表情の変化がはっきり眺められます。

ぐうーと両足に力を入れて締めつけて行きますと、眉と眉の間に小さい溝が縦に刻まれ、眉がつり上って眼がとじます。そして形のよい唇がキュッと引きしまり次の瞬間には半開きになって、キッと食いしばった真白い歯が美しくのぞいてきます。それから静脈がかすかにふくれ上り顔が真赤に紅潮して、苦悶の形相と云うのは、此んなのを云うのでし

よう。同時に両腕がびくつと動き、すっきりした足が白いタイルの上を泳ぐ様に滑って、ふっくらした処女らしい乳房が苦しそうにあえぎます。

『う……うッ』

と云うかすかな呻き声が、彼女の喉の奥からもれて参ります。あまり締めすぎて叫ばれては困りますので、それ位の処で足の力を抜き、『フウッ』と一息二息つかせてから、又もう一度ぐうッと締め付けます。彼女の顔も前と同じ様に表情が変わります。でも美しい女性が喉を締められて苦しむ姿は、何と素晴らしいことでしょう。此んなせっぱつまった表情は他では絶対に見られません。

勿論、私は時々ふりかえって脱衣場に注意を向けましたが、幸なことに未だ誰も入ってくる様子はありません。それで私は彼女の首を足にはさみ込んだまゝ、此の責めを五度も六度もくりかえしました。それに二人とも真裸で此んなことをするのは此れが初めてです。タイル張りの固い床も最初の経験でしたので、何か新鮮な雰囲気、我を忘れてしまひそうになります。都合よく洋子は苦しみもがき乍らも大きい声は出しませんし、人さえ来なければ又違った責めをして見ようと思いま

したので、つま先を外して彼女の首を放してやりました。

彼女は髪振り乱したまゝ、ホッとした様に大きく息をしています。そして怨めしそうなまなざしで私を見据え乍ら、急に振り放して逃げ様とするのでした。然し此れ位で許してやるわけには参りません。逃げ様とした為め私は尚更意地悪く彼女を引き寄せて、前のめりになった所を両手でぐっと首筋を押え付けました。彼女は肘をついて支え様としましたが、私が全身の重味をかけて押え込みますので、とうとうたまりかねうつぶせにつぶれます。私は彼女の頭の上の方から逆向きになって押え付けていました。彼女は私の方から見ると右の方に顔をねじむけ、片方の頬をタイルにすり付ける様な姿勢で押えられています。

私は彼女の姿勢を見ると、内心『しめた』と思います。素早く右足を開いて彼女の頭の上をまたぐ様に、急いで身体を前に進めました。そして私の股が丁度彼女の首の上まで来た時、べったり腰を下して逆馬乗りに跨りました。こうしますと彼女の上になっていた方の頬はぴったり私のお尻の下敷きになり、つぶしりした体重に顔が押しつぶされそうになって、さぞかし悲痛極まりない表情だったこ



と、思いますが、残念なことに今度は顔が見えませんが想像するより他はありません。彼女は苦痛に『うっ』とかすかな声を上げ乍ら、急に手足をばたばたさせ初めました。然しいくら抵抗されても、跳ね反される様なへまは致しません。そのまゝの姿勢で両膝を相手の肩にのせ、ぐいっとなみ付けると同時に、両腕をねじ上げる様にして腰のあたりに組み合わせ、手首をしっかり押え付けてしまいました。こうなればどんなに暴れようとしても、上半身腰から上はびくともしませんが、足だけがやっとな動かせる程度なのです。彼女は身じろぎ一つ出来ないのを、時々びくっとな動こうとします。

然し今日はパンティー一つつけない真裸ですから、

此うして見ると其の快さは格別でした。それに片頬だけにしても、洋子の可愛い顔をお尻に敷いた気持は、ほんとに何に例え様もあります。同性に対する優越感とでも云いましょうか、征服をなしとげた勝利感とでも云いましょうか、到底筆舌にはつくせない複雑な興奮にぞくぞくして参ります。

其の内しばらくすると彼女は抵抗しても駄目だと思いきらめたのでしよう。私に組み敷かれたまゝぐったりして、時々かすかな苦痛の声をもらすばかりになりました。

私は出来ることならこのまゝ何時までも続けていたい気がしましたが、そんなことが出来るはずはありません。思いなおして、今日は思いがけもなく此んな素晴らしい獲物を拾ったのですから、此れ位で許してやっといふと考えました。でも此んな機会は又とありませんから、思い残すことのない様にうんといじめて置きたい慾望も湧いて参ります。

丁度其の時、硝子戸の開く音が小さく聞えましたので、私はハッとしましたが、よく注意してみますと男湯の方でしたので、ホッとする思いでした。女湯の方は前と少しも変わりません。それをよいことにして、私は不断いともやって居ります責めを、最後に見てみた

くなりました。

そこで私は立上って向きを変え、うつぶせている彼女を仰向きに反転させます。彼女は案外されるがまゝになりました。

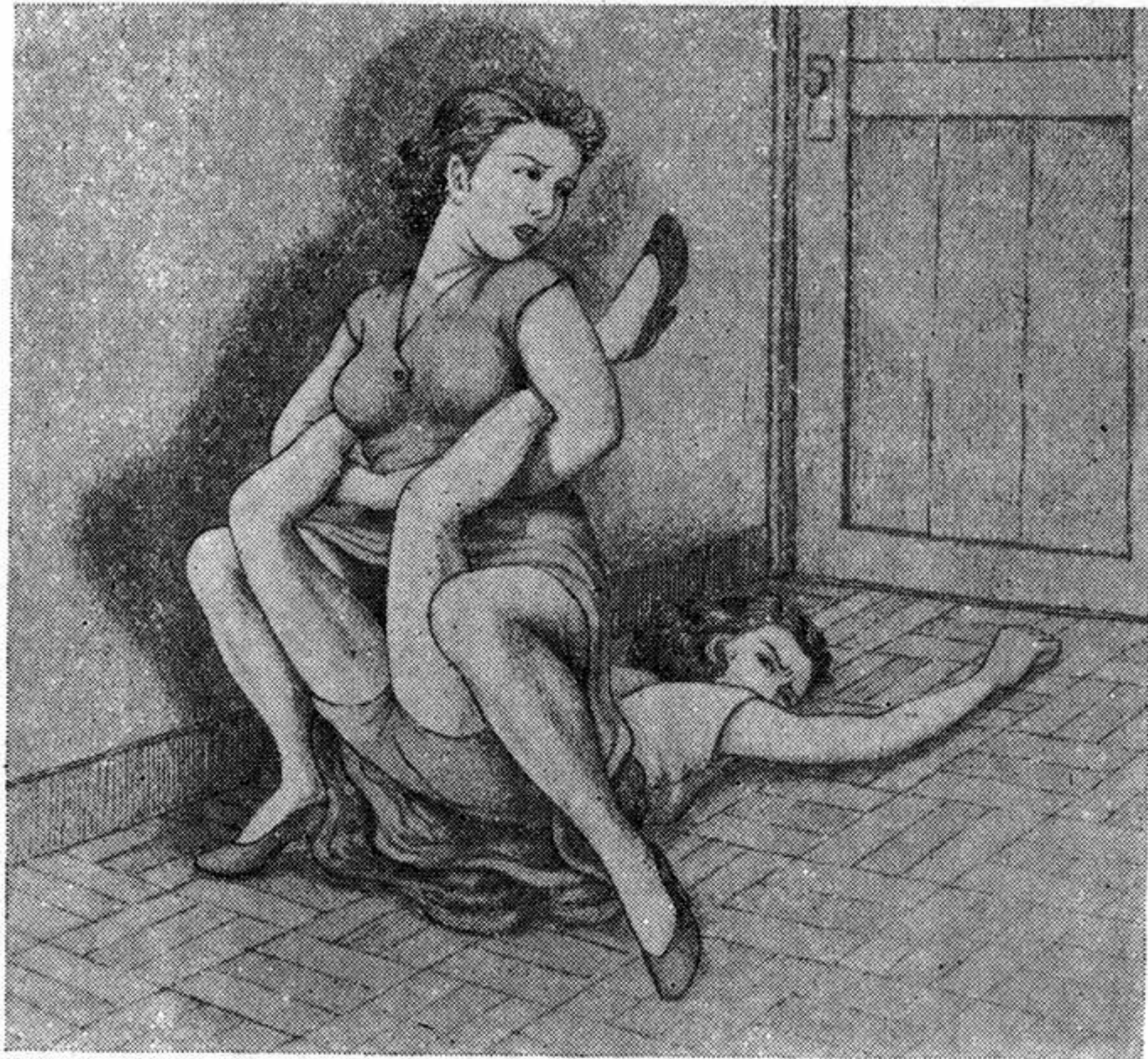
私は構わず彼女の胸の上に馬乗りになり跨ると同時に、両方の手首をしっかりとつかんで、ぎゅっと力一ぱいタイル張りの床の上に八の字型に押え付けました。そしてしなやかな両腕を両方の膝でぐいっとふみ付けにしてから彼女の真赤になった顔を、太ももの間にきっちりはさみ込んでしまします。彼女の右頬にはタイルの合せ目に押しつけられて出来た十文字がはっきり浮んで痛々しい位にさっきの苦闘を物語っています。かわいそうな気持も致しましたが、気をとらな

も致しません。必死に歯を食いしばって苦しみに耐えている様子は健気でもあり此んな美しさは又とないと思いました。

此の前、洋子を組み敷いた時も、此れと寸分違わない責めを致しましたが、あの時は彼女もシユミーズをつけていましたし、私も短い乍らパンティーをはいていま

したので、今日の方が満足感も快い感触もずっとすぐれています。彼女の丸いすべすべした頤から細そりした首へかけて、私の股がじかに押しつぶさります。が、あまり残酷にも思われませんが、こうなればそんなことに構っては居られません。

膝にふみ敷かれてひくひく動こうとする洋子の腕の感触や、かすかに左右に顔をねじ向ける度に肌に伝わってくるくすぐったい感覚に、私はドキドキ胸を高鳴らせて、得も云われぬ気持ちにひたり乍ら、尚もじりじりと喉を締め上げていますと、丁度其の時、軽やかな下駄の音に続いて硝子戸を引き開ける音が聞えましたので、私はハッと我にかえりました。今度はまぎれもなくこちらの女湯の方からの



音でした。もう一刻も猶予は出来ません。私は大急ぎで腰を浮かし、洋子の顔の上をまたいで越え様とした時です。此処でもう一思いととっさに変な考えが浮んで参りました。

と云いますのは不断から私は一つの夢を持っています。それは美しい女性の顔をべったりお尻に敷いて見たいと云う欲望なのです。

さっき洋子の顔を一度敷くには敷きました。顔が横を向いていましたので片頬だけしか出来ません。私の夢はそんなのではなく、真上に向いている顔を上からべったり敷いて見たいのです。それもブローズやパンティー

をはいてではなく、真裸でそうするのが理想なのです。こうすると相手の顔は眼も鼻も唇もびったり私のお尻にふさがれて、其の上の全身の体重がまともにのしかかりますから、此れ以上の苦痛は又とありますまい。勿論息は全然出来ませんし声も出せません。それにもまして此んなことをされた女性の屈辱感は何ばかりでしょう。いやらしさ苦しきさしみめさに死ぬ程の思いをするかも知れません。反対に私の方は此れ程完全な勝利が又とありましようか。最も美しい顔を一番いやらしいお尻に敷くことを考えますと、それだけでむずむずして参ります。然し此れは単なる夢に

とどまって一度も実行したことはありませんでした。いざと云う時になりますと、いくら何でも気おくれがして、出来兼ねたのでしよう。

私は洋子を放そうとする瞬間、此う云ったことがぴんと頭をかすめましたので、まゝよという気持になり前後の考えもなく、そのまゝ腰を下して彼女の顔をびったりお尻に敷いて見ました。時間にすればほんの二秒か三秒でした。時間が、彼女の顔は横を向くひまもなく、物の見事にお尻の下敷きになってしまいました。

『うう……』

と喉の奥からしぼり出す様なかすかな呻き声と同時に、彼女の死にも狂いにはき出す息で私の皮膚がかゝると熱くなるのを感じる。私は大急ぎで飛びのく様に彼女を放しました。洋子は起上る元氣もなく、せいせい喉を鳴らせ乍ら、ハッハッと肩をふるわせています。私は脱衣場に入って来た女に感付かれやしないかとははらしましたが、幸なことにととうとう分らずにすみしましたし、洋子もせい一ぱいの努力でかくし乍ら逃げる様に浴場から出て行きました。

私は、それまでも何人もの美しい女性を

組み敷いていじめて参りましたが、此の時程の満足感を満喫出来たのは始めてのことでした。恐らく一生最大の思い出として心の奥深く刻まれて行くことでしょう。

それにしても洋子には何の怨もありませんし、本当にお気の毒だったと何時も思っています。出来ることなら何んなことをしてゝもつぐないをして上たい気持で一ぱいになります。

私も此のことがあってからは、前程女性をいじめたくてたまらない気持が幾分うすらいで参りました。何故か自分でもよく分りませんが、あんな恵まれた機会が二度と来ないことを思いあきらめて居るのかも知れません。

でも洋子の顔をお尻に敷いた瞬間のことを思い浮べますと、心臓が高鳴り下腹のあたりがうずうずして来るのを見ますと、機会さえあればどんなことを仕出かすかも分りませんし、自分自身が恐しくてなりません。もう二度とくりかすことのない様、心の中で念じ乍ら、つたない此の稿を終ることに致します。

(以上)

(昭和三〇年五月号掲載)



愛と憎しみ

塙 不二子



(一)

「あッ、あの方だ」

と私は思わず知らず跡を追いました。渋谷駅西口からはき出される人達がかねて公衆便所の辺りを職場にしている妾なのです。初めのうちは駅の改札口のすぐ前や地下鉄の登り口、証券会社のビルの横まで進出していた事もありましたが、だん／＼追い払われてこんな所へ来てしまつたのです。妾は肉付の締つた割合にスラリとしたタイプで、もうコートなしの和服にグリーンのシヨールだけといった恰好に自分でも自信を持っていました。

「お茶飲みませんか？」

と妾の方から声をかけたので

一週間ほど前のことです。

「もう飲むのは御免だ、早く帰つてグツスリ眠りたいよ」

そういつて手にさげていたケー

キの包みを妾の方へ無造作に出し

乍ら

「おい君、これ上げるから今夜は御免／＼」

とスタスタ井の頭線の階段を上

つて行つてしまいました。

そのサツパリした態度に、いつ

もなら何んとか云つてしつこく喰

い下る妾ですが、どうしたのかボ

ンヤリ見送つてしまつたのです。

きつと此処を通る人だろうから、

近い内に今度こそしつかり捉えて

やろうと待ち構えていたところだ

つたのです。

背を叩かれた彼はびつくりした

顔で、振り向きざまじつと妾の顔

を見詰めています。

「フ、分かつて？この間、ケー

キを頂いたの妾よ」

「あゝ君か、でもよく分つたな」

「そりや分りますとも、妾ラブし

ていたんですもの」

本当は彼の歩き方が一風変つた

急不足であつたのです。

「妾この先の喫茶にいるのよ、お

茶どう」

もう沢山だよ」

「それなら静かな処へお供させて

妾、お店へ行つて持ち物をとつて

来るから待つてね」

実際そんな安バー等へ案内しよ

うものならどの位ぶつたくられる

か知れやしない。大人しそうな彼

は抗らわずに妾について来ました

女給が三人交代で客引に出る規

則になつていますが、場所が悪い

のか客もありません。何んとか持

ち物だけ手早く取つて出ようと思

いましたが、店へ顔を出すなり、

「マスターが呼んでるよ」

又客を引ばつて帰らないと小言

を浴せられるに決つてゐる。いや

になつてしまふ、しぶ／＼梯子を

上つて行く。四坪ばかりの狭い店だから満足な階段など無くて、梯子の裏から覗かれるとすつかり下から見えてしまう、上りきるとバタンと上げ蓋式に板を元通りに下して、上り口の上まで部屋の一部に使う仕掛けになつていたので

す。

「おい不二子、客をどうした？今夜は誤魔化そうたつて瞞まされはしないぞ、今小窓から見えていりや男と一緒にたじやないか、あれは何んだ。お前はな、この店の女なんだぞ、客を一人でも多く引張つて来るのがお前たちの商売だぞ其れに何んだ、これから何処か安ホテルへでもシケ込もうてえのか」

見られてしまつたか、今更下手に弁解したとて仕方がない、妾は黙つていました。

「おい、つつ立つていねえで此方へ来な」

マスターは妾の腕をグンと邪険に引張りました。

妾は思わずよろけて彼の膝の上へ転つてしまいました。

「お前、痛い目が見たいんだろ見たけりやウンと見せてやるよ」

妾はもう駄目だと思ひました。

階下への逃げ口は塞がれているし、バーテンや女達も気をきかせて何処かへ行つてしまつたのでしよう。

「何すんのさ」と妾も睨み返ししました。

「やい泣き面かくなよ」

そのまゝ妾を横ざまに抱きすくめ様とします、妾は力一杯押し返してパツと飛びのきました。がベニヤの壁板にどんとブツつかつてはねかえりざま前に倒れました。

「待て」

と男の力で今度は妾の肩に手をかけるとグツと胸をはだけさせ、帯を解こうとするのです、妾はマスターの二の腕の内側の柔かいところを思いきり抓つていました。パツと立ち上つた男は何時持つていたのか革バンドを片手にひつ下

げているではありませんか、妾はハツと思ひました、その妾のひるむ隙に乗じてバンドが振り上げられたと思つた瞬間、妾の肩から背中へかけてじんと熱い棒が走りました。妾は壁板にしがみ付いて、「許して、許して！」と叫んでいました。

「ザマア見ろ、初めから大人しくしていりやいゝんだ」

帯はとけ、裾も乱れシユミーズも肩からさけて上半身は裸になつてしまつていました。

「いゝ体だ」

男は尚も妾を抱きすくめ様と近寄つてきましたので、ガブツと鞭を持つていた手首にかみ付きました。

「何するんだ、よしウンと懲らしてやるぞ」

妾の細紐を抜き取ると腕を後にネジ上げました。妾は嫌な男からこんなヒドイ目に逢わされて反抗したい心の底から、何んだが熱い燃える様なものを感じて来ました

此はいけない、忘れていた心のきずが又うずき出したのでしようか。

「やい、こうしてやる」

まだ妾の体温が残つていそうな今解いたばかりの細紐でネジ上げられた両腕をしつかと縛られ更に乳房まで一巻も二巻も廻してグツと締め上げられてしまいました。

「いゝザマだ」

縛り上げた妾の裸体をむさぼる様に眺めていた男は、汚れたタオルで妾の口までしつかり塞いでしまふと、もう一度鞭をとり上げて転つてゐる妾を用捨なく叩き始めました、妾は古畳の上をゴロゴロころげ廻つて少しでも鞭の先を逃れようと身悶えしましたが、声さえ出ず事が出来ません、呻めく、苦しさ、そして快さ。

「不二子おれが憎いか、俺はお前が可愛くて仕方ないんだ」

男はそう叫び乍ら尚も鞭を腿や腓までも浴せて来ます。妾だつてどうしたと云うのでしよう。此ん

なにされても、この残忍な男が憎めなくなつて来てしまつたのです。外に待つてゐる彼の事など、すっかり忘れ果てゝ今では自分から鞭の音と、肌を走り廻る焼ける様な苦痛にのたうち廻るのでした。

妾をこんな女にした義兄さんがうらめしい、義兄さんの馬鹿、妾は呻き声と一緒にこう叫ばずにはいられませんでした。

立てば頭のつかえそうな中二階です、天井も張つてなく屋根裏が丸見えの裸の梁を見上げると、男は妾の細紐をばらりと解いてしまいました。

妾はもうハア／＼喘ぐばかりで抵抗する力もありません。男のするまゝになつていました。妾を引立てる様に起こすと裸の梁に両腕を左右別々に縛りつけてしまうのです。丁度十字架にかゝつたキリストの像の様、ロマンチックな夢ケーキのひと包から生れた哀れな女囚です。無防備の裸身を思うまゝ男の眼の前にさらけ出している

のです。部屋の中央に磔になつてゐる妾は前から後からも男の燃え立つた視線から覆いかくす何物もないのです。これからどんな残酷なお仕置きが加えられるのでしょうか。

(二)

義兄さんの馬鹿、妾にこんな痺れるような秘密な悦びを教えたのは義兄さんなのです。

すぐ傍の土手の上を京成電車が時折ゴォーと通つて行く。妾は昔々綴方教室という女の子の作文で有名になつた東京の四ツ木にその頃住んでいました。姉は前から銭湯に行くのが嫌いで、裏のゴム工場の流し湯をバケツに汲んで来ては狭い台所の隅で行水を使うのです。体だけ大きくともまだ子供ぽかつた妾にも姉の真白い肌は何んだか青や黄色い瑕跡が絶えないのを不思議に思われましたが、其れが何んの為めか分りませんでした。

戦争が益々激しくなるにつれて女工員をしていた姉が妊娠六カ月で過労と營養失調からか、とうとう亡くなつてしまひました。最後に息を引き取る時(義兄さんと此れから仲よく暮しておくれ)と云われた事が妙に忘れられません。

急にガランとした家の中で一人ポツネンと義兄の帰りを待つてゐるのが淋しくて堪りませんでした。靴の音がするとやつと帰つて来てくれたかと、まるで恋人でも待つていた様に胸がワクワクして来るのですが、其の音が途中で消えてしまつたりすると、其の遺瀨無さと云つたらありませんでした。

丁度勝手元でおそい夕食の跡片付けをしていた時です。ガラツと戸が開いたのでハツと思つて振り返つたとたん、どうしたバズミか持つていた洗いたての茶碗がすべつてガチンと大きな響を立て、板の間に碎け散つてしまつたのです。ズカズカと上つて来ました残業帰りの義兄がやにわに腕をネジ

上げて妾の頬を打つたのです。今迄に見たこともない怖い顔付でした、妾は思わず其処にしがみ込んで、両手で顔を掩つて泣き出しました。

又こんなこともありました。

姉のお墓参りに丁度義兄が珍らしく休暇が取れたので留守をお隣に頼んで、二人して出掛けた時のことです、妾は踞んで一心に墓石にお水をかけていると、義兄がじつと妾の後から見詰めているのはありませんか、その眼が妾の大人になりかけた尻の丸味に注がれていて、その眼の中に妙にネバツこいものが光つていましたのでゾォーとしたことを覚えています。

其頃は愈々空襲が烈しくなつて今日焼き払われるか、明日焼き払われるかと毎日心も体も落着かない日が続きました。あの辺は今でもゴミゴミした処ではありますがたつた一人留守番している妾はなんだが、恐ろしくて仕方がありませんでした。早く帰つて来て呉れ

「ばと義兄一人を頼りにしていた時ですから、お茶碗をこわしてグツと両腕をネジ上げられて頬を叩かれた事も忘れて、まるで新婚時代の若妻の様にいそいそと義兄を迎えたものでした。丁度配給のお酒があつた日です。貧しいながらも食卓にお酒をつけて。義兄も気嫌よく、たつた一合の酒をうまそうに飲みました。」

「近頃急に奇麗になつて来たね、まるで姉さんそつくりだよ」

一寸顔を赤らめた彼は妾の顔ばかり見てそんな事を言いました、何んだか妾の方が羞かしくなつて下を向いてばかりいました。「知らない人は夫婦だと思つていいよ」

馬鹿馬鹿しい、二十も年が違つてと思つても、その言葉には万更悪い気持がしませんでした。

「風呂へ行つてくる」と長火鉢の引出しから小銭を出しかけて「おい、此処へ入れて置いた金はどうした？」

「知りません」「知らない？」

其の頃生活は苦しくて義兄も内心イライラしていた事は事実だけれど、今晚はスツカリ楽しそうにしていたのに、何うした風の吹き廻しだつたのでしょうか、別の処へでも置き忘れたことと妾は気にもかけずに、石鹼入と手拭を用意しました。

「本当に知らないのか、隠したつて駄目だぞ」

「えッ？」

却つて妾の方がその声の大きいの驚いて振り向いた位でした。今の先までの義兄とは全く別人といった男が怖い形相をして立つて立っているではありませんか、妾もシヤクにさわつて返事もせずに黙つていました。

「白状しろ、本当の事を云わないか」

と矢庭に妾の胸をドンとつき飛ばしました。妾は不意をつかれてアツと云つたきり仰向けにぶつ倒

れました。彼は起き上ろうとする妾のスカートを手をかけて、とうとうシユミーズ一枚にしてしまひました、両手を後に廻すと揃えて縛つてしまつたのです。勿論妾は夢中になつて暴れたのですが、そうすれば尚更、乳房にまでも紐が喰い込んで来て、もう何うする事も出来ません。殺されるのかと覚悟をきめました。

妾が完全に縛り上げられて転ざれると義兄はニタツと笑つた様です。妾は初めて自分の縛り上げられた恥しい姿に気付いて耳たぶまで真赤にして、顔を畳にすりつけていました。義兄はそういった妾の姿を、じつと射るような眼で眺めているのです。妾は自然に涙が出て来て仕方がありませんでした腰から背中へ熱湯でも浴せられる様な感じ、少しでも逃れようと跪いて見ましたが駄目でした。義兄は皮の鞭をふるつていたのです。姉もきつと此んな風に打たれたり、縛り上げられたり、虐げられ

たのでしよう、それだからこそ銭湯にも行き度がらず、行水なんかで汗を流していたのです、然かも姉は或はこうされたことを喜んでいたのかも知れません。姉夫婦は側から見ても仲のよかつたことは疑う余地もなかつたのですから。

義兄は妾の髪の毛をつかんでゴシゴシと畳にすりつけ、「白状しろ、白状しろ」と狂人の様に迫ってきます、妾は只「かんにんしてかんにんして」と夢中で叫び続けるばかりでした。生れて初めて知らされた折檻、そして叫んでいるうちに何んとも云えないうつとりとした境地に陥つて行くのでした縛つたまゝの妾の裸身を義兄は力一杯抱き締めると、耳のそばへ唇を寄せて、

「こんな事しても、仲よく一緒にいて呉れるか」

と心の底からの願をこめて囁いたのです。妾はたゞ頷くばかりでもう声も出ませんでした。

(おわり)

(昭和二十九年九月号掲載)

アブ追及三十年の回顧



女

の

禪

山田正美

妻と同郷人で私の勤務先とも仕事の上で密接な関係のあるA君が、さる素封家の令嬢と結婚したのは昭和二十八年の秋で、私達は友人としての間柄からその披露宴に招待される事になった。

是非共夫婦揃って来て欲しいとの話で、妻は勿論日頃親しいA君の新妻の顔を一刻も早く見度くてたまらないらしいし、兎に角当日は子供を近所の他家へ預け、旁々留守中の事

を頼んでさて仕度にかゝったのが四時頃。

妻の美智子は特別御念の入った化粧をして訪問着に着かえ始めた。長じゅばんの襟をかき合せている処へ私は急に思いついて禪用の晒木綿を持ち出した。美智子の面上に羞恥の色が閃めいた。此んな場合、私の顔からわざと視線をそらせる癖がある。

「どうだい？」

簡単な問いかけに応じて美智子は唇に薄笑いを浮かべ乍ら私の意志を受理していた。

実際変てこな秘密の多い私等夫婦の日常でも、美智子が禪を締めて外出した事は稀れであるし、わけても晴れがましい公式の宴会に夫婦の性生活と直結の関係のある、此の種の

倒錯的な秘密を服装の下に匿して持ち込むなぞと云う事は全く初めての経験である。

此のような何か新らしい刺激のある冒険を試みる時、私の要望を受け入れる美智子の態度は、大体三つの段階に分ける事が出来るがその各段階ごとに、私は我が妻乍ら彼女の心に驚嘆せざるを得ないのである。即ちその最初の段階では「彼女の私に対する柔順さ」に驚ろき、次の段階では「呼び覚されて行く彼女自身の変態性」に驚ろき、第三段階に至ってはその「大胆さ」にむしろ呆然とさせられるものがある。

美智子は恰もそうする事が当然であるかの如く、一旦羞恥を通り越すと今度は平氣の平

左でズロースを脱ぎ捨て、無言の儘十六尺の晒木綿をキリキリと股間に締め始めた。流石に外出する時は、相撲用の褌は分厚いので用いられない。それでも晒木綿を捻り捻って股間へ噛み込ませる事はいつもの通りである。

「そんなに強く捻り込んで大丈夫かい？」

「大丈夫よ」

「へえ。腹や背中のところが出つ張って、スタイルが悪くならなければいゝがね」

私はわざと心配顔を作って見せる。

「スタイルなんかどうでもいいゝじゃありませんか。あらいゝ気持！」

美智子は腰を伸ばしたり股を開いたりして図太い態度で感触を味わって見る。余った相当長い部分はブラジャーの上まで適当に巻き上げ、女やぐざ「やらずのお美智」が出来上がる。此れは褌を締めた妻に対して私がつけた仇名である。

「短刀は？」

「へえ、挿して行くのかい？」

「止しましょうか」

「止さなくてもいいけれど、着物を着た時具合が悪くないかね……」

と云い乍ら私は刃渡り六寸の白鞘を取り出す。此れは真物で柄の箇処に私の手彫りで

「やらずのお美智」と彫り込んである。

結局美智子はそれを両乳房の間に挿し込んで、その上から訪問着を着て紋付の女羽織を重ねた訳である。さてそうなると五尺〇八分十四貫の彼女の体格は、身体中のどの部分でも女性一般の標準より太い事は確かで、私の気にした褌も短刀も外見では殆んど目立たない。どこから見ても三十才前後の奥様然として見えるので幾分安心したものだ。

愈々家をあとししてバスの座席に並んで腰を下ろすと若干のスリルを感じさせられる。

縁儀のよい話ではないが、此のバスが若し途中で衝突転覆でもして、美智子が病院に担ぎ込まれ、医者や看護婦に取り囲まれたベッドの上で、万一にも「やらずのお美智」が曝露したとしたらどんなものであろう。負傷の全治した時を以て今度は脳病院へ入れるかどうか問題となる事うけ合いである。でなければ此の温厚なる会社員山田正実氏は、飛んでもない女とばく師兼女暴力団員、やらずのお美智なる物凄い妖婦を妻としていた事になる訳だ。

A君の結婚披露宴の会場は京都の中心地、木屋町通りにあるF亭の二階広間である。

此の宴会の模様を詳述すると、筆者の正体

が近親者の間で露見する恐れが多分にある。何しろ「奇譚クラブ」は意外な処に隠れた読者を有している雑誌だから、此の夜同席した四十余名の招待客の中にもこっそりと奇譚クラブの密読を楽しむ厄介な手合が、一人もないとは絶対に保証出来ぬ話だ。にも拘わらず私は当夜のいきさつを或る程度書いて見たい誘惑を感じている。

披露宴は盛大に開かれた。

先ず仲人が碎けた態度で挨拶した後、新郎新婦を末座に紹介すると、新郎A君は「御多忙中を私の為態々御来駕を賜わり厚く御礼申し上げます。粗末なおもてなしではありますかどうかお氣持だけでも、御ゆるりとくつろいで一夕をお過ごし下さい」と云った型通りの口上を述べ、それから初々しい新婦と共々お銚子を持ち廻って接待に努めた。成る可く余談は略すとして、さて酔いが大分廻りかけた頃、A君の加入している商業組合の役員で、私も以前から面識のあるN氏が

「結婚生活に対するA君の決意と抱負を伺い度い」と云い出した。

そこで四角張ったA君は末座に起立して、さて何を云うかと思つたら此んな意味の事を述べたものだ。

「今宵、特に御夫婦お揃いでお招きした山田さん夫妻こそは、実に私の理想とする結婚生活を営んで居られます。山田さんの御家庭に於ては夫婦は互いに眼と眼を見合わせるだけで意志が通じ合うらしいのです。つまり以心伝心の会話が出来る。うそではない。私は山田夫人美智子さんと同郷人である関係もあって、夫妻のいずれとも親しい訳で、従ってその御家庭に於ける御様子を拝見する機会も多いのであるが、此の点に就いては全く敬服しているであります。勿論先輩諸氏の中にも山田さんのみならず、斯様な実例は多いものかも知れませんが、要するに夫婦となり、偕老同穴を誓い異体同心の愛情と理解の交流する生活に依って、人生の幸福を期するならば、実に夫婦間に於て似心伝心の会話が出来るところまでゆかねば駄目だと思えます。私は山田さんの口から美智子さんに対する不満を伺った事が一度もないし、又反対に美智子さんから夫に対する不平も聞いた事がない。実に愛情そのものゝ中に住んで居られるとしか考えられない。恐らく山田さん夫妻の間では今日まで夫婦喧嘩など云うようなものは一度も起らないし、又今後も起るまいと思えます。以上の理由に依って私としては絶好の

お手本がある訳で、従って私の結婚生活の理想と云うものは一言に説明出来る。言うなれば山田さん御夫婦を真似る事、即ち此れであります。」

うわあ、パチ／＼。

まあ読者諸兄弟よ。御推察願ひ度い。好漢A君の此の言たるや如何に私の顔面から火を

発せしめるに充分であつたかを……。

私の右隣りにそれ迄はイケ酒々と済ましていた流石のやらずのお美智も、此処に至って俯向いた顔が容易にあがらず、既に数杯を傾けた廻り加減も手伝って、朱泥に塗れた人形首の如く成り果てる始末だった。その上、「では若夫婦の参考に供する為、山田さんに



夫婦仲円満の秘訣を公開して頂き度い」

とN氏が云い出し、面白半分の拍手喝采と来てはもうイケません。余り恐縮ばかりし過ぎると座を白けさせる結果になるし、ちらと美智子に視線をやり乍ら、兎に角立ち上ったものゝ、突嗟にうまい文句が出て来ない。まさか真っ正直に「やらすのお美智」や「女覆面」「女武者」との、あの狂態をブチまける訳にはいかないし、それ等の事柄を秘して置いて何か気のきいた演説が出来ないものかと考えた挙句、斯う云う意味の事を述べたと覚えてゐる。

「A君が私達を仲のよい夫婦の標本のように考えて居られたとは実に意外である。成る程そう云われて見ると私等は余り夫婦喧嘩をしないかのように思われる点もあるが、実はしよっちゆう秘密でやっているのである。但し此れは云わば私達の間だけで合意の上の馴れ合いの夫婦喧嘩であって、最初からどちらが勝つかあらかじめ定めて置いて開始するのである。此んな拵えものゝ夫婦喧嘩であるから私が勝とうが負けようが、又家内が勝とうが負けようがどうでもよいのであって、最初は私が勝つ予定で始めても喧嘩の最中に勝つよりも負けの方が面白くなれば何も云わずに負

けて仕舞う。家内もよく心得ていて無言のうちには鮮やかに予定が変更される。此の呼吸が喧嘩以外の事柄にも影響して居り、先程A君のお言葉にあった通りに似心伝心で会話が出るかの如く思われたのかも知れない。つまり私等夫婦は此のうその喧嘩をやるおかげでそれが一種の中和作用を及ぼし、決定的な本物の喧嘩が発生するのを未前に防止しているらしいのである。此処で御注意願ひ度いのは此のうその夫婦喧嘩と云うものが如何に面白いかと云う事であって、実際やり始めたら止められないくらいのものだ。従って私等夫婦が本物の喧嘩もせず幸福であるとしたら、それは此の面白いうその喧嘩を共に享樂した結果の偶然の所産に過ぎない。私に云わせればA君こそ温厚な人格者であり、然も近代的な好男子である。A君が結婚するとすればその相手の女性はどんな人であろうかと、私等夫婦の間でもそれは興味深い話題であつたが、はからずも今宵の盛宴に末席を汚し、さて花嫁を眼前にして成る程と感嘆している。実に花嫁はすすくくと伸びた若竹の如き女性であつて、その挙止動作のうちにも心根の正しい人である事が判る位だし、私の家内の如く無暗に鼻ばかり高い顔ではなく、実に均整のとれ

た端麗な美人である。私なんぞはこれから先A君の御家庭を訪問する度びに、あてやかな新妻振りに眼の保養が出来ると思つて今から喜こんで居る次第である。然し乍ら人生は長いもので波乱起伏も一再ならず待ち受けている事であろうが、A君御夫婦の場合は既に自然が幸ひしている。私等夫婦の円満さが偶然の所産であるとしたら、それはA君御夫婦の円満さに前以てあやかっていた訳である。更にA君の場合此の幸運に輪をかけた条件として、夫婦共に性格上の美点がある。A君は若年乍ら商店経営の才に秀で、花嫁が又内助の勞を惜まざるに於てはその前途の多幸なる推して知るべきである。結論を申せば私達夫婦の如きはA君にとっては何ら模範とするに足らない。むしろ私達こそ此れから示すA君夫妻の建設的明朗性を手本としなければなるまいと思う。最後に多幸なる新夫婦の前途を祝して乾杯を致し度いと思う。」

此処で満座一齊に杯を上げてくれたので、うまく胡麻化したつもりで尻を下ろして仕舞つた。此の演説を前半だけで終つたら恐らく「そのうその夫婦喧嘩とは如何なる要領であるのか、具体的に知り度いから幸い夫人同伴の此の際ちよつと実演して見せてくれ」なん

ぞと云う突拍手もない追究的要求が、誰かの口から飛び出したかも知れない。いずれにせよ「喧嘩云々」の説明の辺りでは、美智子がハラハラと心配した事は確かである。

座はそれから益々賑わい、高砂を喰る人、都々逸をやる人、酒興今や酣わとなった。

すると突然美智子が何か小声で私にささやいた。騒がしくてよく聞こえない。「何んだ？」と問い返したら、

「しびれて来た」と云うのである。

此の場合、山田夫人美智子さんが云うのならば、長い正座に堪えかねて脚の関節が「しびれて来た」のであるが、やらずのお美智が云うのならば、晒の褌が喰い込んで腰や股の筋肉が「しびれて来た」と云う意味である。恐らく後者の場合であろうと私は解釈したが更にもう一つ考えられる事は「しびれる」と云う言葉の持つ官能的な印象であって、やらずのお美智がその扮装のおかげで刺戟される事極点に達し、「気持ち」が「アレ」して来た場合をも想像し得るのである。全く以て、「似心伝心」どころではなく、そのいずれとも私が判じかねているうちに、やらずのお美智は山田美智子夫人の皮を被って、まんざら躊躇たる足どりどころかへ姿を消してしまった。後で

聞いたらず先ず便所へ行き、それから着崩れを直す為に別室を拝借とか何んとか云って、空部屋を借り、神経に重荷を背負わせている可愛さ余って憎さ百倍の褌を解き外そうと思つた。ところが若し解き外せば風呂敷も用意して来ていない現在、十六尺の晒木綿と六寸の七首を如何にして持ち運ぶかいさゝか問題である。「えゝ仕様がな」とばかりその儘締め直して来たんだそうだ。

子供の事が気がかりだから、と云うのを理由に、早や目に宴席を辞したのは八時頃だったと覚えている。少し歩いて見ようと河原町通りへ出て、四条の交叉点を北へ人混みを縫って行く。

何しろ兩人とも浮世の苦勞をちよつと忘れる程度に酔いが廻り、宴会場での滑稽感が肚の底に残っても居り、久し振りに子供なしのアベックで、その上広い世間に夫婦だけのエロチックなアブノーマルな秘密を、現に持ち歩いていると云う訳だから、おこがましい話だが行き交う美装の紳士淑女も、交通巡査もタクシーの運転手も、しまいにはネオンサインの字句迄が皆馬鹿に見えた。

美智子は恥かし氣に私の体にぴったりと寄り添い、私以外に此の世で頼りになる男性は

一人もいないと云わぬばかりの風情であつたし、又私も此の世で美智子程の可憐な、純情な、柔順な、そしておきやんな、魅力に富む鼻や容貌を持った、無上に愛しい女は何処を探しても見当たらないと云う思いだった。イヤ失礼。失礼は兎に角、とるにも足らぬ山田正実夫妻の生活にも、河原町通りの総べての情景が、さながら彼等兩人の為にのみ存在するかのような夜が、長くわびしい人生に一度ぐらい訪れたとしても、決して釈尊やイエス様が怒る事もあるまい。

「ホテルなんかの気分はどうだろうね。近頃若い連中の間で大分ハヤっているらしいが」「あら。貴男もそんな事を考えていたの。だけど、そんなお金があつたら御馳走でも買って矢張り家へ帰りましょうよ。貴男は何処かでビールを口直しに飲んでいらっしやい。あたしも少しぐらい頂き度いわ」

あゝ此の京都の文化的な繁華街、河原町の舗道を歩む三十才近い肉感的な人妻が、訪問着の下に男も及ばぬ晒木綿の褌を締め込み、乳房の間に物騒な短刀を呑んでいようとは誰が予想し得ようか。

【註】私達夫婦のうその夫婦喧嘩とは、新年号所載「夫婦の倒錯遊戯」を御参照下さい。

(昭和三〇年五月号掲載)

懸賞入選作品

第四席

—汗について—

おしめカバー

みずしま・まもる



——いゝ子だからね、はい、あんよを揚げて、そうく、ほらね、もうすぐだよ、だめくそんなに脚を締めちや、もっとひらいてそう、そうね、おりこうだね。すぐ済みますよ、すんだらパイパイあげようね、はい、じっとして、動いちゃ駄目だよ、ほーらおしま

い——
これは口に出して云ったわけではありません。三平は、そんなことを考えながら妙子におしめをあてゝいるのです。妙子の浴衣をほどこいて作った、おしめが股の間に三、四枚あ

てがわれました。

更に尻の方から腰を包んで三枚ほどあてられます。その上をゴム引羽二重の茶のオシメカバーで手際よく包んでゆきます。両の太股のつけねをビッチリとゴム紐が喰い込みます。普通は釦で閉じる所を股のつけねから腹部を這って、

二つのチャックが腰までを、そのおしめカバーの前後を縫い合えました。均整の取れた妙子の体はこゝに及んで急に醜くふくれ上りました。幾枚ものおしめを巻きつけたその臀部は茶色のおしめカバーに締めつけられて滑稽なまでにふくれ上っています。更にそのおしめカバーは股間の部分を袋の様に腹下に垂れ下るようにつくられていたのです。

透明のビニールで作られた「赤ちゃん着」をつけた妙子は両手を頭の後ろに緊縛されていました。赤ん坊は自分の手でおしめカバーを外せないのです。赤ん坊は自分の手で便所の戸を開けてはならないのです。両手の拇指を頭の後でしっかりと細い革紐で縛り、更にそれを一束の髪の毛に結びつけてあります。はげしい羞恥で真赤になった妙子は、然し手で顔をかくす術もありません。

——ホーラ、パイくだよ——

三平はオレンジジュースを瓶のまゝ無抵抗の妙子の口にあてがいます。黄色い液体は否応なしにゴク／＼と喉を通り過ぎます。

——もっとほしいの、それじゃ、ホーラー——
三平は二本目も無理矢理にのませてしまいました。口からあふれた黄色い液体がタラタラとビニールの「赤ちゃん着」にこぼれ落ち



ます。

——それじゃおとなしくしてゐるんだよ、行つて来るからね——

三平は妙子の足先も手と同じ様に両方の拇指をしっかりと結び合わせるとはだけているビニールの「赤ちゃん着」をきちんと合わせ布団の上にねかせると会社へ出かけて行きました。

——どこへ行くの、何時頃帰るの——

妙子は思わず声をかけ様としました。然し赤ん坊は口をきいてはいけません。妙子の口の中には一はやく拳大のスポンジが押し込められ、その上を細いゴム紐が喰しぼる齒を割ってほゝから耳の下を首の後ろでしっかりとしめつけられていたのです。

そのまゝ三時間程たちました。

外は上天気のようにですが雨戸はたてられたまゝで、六〇Wの電燈がわびしく室内を照し出しています。

「今日ワー、魚徳ですが」

お勝手口で魚屋の声がします。

——しまった——妙子は血の逆流するのを覚えしました。

「チワー、お留守ですか、奥さん」

妙子はすっかり慌てました。然し縛られた両手はいたずらに自分の髪の毛をひっぱるだけでした。

——そうだ何処かへかくれなければ——

妙子は立上ろうと試みました。然し無惨にも不自由な足は長くひきずったビニールの「赤ちゃん着」の裾をふみつけてどうと転びました。

「コンチワー、今日は御用はありませんか」表では無心に魚徳の小僧が叫んでいます。

妙子はゴロ／＼と転がりました。この浅ましい姿を他人に見られたらどうしよう。何か云って胡魔化そうにも口は嚴重にさるぐつわが噛ませられています。おしめをあてられ、異様なすきとおるビニールの「赤ちゃん着」をひきずって、而も手足を皮ひもで縛られている姿を人に見られたら。妙子はワナ／＼とふ

るえました。

——なんとかしなければ、なんとかしなければ——

妙子は転がりながら身をかくす場所をさがしました。そして洋服ダンスの扉が開いているのに気がつきました。縛られたまゝ虫のようには、はって漸く洋服ダンスにたどりつきました。

リンリ、ン、

魚屋は今度は自転車のベルを鳴らして会図をしました。妙子は懸命になってその中に這いようとして努力しました。然し悲しいかな縛られた両脚は全く思うように動いてくれません。又も「赤ちゃん着」の裾をふんでどっとその場にくずれてしまったのです。

然し良いあんばいに魚屋はあきらめて帰ったようです。あたりは又全く元の静けさに返りました。

妙子は不自然な形でうずくまったまゝもはや動こうとはしませんでした。身体一面吹き出た汗にビニールの「赤ちゃん着」はベタ／＼と裸身に吸いついておりました。額に流れる汗をあわれにも拭き取る術とてありません。

一難去った後、又新しい苦しみが妙子をお

そいました。今朝無理に飲まされたオレンジジュースの為でしょう、急に耐え難い尿意が自由のきかない妙子を責め始めたのです。おしめをあてられているのでそのまゝ垂れ流してもよいわけですが、（その為）夫が股の間に幾重にもおしめをく／＼りつけ更にもれないようにゴム引のおしめカバーをあててくれたのです。——然し妙子は耐えました。

——あゝお便所へ行きたい、何とかしてお便所へゆきたい——

絶え間なく下腹部を刺戟する尿意に妙子はのたうち廻りました。然し所詮赤ん坊はお便所へは行けないのです。小水はおしめの中につれ流さなければならぬのです。

——あーッ、アッ——

叫びはさる／＼つわに遮られてう／＼／＼という呻きになりました。

——う、ううッ——

妙子は又しても新しい苦しみに転げ廻らなければなりません。バサ／＼バサバサツと転げ廻ると共に、ビニールの「赤ちゃん着」は音を立てます。

——ううッ、う／＼——

然し、所詮、生理的な排泄欲はいつまでも辛抱できるわけはありません。股間を包んだ

おしめは尿の為に濡れる運命にありました。

ジョッ、ジョッ——

ゴム引のおしめカバーの中で鈍い音がしました。今や妙子の必死の抵抗を押し切って、尿は無心にほとばしり出たのです。

幾重にも腰に巻きつけられたおしめはみる／＼うちにぬれてゆきました。暖い液体が股間からお尻を、更に背中の方まで腰を廻り腹部を浸してゆきます。おしめは、ある一定の量を吸い取るともはや役に立たなくなりしました。然し尚もほとばしり出る尿は股間の袋を満しました。おしめカバーは妙子のわずかな動きによってもゴボ／＼、ゴボ／＼とあやしい音を立てました。

妙子はうつ伏して、顔をふとんに埋めて、尻を立てた奇異なポーズでじっとおしめを浸しおしめカバーを満して流れ出る尿を意識しました。おしめカバーは多量の尿を包んで意外に重く腰をしめつけました。

鉛の玉でも結びつけた様に重く尿をためた袋が下っていました。

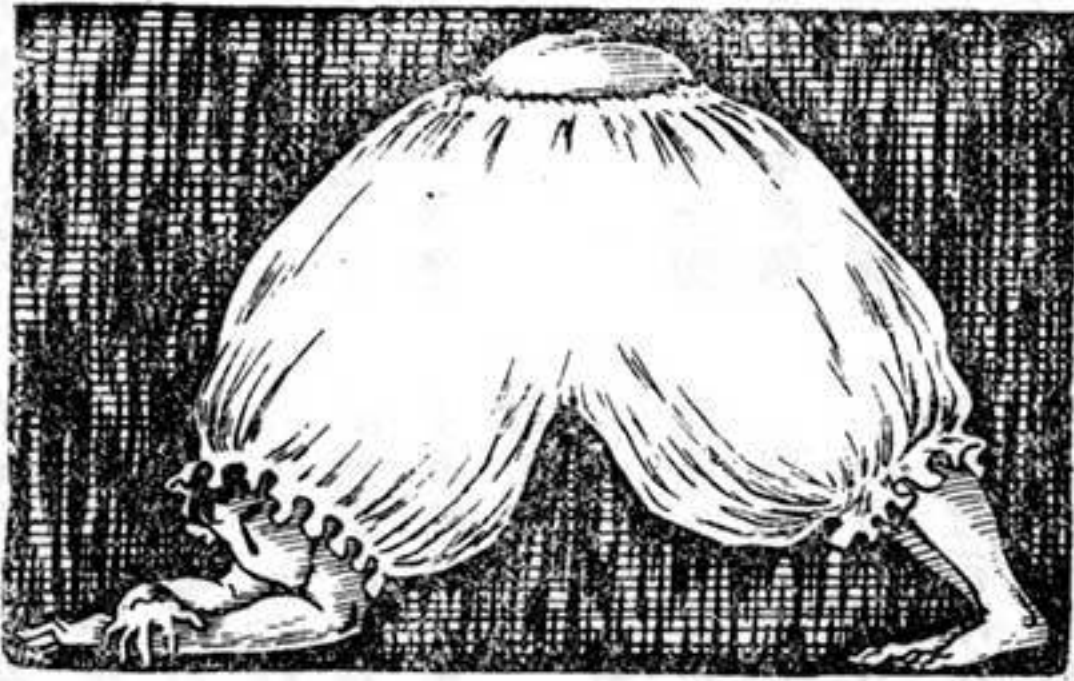
「今日は——、何方かいらっしゃいませんか——」。

玄関で声がすると、そのまゝ声の主はすか／＼上り込んできた様子です。

私の下穿きを

(北海道の荒巻利夫さんに)

一 柳 ト シ



——うっう——

妙子はや力尽きてガバツとその場に打ち伏すと、ぼーっと意識を失いかけてました。妙子の汗の臭いに尿の幽かな臭気が入り混って部屋全体が妖しい匂に満されていました。全身くまなく汗でぐっしりぬれたビニールの「赤ちゃん着」が電燈の光にキラキラと輝いています。両手は痛々しく髪の毛にくっつきつけられ、更に両足を緊縛されて、自分の尿

ですっかりびしょ／＼になったおしめをくくりつけられてうつ伏している妙子の姿は異様にも又あわれでもありました。

入ってきたのは夫の三平でした。妙子を慌てさせてやろうと玄関で一寸お芝居をしたわけです。今日は土曜日で半日なので早く帰ったというわけでした。

三平はうつ伏している妙子を抱き起すとやさしく唇を吸ってやりました。それからスポ

ンジのさるぐつわを取り外すと今度は強く唇を吸います。妙子の両眼からこらえにこらえていた涙がどっと吹き出て三平のほゝを濡しました。

——いいの、いいの、ね、泣かないでいいの
おりこうだったね、さびしかったらうね。お
なかすいたらうね、さあパイパイあげよう
ね、一寸パイパイの前にお尻を見ようね。あ
ッ濡れてる濡れてる。びっしりだ。了、

二月号のフエチ通信で、「ズロースマニア」の貴方の悩みを知りました。私は娘がいつか奇クに書いたように「コルセットマニア」で小さなコルセットの中に自分を押し込めて満足しているもので、ので、貴方の悩みを充分に理解することが出来ません。女の汚れた下穿きに口づけしたい程の気持はどうてい私には分り兼ねますが、マニアとして欲しがられる気持だけは良く分ります。私とても始めはコルセットなど思いもかけず、燃える躰の処置に裸になって重いタンスの裏へ入り、壁とタンスにはさまれた経験もあります。

で、お手紙を書く気持になった
のは、貴方の手記に「新しいのにはさほど気がひかれない」「実物を今だに入手する事が出来ない」「洗濯物の干してある中にズロースやパンティ等が見当ると胸が躍る」「近頃は眺めるだけでは物足らず、手にとって気のすむ迄」等の文章があり、結局貴方は他人の下穿きを頼んでもらう積極性もない所から、洗濯寸前の物を盗むか、現在穿いている人から奪うかしかないでしょう。しかも私のコルセット癖と同じことで集め始めれば始める程新しい(別のと云う意)ものが欲しくなり、遂には社会秩序を乱するものとして法に触れるのではないかと大変心配し

たのであります。

そこで幸い私は下穿きについていさゝか他人と異った癖があり、貴方の欲せられていることと一致すると思ひますので、私の下穿きをお送りいたそうかと思ひ立ちました。

私は今年三十一才、五尺二寸五分、十四貫八百、女子高校三年の娘が一人。夫が私は十四才の時に戦死、以後新潟の別邸を頂いて附近の貸家の家賃で生計をたてています。皮製のコルセットを作り（勿論背縫力リエスと云ふことにして靴屋に作らせている）それを自分に着、娘にも着せて満足している女です。

で下穿きですが、私は決して洗濯をいたしません、穿けるだけ穿いて捨てゝします。それから一日中同じ下穿きを穿いていると云ふことはほとんど無く、春夏秋冬に分けて日課表を作り一日に五回、六回取替えます、一例として今用いているものをのせましょう。

朝（家事） 黒パンティ（二九年十二月買）
昼（買物） メンスバンド（二九年

三月）

夕（家事） 黒体育用パンティ（二九年八月）

夜（雑用） 白パンティ（二九年八月）

眠る時黒ズロース（二八年九月）

以上の如く取替えます、それも各々一、二時間位しか穿かないのです。あとの時間は何を？……云わずとコルセットなのです、一般のコルセットは布とゴム製ですが私の皮で乳房から股をおろう部分もあり、背の紐をしめると（勿論自分ではやれませんが）息も付けない程の苦しさです。だから右のように一日数回の休息としてコルセットを脱ぎ下穿きを取替えるのです、そこで汚れた下穿きを捨てずに貴方にお送りしようと云う訳です。娘の真砂子にも嫌がりますが、この頃は毎日裸の上に乳当ても前当てもある海水着のようなコルセットを着せてその上に何にも着せずセーラー服を着せて学校に出してやっています。穿き古したズロースやパンティなら少しあります。私と違って白いものが好きで白ばかり穿いていますから、

お好み通り汚れの部分ははきり変色して居りましょう。最初にお送りするのはメンスバンドです。一番いたんで汚れたものと云うとこれでした。女学生用シーズンバンド、ビクトリヤ型、四百五十円の品で一年半ばかり毎日穿いたものです。この頃はコルセットを持たない頃でしたから緊迫感を求めて毎日穿いて居りました。買つて来たその夜ゴム紐をきつく取替えました。以来一年間七、八度取替えました。現在のものを二九年三月に求めてから、もう穿きませんので太股のゴム紐は延びたまゝです、貴方の股に合せておつめ下さい。それから腰の紐は新らしくてキツイですから大丈夫かと思ひますが貴方には少しゴムをつめ過ぎでありますのでキツ過ぎますから自己に應じて延ばして下さい。今私が穿いてみました所コルセットのせいで胴が蜂のようにくびれてきましたのでやゝゆるい位です、このメンスバンドから私を御想像下さい。

前に当るゴム布の部分は三重になつていましたが、毎日の使用で

一番下のゴム布は切れてしまひました。残りの二枚は直接私の肌にふれ通して来たもので、股の部分は薄赤色に変色して居ります、経血はこびり付くとかたくなつて困るのでオキシフルでふいて使うので今見た所経血のしみはないようです。ガーゼは捨てゝ居りますので……。お望みなら保存しておきます。ちなみに私は月のはじめ、大体四日間、極く少量、ガーゼは一日三回取替えます。娘は月の半ばで一週間、量は多く日本製のバンドは合わず、アメリカ製の、総ゴムのメンスバンドを用いています。

汚れとおっしゃいますが、何の汚れをお好みですか、おっしゃって下さい、尿の汚れでしたら娘の方の臭いが強く、分泌物は私の方が臭うようです。この次は何をお送りしましょうか。

【編集部註、一柳さんから編集部へメンスバンド一着、送って来られております。荒巻さん御連絡下さい】

（昭和三〇年五月号掲載）

長期刑

——悦虐の告白——

古 川 裕 子

あゝ、一体何故私はこんなものを書かなければならないのでしょうか。これは私個人の「自慰」にすぎないのでしょいか。夫との骨に沁みるような快楽を失った三十過ぎた女の、哀れな「自慰」と云う以上、私に何を申せましょう。夜毎私は、今は亡き夫との加虐被虐の楽しみを追憶して身悶えました。女の身のうちに狂いまわる衝動が私にこんなものを書かせるのです。

私は恥しい。多くの読者のみなさんが、奇譚クラブの誌上で「最大公約数的道徳」の無意味さを私に教え、又「社会に害毒を及ぼさぬ限りの個人の絶対的自由」を強調し、私を教え励まして下さった。理屈の上からは、私にもそれがよくわかる。そしてそう思いたい

しかし私の心に蛇のようにからみついて離れない観念は、私自身への——そのような私への限りない嫌悪感なのです。地に伏し、泥に転んでも拭い切れない罪悪感なのです。愚かな私をお喰い下さい。ひよつとすると、そのような罪悪感が、私のマゾヒズムの変形なのかも知れません。

ともあれ、私は、今夜は、これを書かずにはいられません。今私は悶えているのです。誰か私を満足させてくれる人はいないか。かつての夫との日々を経験したあの楽しみをあの方法で私に与えてくれる人はいないのか。今私はたゞ一人。この部屋に、桃色のシエードをかけたスタンドの柔かな光が、真白なシーツに落ちてゐるこの部屋の寢床の上

に、私は今たゞ一人きり。

正直に申しませう。あらい呼吸と身うち、ほてつてくる熱感、下半身のもだえるばかりの、うごめきのうちに私は、これを書いているのです。

あゝあの夫との日々。私が心の底から満足させられ、地上の楽団を夢見たあの日々即ち夫から始めて、長期刑を受けた一週間のことを、今お話致しましょう。また同じようなくり言とお思ひになる方は、どうぞこの先をお読みつづけにはならないで下さい。そうですこれは哀れな女の、つまらないくり言にすぎないのですから。

一日目

それは五月の中旬のことでした。生あたたかい、密度の濃い重い風のゆるやかに吹く五月の朝のこと、朝食をすませたあとの夫は、いつになくゆつくりと茶の間に座っていました。

「今日はお仕事は？」

「うむ、今日午後からでいいんだ」

と答えて、夫はしばらく黙っていました

「ところでお前、昨日頼んでおいたあの用事はどうなった」

とゆつくりした口調で申しました。

「あつ！ 忘れてましたわ。ごめんなさいね、つい、うつかりして」

私は本当に忘れていたのです。

「ごめんなさい」

私は新妻らしくにつこりとして、もう一度あやまりました。

「そう、忘れたの。あれは僕には、可成重要な用事だったのだが……。そう、お仕置を受けなくてはいいけないよ。覚悟はいいだろうね」

一日目



夫は相変らず静かなゆつくりとした口調でつづけました。

「はい。すみません。貴方のお仕置を受けますわ。私が悪かったのですから」

私は素直にそう云いました。そしてその夜の折檻を思い浮べました。

「そうか。では着物を脱ぎなさい」
「あら、今すぐに？ これから？」

「黙って裸になりなさい。」
おだやかに、しかし重々しく、すこしも表

情を変えずに云いました。その声には、犯し難い威厳が感じられると同時に、私に対する愛情の響きもありました。

それまで幾回も折檻を受けていましたが、それは、いつも人の寝しずまつた夜のこと、昼間からお仕置を受けることは、かつてなかったことなのです。

私は黙って茶の間の障子を閉め、外から見えぬようにして一枚一枚と着物をぬぎ始めました夫は、そのような私の姿を目を離しもせずに、じつと見つめたまゝでした。繻絆一つになりました。

ました、私は流石にためらいました、いつもは夫の手で剥ぎとられるのですが、今日は自分で脱がなければならないのです。

「それも脱いで」

夫が視線をそらさずに云いました。

ズロース一枚の私の姿がそこにありました
「何をぐずぐずしているの、さあそれも」
夫は決して大声を出さず、むしろ押しこめたような、おだやかな声で云うのです。

私は自分の指をズロースのゴムにかけて、

おろさねばならないのです。

私は完全にヌードとなつて立ちつくしました。

「そのまゝで赤の囚人服と月経帯をこゝにもつて来なさい」

云われるまゝに、すこし小腰をかゞめて、おずおずと隣室の洋服ダンスから赤のゴム引のレインコートとすこし汚れた私の月経帯とをもつて来ました、歩くと腰のあたりから股のあたりにかけて、なまあたにかい風が吹きとおつて、妙に刺戟的に感じられました。

夫は前のところに座つたまゝで、私を待つていました。

「女囚第十八号、囚衣を着ろ」

夫は今度は乱暴な口調で冷たく云いました。裸の素肌にはレインコートの裏のゴムが冷え冷えと感じられ、私には、ひどく悩ましく感じられます。

「女囚十八号。姿見の前に座り、月経帯からゴムをはずせ」

次の命令が下されます。

囚人服を着た途端に、私は折檻される妻の位置から、完全に刑期中の女囚に変わったのです。従つて、私の名は女囚十八号。この番号は私に下される折檻の回数を表わしていま

す。つまり今度は、結婚以来第十八回目のお

仕置を受けているわけなのです、私は前科十七犯の女囚——今フールドを背中にたれた赤の

レインコート姿で黒いズロ

二日目

ースから月経帯の換えゴムをはずしているのです、私は覚悟しました。このレインコートの色によつて刑罰の重さがわかります、赤を着せられるときは最高刑なのです、そして今まで私は赤の囚人服を着せられたことは、なかつたのです

夫はいつの間にか、姿見に真向いになつて全身をうつしながら正座している私の背後にひざまずいて鏡の中の私を見つめていました。

「女囚十八号。そのズロースを自分で口の中に押しこめ」

私はぼんやりとその言葉を聞いていました。いつもは、夫の手で、ハンケチやガーゼを口に入れられるので、そう云われても、すぐに

はピンとこなかつたのです。ましてズロースを口に入れられることは初めての経験でした。



「女囚十八号。月経帯のズロースを口へ押しこむんだ！」

大きくはないが冷たく激しい声。

私はおすおすと口をあいて、自分でズロースを自分の口の中へ入れ始めました。自分の体臭とかすかな臭がし始めました。

「もつと、もつと、ズロースを全部口の中へ入れてしまえ」

命令は下されます。私は懸命に口を開いて自分でつめこみますが、ズロースを全部入れるには私の口は小さすぎます。ともすると布片は咽頭をふさぎ、呼吸をとめるばかりになります。舌で一生懸命支えていると舌が押しまげられて痛みます、舌が布片に押されて咽喉の方にまきこまれるようになると、全く一言も声が出なくなり、口は、あけられるだけ開かせられても黒いズロースの一部は口外に溢れ出しました。夫は、ゆつくりとそのズロースの上から、自分の禪を細くたたんで押さえ頭にくくり、ズロースを吐き出せぬようにしてから、

「女囚十八号、月経帯のゴムで自分の口と鼻とを完全におほい、頭の後でボタンでとめろ」

私はその汚れている鉛色のゴムを自分の手で自らの口鼻にあて、ボタンをはめねばなりません、心持ち伸びたゴム膜は、口と鼻とをびつたりと蔽うて、ぐつとしまります。ゴム

と自分ながら異様な女の体臭とがいきりまじつた臭が否応なしに私の臭覚を刺戟します。いや、それよりも苦しいのは呼吸です。

口の中一杯のズロースと、夫の禪をとおして口鼻をおうゴム膜とのわずかの間隙からだけしか、私が生きるために必要な酸素をとることが出来ないのです。

「苦しい！ 苦しいのよ」

私の目から涙がこぼれ、声にならぬうめきでこう云いました。

夫は注意深く私の呼吸の状態を見ていましたが、まだ安全と見てとつたのか、別に猿ぐつわには手もふれませんが、私はそれだけで胸をはずませて呼吸をしなければならぬ苦しきなのです。しかし一方口をふさがれると自分の身体の一部が、急激に充血してくるのが、自分でわかるのは悲しいことでした。

「ごめんなさい。苦しいの」

私は猶もだえて手をあげて頭の猿ぐつわの結び目に触れようとした途端、両手首は後にねじあげられ、麻縄がまきつき、首縄をかけてぐつと縛りあげられました。

身体が前のめりになり、顔が畳の上に押し伏せられて、縄は容赦なく腕に頭に胸に乳房に巻きついて来ます。足首も括られて後手の

縄と結び合され、喉に首縄が食いこみます。

「女囚十八号は、そのまゝの姿で一時間、猶爾後一週間の長期刑に処す。服罪のしるしにうなずけ」

一週間と云う言葉は私を驚かせました。想像もしなかつた長期刑だつたからです。しかしこんな私にどんな反抗が出来ましょう。猿ぐつわの顔をわずかに動かして、うなずくよりほかはありません。

あゝ、その一時間がどんなに長かつたことでしょう。手首や肩の痛みもさることながら、一番辛いのは何と云つても下半身が殆ど露出してしまつてことです。十分、二十分とたつてくると、もがくまいと固く決心をしていても、だんだんと耐え難くなつて来ます。すこしでも呼吸が楽になるように、すこしでも首縄がゆるむように、おりまげられた足を、いくらかでも休めるように、身体は心にもなく浅ましくもがき廻ります、と同時にレインコートの裾はまくれて臀部から太ももまで一度露出したら、もはやかくそうすべもありません。それは云いようもない凌辱の感じでした。

三十分、四十分、畳の上を、もがき廻りたうつ私を、夫は一言も云わず、殆ど目も離

さず、見つめています。四十分すぎると、もう、力が尽きて、ぐつたりとして来ます。一時間、本格的なゴムの猿ぐつわが、どの位辛いものなのか、猿ぐつわを嵌ませられた経験のある読者の皆さんには、わかつて下さいますでしょう。

五十分すぎると、もがく力も失せて、たゞ畳の上にぐつたりと転がったきり、せい一杯の哀願を、唯一つ許された自由である瞳にたゞえて、弱々しく夫を見つめるだけなのです。そして一時間目、私にとつて長い長い体刑の終了の時刻、夫は、ゆつくりと身体をうごかして、私の背後にまわり、まず手首と足首とをむすび合せた縄をほどいてくれました。それだけで天国のような自由感。そして次に無惨にも私の口鼻をふさぎきつている、月経帯の猿轡のボタンに夫の指がかります。ゴムが顔から離れると同時に新鮮な空気が鼻から一度に入つて来ます。齒の間に噛まされた夫の歯がとり去られましたが、もう顎の感覚が麻痺していて、ブロースを自分では吐き出せぬ有様です。夫がつかみ出してくれるのをぼんやりまっています。

完全に口が自由にされた時、私がこの夫に完全に屈服し、夫の命令に何一つ反抗し得ぬ

精神状態に陥つた自分を発見しました。

自分でも不思議な心境でした。それまでだつて、マゾヒストの私のことです、夫に対して表面立つて対立的な態度にでたことは一度もなかったのですが、この時は、心の底から完全な被征服感を味わわれました、たとえ殺されても、私は夫をうらみには思わないでしょう。全くの心理的の奴隷！無意識の内にあつた、独立の私と云う人格は完全に征服されて、たゞたゞ屈従を歓びと感ずる奴隷としての自分を、はつきりと意識しました。今までに何回となく受けた折檻は、遊びごとだったのでしょうか。これはその時まで嘗つて感じたことのない心理だったのです。こんなに完全な苦しい猿ぐつわも、こんなに身も絞る程の縄目も、始めてでした、わずか一時間、それも鞭打たれたわけでもないこの一時間以後、私の運命は、はつきりと定つてしまつたのです。完全なマゾヒスト！夫の完全な所有物、完全な女奴隷！私はその時から、それ以外の何物でもなくなつたのです。

猿轡をとられ足縄をとかれた私は、後手の縄尻をとられて夫の前に正座させられました。そして声を出して服罪の約束をさせられた

のです。

「わたしは、これから一週間の刑に忠実に服します、わたしは以後自分を女囚十八号と呼びます。」

私ははつきりこれを云わされました。これからは私に下される命令を一つ一つ自分で復唱し服罪を誓わねばならないのです。

「女囚十八号。只今から労役に服せ」

「女囚十八号は只今から労役に服します」

後手の縄を解かれ、レインコートをぬがせられ全裸にされました。そして両手首間を十五糎程の鎖でつないだ革の手錠を、前に手首をそろえて嵌められました、又足首には同じように二十糎の鎖つきの足枷を嵌められ、麻縄の腰縄で素膚の腰をじかに括られ、その縄尻を夫がとりました。そして朝食のあとの食器の片付け、洗い物をさせられました。

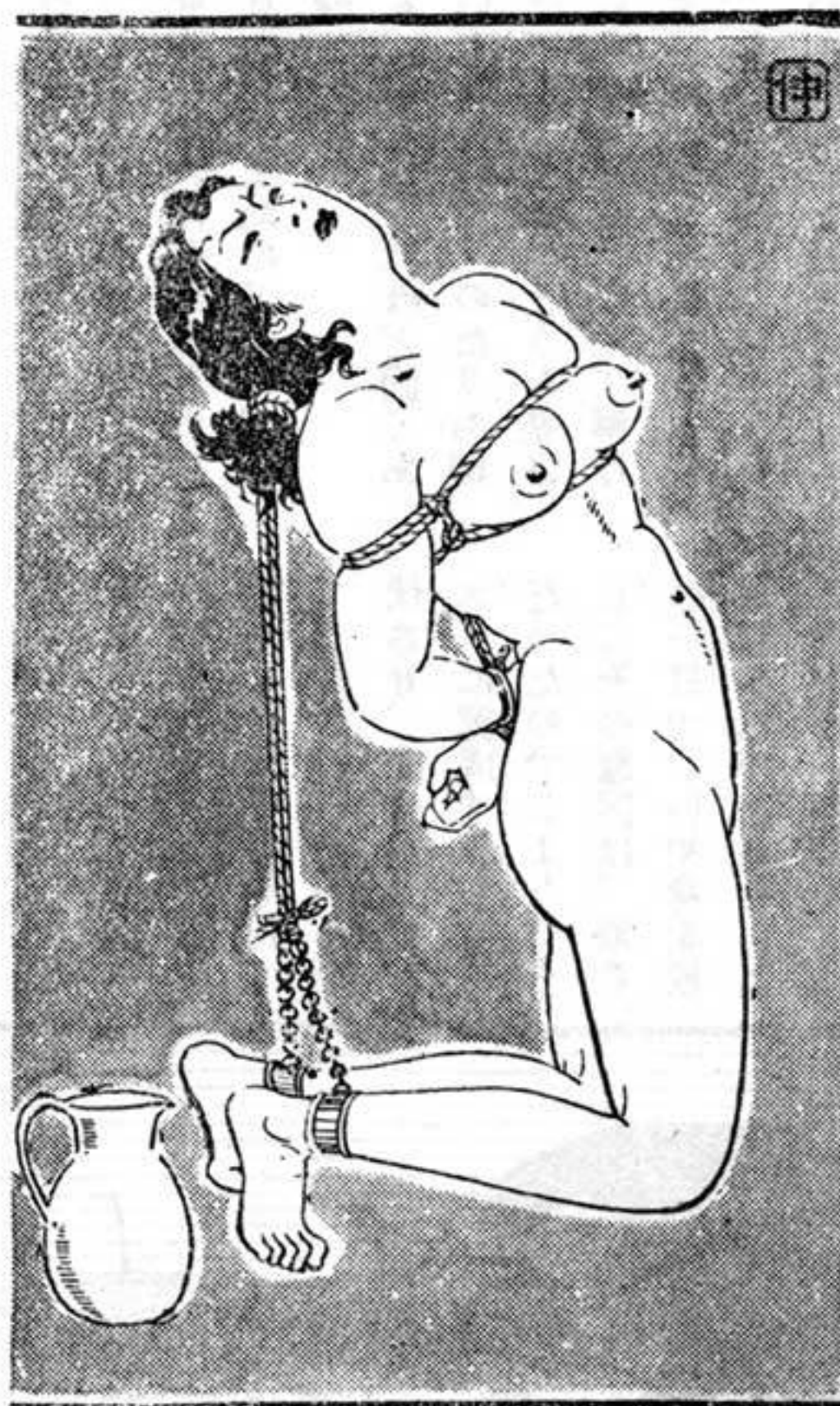
夫は流石に台所や玄関の鍵を閉め、外からのぞかれるところは、見えぬようにしてくれました、せめてものことでした、とは云え相当以上の手足の不自由さです。茶碗や皿をやつともつて、ヨチヨチとよろめき、よろめき歩かねばならないのは、我乍ら情けない姿でした。しかも、少しでも、もさもさしたり、

茶碗を落したりでもすると、夫の手にある幅二纏長さ六十纏の厚いゴム鞭が背中に音をたて、又背を突きとばされるのです。

「懲役」と云う言葉の意味がよく解りましたそれにしても真裸であると云うことは、何と恥しいそして

三日目

又、棚の上など高いところをふくときは一層みじめでした。両手首を高くあげ、足枷の足をのびあがるようにして、ふかねばなりません。夫の目はその時には、ちゃんと前に廻っているのです。



く無防備感が、たまらない恥しさをさそいます折檻を受けつけているといつても白昼の光の中です、肩をすぼめ身をちぢめて、おずおずと労役をする私の姿を夫は縄尻をとりながら冷たい目で見ていました。

あと片付けがすむと雑布がけをさせられました。手錠の手首をそろえ、裸の尻を高くあげてしなければならぬこの仕事は辛いことでした、夫は私の後で見ているのです。

昼頃やつと「労役」が一段落しました、私は肉体的にも精神的にも相当疲労しました。

夫は注意深くそれを見てとつたのでしよう。再び囚衣を着せ今度は後手錠にし、足枷を嵌めた上、革の首枷を嵌めて私をベットに寝かせ手錠足枷首枷についている鎖を夫々ベット

に結びつけました。尚、口には大きなマスクをさせられました。しかし今度は楽です。私はベットの中で三時間程休養しました。その間に夫は私にいろいろなものを食べさせてくれました。

三時頃でしたらうか。

「これから出てくるから、その間は晒しものだよ」

と夫は私をベットから起しました、そうして囚衣を再び剥ぎとると、麻縄で括り直しました。そして便所につれてゆき用便をさせ、今度は地下室の仕置部屋にひきたててゆきました。

それから五時間、夫が帰ってくるまで、私は仕置部屋の首枷台に首をはさまれ、素裸の後手という姿で遇されました。足首も括られて立つたままです、相当の疲労を感じます。膝を折ると首枷台のために丁度首吊りの様な状態となるのは困りました。又大鏡と真向いですので、ともすれば鏡の中の裸の女がいつも私をじつと見ている錯覚に陥ります。首枷姿の哀れな女、それが自分の写った姿だとは思えなくなってくるのです、誰も居ない地下室でのこの感覚は妖しくも不気味で、

私は時間のたつのを忘れました、時には声を
出して鏡の中の裸の女に話しかけました。声
は地下室のコンクリートの天井にひびいて、
妙に空ろに反響し、その声さえも鏡の中から
きこえてくるようです。

「あなた、私はこうして、おとなしくお仕置
を受けていますわ。あなたは、私のこの姿を
絶えずに思いうかべながら、お仕事をなさつ
ていらつしやるのでしょね、この一切の自
由を奪われた私の身体、これは全部あなたの
もの。あなたの所有物。あなたのドレイ。こ
れが私の最大の愛情よ」

今度は後手の縄も、首縄もそれほど固くあ
りません、縄の喰い入る苦痛で、のたうち廻
った朝にくらべれば、殆ど天国のような楽さ
です。しかしいくらもがいても、決して解け
ないことは同じです、私は晒しものになりな
がら、心の中では、夫のことばかり考えてい
ました、それは真の「愛情」と云う言葉をも
つて表現すべき、飲ばしい感情だったのです
夜に入つて夫の帰宅と同後に野晒しを赦さ
れました。そして再び手錠足枷ゴムマスク囚
衣の姿で、足枷の鎖をベットにむすびつけら
れて、第一日の休養を与えられたのです。

どうやら私は第一日の刑について、詳しく

お話しすぎたようです
この調子で七日間の
詳細を述べていては、
いつ果てるとも知れま
せん、あとはなるべく
簡単に書きましょう。

要するに夫の考えは
結婚以来、数度の折檻
によつて私の被虐性を
確かめ得て、この際、
徹底したお仕置を行つ
て、私を心の底から屈
伏させ、完全なマゾヒ
ストに完成するつもり
だったのでしょう。そ
してその意図は、最初
の一日で、いや身を絞
る程の緊縛を与えられ
た最初の一時間で、大
部分達せられてしまつ
たのです。以後の数々
の折檻がなくても私は
完全なドレイと化していたのです。

二日目

四日目



第二日は、朝から夫
は仕事に出かけました
私は囚衣に後手錠足枷
革首枷の姿で、首枷の
鎖を犬のように折檻室
の柱につながら、食事
はお皿に盛った御飯を
直接口をつけて食べさ
せられました。一番
困るのは用便でした、
足枷の鎖が短いので、
その苦労は一通りでは
ありませんでした、も
つとも辛いのは、しか
しそのことではありま
せん、周囲がことごと
く鏡なので、そうやつ
て這い廻っている私の
姿を、耐え切れず、夫
がおいてくれた小箱に
用便をしている哀れに
も情けない姿を、いや
でも自分で見なくてはならなかつたことです
これは、一時も休むひまのない精神的な拷
問でした。午後になると私は疲れ切つて油染

みたボロ布のように、ぐつたりと横たわり知らず知らず寝てしまいました、そして夕刻夫がゆりおこしてくれるまで前後不覚だったのです。

三日目

三日目は肉体的な苦痛を、さほど加えられませんでした。その代り、夫のあらゆる排泄物を口に入れ飲みくださせられました。

しかしそれらの排泄物を好まれる方もあるようですが、私にはその性癖はございませんでした。従つて夫からそれらを与えられ嘔み下すように命ぜられ実行させられたときは、縛られるよりも、息も出来ぬような猿轡を嵌ませられるよりも、又、鞭で打たれるよりも辛うございました。

それまではいくら痛くても、いくら苦しくても、むしろそれは私にとつて歓喜であつたのですが、これらの排泄物には全く「嫌悪」のほかはなかつたのです。

「これだけは勘弁して。かんにんして。そのほかのことなら、どんなことでもしますわ。ごめんなさい。ねえ、これだけは勘忍して。」

私は本当に懇願しました。

「女囚十八号は、これを口に入れ嘔み下すのだ」

夫は低いが押しつけるように冷たく言い放ちました。

「嫌！ いやよ！ いや!!」

私は口をしつかりと食いしばつて口を激しく左右にふりました。

「女囚十八号、おとなしくこれを飲むんだ」

「ごめんなさい。いやよ、いやよ、それだけはいや」

私は本当に泣き出しました。

「そんなものを飲ませないで、ねえあなた、いやよう、いやよう」

私は後手の身体をのたうつて泣き叫びました。

夫は冷い目で私をじつと見ていました。

「そんなに嫌か。でもお前はこれを飲まねばならない。」

夫は私を荒々しく抱きおこして後手のまゝ正座させました。そしてそのまゝ両足首を括り合せ、髪の毛を一束にして縄で縛り、ぐつとひきしぼつて背中を通して正座し括り合せた足首をむすびました。私は咽喉を見せて仰向けにならざるを得ません。そのまゝ倒れぬように柱に括られ喰いしばつた齒の間に外科

用の開口器を挟まれました。器具はじりじりと口を開けてゆきます。無中で首を振つてもがいた位ではとれるわけがありません。

遂に液が口の中に流れこんできました。吐き出すにも首が仰向けになつたきりで髪の毛が抜けでもしなければ下を向けません。液は容赦なく咽喉に流れて来ます。夫は私の首を動かぬようにしつかり抱いてゴム布で私の口をピタリとふさぎながら、泣きもがく私の顔を見えています。

すべては終わりました。一滴残らず私の胃の中に落ちていつてしまつたのです。私はもう観念して、そのまゝの姿でぐつたりしていました。

夫は私を柱から解くと猿轡をはめ首と膝とを殆ど一緒にくくりました。手は勿論後手高手小手です。私は平伏している姿となつたわけです。こゝでこの刑が始つて以来始めての本格的な鞭を受けました。

「女囚十八号、もう一度自分の手で飲むか」ぐつたりとした私の心にも、反抗の心がわきました。今迄のお仕置は私自身にも楽しかつたのですが、この刑はたゞ苦痛です。夫が憎らしくさえなりました。嫌がるものを余り酷い——死んだつて飲むものか、と。

思えば第一日の緊縛刑で私がすっかりドレイ化してしまったと自ら信じたのは、まだまだ本当ではなかったようです。

細いゴムの鞭が尻から下半身に容赦なく鳴り始めました。私は転つてもだえましたが、同じ所を打たれると痛さが二倍になります。一度打たれた場所は床の上を転り廻つて夫の鞭から避けねばなりません。避けると云つても思う存分に自由を奪れた身体、そう簡単に逃げ切れるものではありません。あつちへ転がり、こつちへ転がりうつぶせになり、身体をまげ、おそらく他の女の人に見られたら、浅ましい悶えかたと云うもおろかです。

ものの三十も打たれると、もう転び廻る力もなくなり、ぐつたりとのびて来ます。そして意識もやゝ朦朧として来ます。

夫は一言も云わずゴム鞭を振っていました。がそう云う私を見てとると両足を自由にし、片方の手では、……片方の手でも……始めました。鞭打ちのあとの朦朧とした虚脱感の中に、まざまざとした……猿ぐつわの下から……うめき出ます。もう先程の憎らしさなどはどこかに飛んでしまいます。容赦ない鞭打の刺戟とこの快感は、私に何もかも、どうでもいいような思いにさせてしまったのです。

……がつづきます。うーむ、うーむ、と云ううなり声が、人事のように私の不自由な口から洩れるのです。

「女囚十八号。飲むか。承知ならうなずけ」私は思わずうなずいてしまいました。

猿ぐつわがはずされ、コップが口へもつて来られました。そうして私は下半身からわきあがる感情の中でゴクゴクと何杯も与えるだけ飲みほしました。

夫は片方の手で私の口にコップをあてがひ片方で……ながら、そういう私を満足そうに、しかし冷然と見つめていました。

四 日 目

四日目はいわば休養でした。二日目と同様に折檻部屋につながれていましたが、夫も忙しく家を留守にしましたので、私は殆ど一日首枷の鎖につながれて寝ていました。それにしても後手錠にされ、足枷の鎖をひきずり、囚衣に首枷までつけられて、フードをかぶせられたまゝ床の上に、ぐつたりと転つてゐる女の姿を御想像下さい。私も鏡にうつる自分の姿を見て、つくづく情けなくなりました。と同時にこの浅ましい姿を、誰か他の人に見られたいと云う不思議な衝動にかられました

囚衣の裾はまくれています。たつた一枚素膚の上からきせられた囚衣です。裾の直しよりもありません。身体の他の部分は充分すぎる程、囚衣につつまれているのに下半身だけが真白な肉体を露出して居ます。囚衣が真紅のゴムレインコートであるだけ、白い肉体とのコントラストが鮮やかで私を余計そりたてました。云わば私は鏡の中の自分を見て、誰か他人に見られているという感覚にとらわれていたのです。私にもナルチシズムと露出癖の傾向があるようです。

五 日 目

次の日は早朝、まだ夜のあけきらぬうちに夫は私を自分のトラックにのせて、秩父の正丸峠につれてゆきました。小雨が降っていました。私は例によつてレインコートにマスク姿。目だたぬように鎖をのばして後手錠がはめられていました。尻のあたりに手首があり運転台に座つていましたので、一寸見ただけではわからないのです。

峠の頂上についた頃は、天気はすっかり晴れ渡つて来しました。夫は頃合の場所にトラックをとめ、私をつれて、予め選定しておいた場所に入りこみました。そこは誰も通らない

しかも、山々を見

五日目

はるかす雄大な場所でした。私はそこで裸にされ麻縄で後手に括りあげられました。しかし何という良い気持。身をおう布は何一つありませんが、朝の晴れ晴れとした山の空気が雲母のように透明な光と風。山々のトテツもない重量感。その中で私は樹に縛られ、岩に臥かされ、地面にうつぶせに倒され、又仰向けに左右に足首をくくられて写真をとられ、殆んどあらゆる姿態をさせられました。でも暗いお仕置部屋や夜でない、大自然の中の悦びは、私には一層の歓喜でした。何か健康なリクリエーションでもしている感じでした。



夫は、丁度ハイキングに來たように私のそのような姿をいちいちカメラにおさめました。

午後再び曇つて峠をあとに家へ帰つて來ました。私には、手枷足枷が待つていましたがこの日は長期刑中のお仕置と云うよりもつとハイキングめいた楽しさの日でした。

六日目

第六日目は、いろいろな緊縛の実験日。私は全裸で、写真や絵、又は参考書に従つて、次々と鏡の前でその通りの型に括られました。所謂方円流の捕縄術の型、警視庁流の種々の緊縛、刑務所の重謹慎に用いる後革手錠、種々の拷問の場合の特有な括り方、

私はたゞ人形のようにあつかわれていました。最初から、かたく猿ぐつわをはめられて、これは一日中とり去つてもらえませんでした。御飯の時、といつても赤ン坊のように夫に口へ入れてもらう時だけ、わずかに口が解放されました。私の身体には縄の跡が無数につき、夕方にはただぐつたりと縛られて畳の上に転つたきりの有様でした。

しかし最後のお仕置はこのあとで行われました。それは夕方から再び雨になつたのですが、囚衣を着せられたまゝ庭の立木に縛られて長期刑の最後の夜を夜明けまで雨に叩かれていたのです。流石にこの時は猿ぐつわはとられて、外科医用のそれを、ゴム製にしたような大きなマスクをすつぽりかけられました。一晩中、身体を直接叩くような雨の音を聴いているのは、何とも寂しく、又情けないものでした。頸や腕や胸や股、膝、足首には縄がかかっていますので、疲れてくると立木にもたれ、又前のめりに縄にもたれて、居眠りが出ます。だん／＼ひどくなつて來た雨はそうした私のフードから背中を腰を音をたてて流れ、何か絶え間のない鞭をうけているようでした。手には手術用のゴム手袋をはめられ手首は嚴重に背中で縄がかかっていますので

六 日 目



この長期刑以来、私は完全に夫に隷属してしまいました。そうしてこのような遊びから一生抜けきれなくなつてしまつたのです。

ともあれ今夜私は悶えています。今の私には誰もこのような折檻を与えてくれる人はありません。私はたゞ一人、やわらかな桃色の光の中で、真白なシーツの上に身を悶えて、尚私はそのような私自身に罪のうしろめたさを感じつつ、身のうちにうずく宿命の血に耐え切れないでいるのです。

雨は流れこみませんが、雨にしめつた縄で身体をしめられているのが苦痛でした。

時々夫が雨戸をあけて様子を見に来ました。懷中電燈でゆつくりと私の表情をしらべ、囚衣の具合をあらためて、又帰つてゆくのです。夕刻の七時頃から縛られて翌朝の五時頃までこのお仕置の時間は約十時間でした。

七日目の朝私はやつと女囚十八号から、妻の位置にもどりました。しかし約二日間、朝から晩までの休養が必要でした。

の方法は、まことに変化なく、珍らしいものではありません。実際に行なうためには、そんなに複雑な方法をとれるものではないのです。しかしその平凡な方法に於ても、デリケートなあらゆる細部を楽しむ、それが私たち夫婦のやりかただったのです。

こゝにお話したのは、そのような遊びのごく初期もので何ら皆様の心をそよめるものではないと思います。でも私には、この長期刑が忘れられません。夫がなくなつた今日、折りにふれて、身の感覚によみがえるのは、第一日

誰かこの身体をめちやめちやに虐いたげてくれる人はいないでしょうか、いやあの札幌での有様を思い出せ、もうこりこりした筈ではないか、と私の心の片隅で別の声が叫びます。

でも、でも、でも、あゝ誰か来て下さい。さあ早く私を裸にしてぎり／＼と縛りあげて！口には、呼吸もとまる程の猿ぐつわを嵌めてしまつて！そしてお望みならその上何とでもして！あゝ誰もそうしてくれる男のかたは居ないのでしょうか。今、こゝで、私はこんなに悶えているのに！

(終り)

女性切腹の 繪について

田谷敬生

上、美女一文字腹

中、美女十文字腹

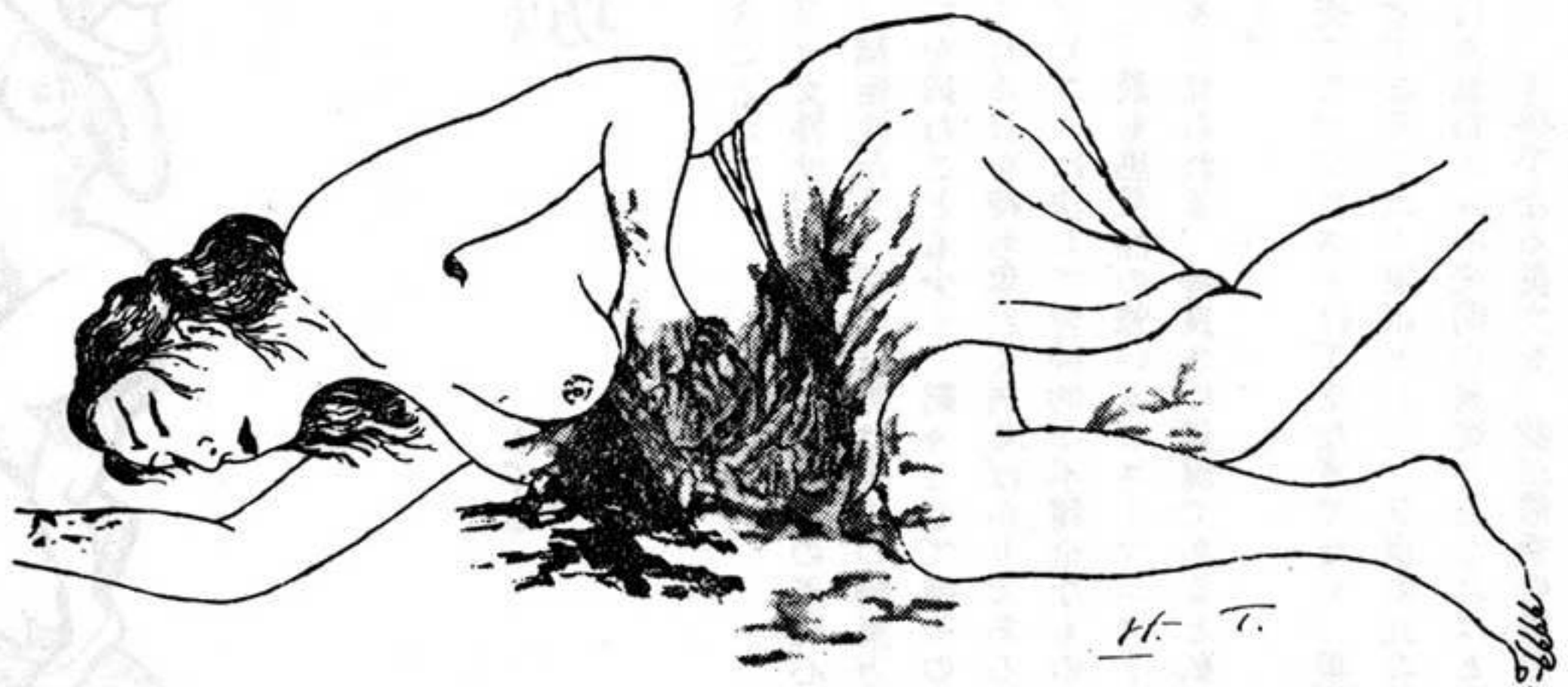
下、裸女自決



此の参考女性切腹図は八月号の「女腹切の考察と女性の切腹例」田谷敬生、と同時に掲載する性質のものでありますが、筆者からの到着が遅れましたので本月号に掲載しました前月号と併せ御覧下されば幸甚です。

——田谷敬生氏より——

H君より同封の切腹図絵をことづかりました。いずれも昔の記憶を大体辿つたもので、傷の開き方、血の流れる程度など正確に描いてあるそうです。その点、画そのものは上手でないかも知れませんが参考図としては貴重なものだと信じます。



(昭和二十九年九月号掲載)



幸福なる隷属の告白

前がき

人間の心の不思議さは全く神秘と云う他はない。特に私がマゾヒストとして完成する迄の色々な悩みを振り返つて見て、其の感を深くする。マゾヒスト程自己批判をして、自分を不幸であると考え込んで居る者は凡そこの世の中に少いであろう。彼等は自分が変形の心理の症状を持つて居ると云う事の不自然さを悲観的に考え過ぎて、自分の希望を実現させようとする勇気を失い、満されぬまゝに悶々の日を、自らあきらめて送つて居るのである。奇くはかゝる不幸な魂の昇華を大胆に取り

鐘かね

坊ぼう

巡めぐる

上げて、努力されて居る点に付ては全く驚異的な存在であり、不幸な心に光明を与える唯一の糧となりつゝあることは実に貴いものと云わねばならない。然し本誌も重点は「男性サディスト」及び「女性マゾヒスト」に置かれて居る様にお見かけする。

世には「男性サディスト、女性マゾヒスト」と同数以上の「男性マゾヒスト、女性サディスト」が存在する。「男性サディスト」より以上の心の苦痛に悶えながら、彼等より勇氣と実行力に欠け且つ又感覚は鋭敏にして頭脳は鋭敏なれど、引込思案で内気なため只々夢想の世界にのみ呻吟している人達が如何に

多きことか。

又「女性サディスト」も女性特有の羞恥心から、積極性なく、結局彼等は奇くの編集方針に口を挟むことも少く、黙々として唯その発売される日を待ち焦れて居るばかりであろう。マゾヒズムは決して背神的な不健全なものでなく、最も感受性の強い「ヒューマニスト」に多く見られる、善良さの具現であると思はる。

従つてマゾヒストは不幸な者でなく、幸福な者であるとする実証として、又世の此の道に行き悩む人々に光明の貧燈ともなればとも思ひ、不得手なる拙文を、我が最愛の妻の許

可あるまゝ、旅宿のつれづれを利用してこゝに認めた次第である。



私は、現在の妻と結婚してからと云うものは、事業も漸次成功の一途を辿り、身体も日々健康さを加え、独身時代の蒼白き顔色の頃に比べれば何と云う相違であろうかと自分ながら不思議に思う位である。苦しみの時代の記録をこゝに書こうと云うのでは無い。それは、色々な形で本誌に発表済みのことであるから。

私はあくまで私の現在の幸福なる生活を、極く平凡にありのまゝ叙事羅列することにする。文を飾る程の文才を持ち合わさないし、又結婚以前の自分の心の悩みは、どちらかと云えば妻に見せたくなないのである。唯如何にして私が彼女を得、又彼女が平凡なる、一流家庭のお嬢さんから現在の如き理想的な女神として完成し私に君臨する様に成ったか？この過程が一番皆様にとつては、望ましい告白であらうし、又私もその義務がある様に思うが、それは彼女の許可を得て次の機会に譲ることとする。

その過程を一言にして云えば、本来女性と云うものは、男性が彼女を崇拜して愛を求め自分を卑下して、中世の騎士の如く奉仕し、誠意の有りつたけを費し続けられ、必ずその男を愛し、同情し、好きになつて、その男の満足が行く様に、自分を色々な形に表現することが出来るものであつて、私はそれを徹底的にやり遂げたに過ぎぬ。

勿論彼女は私以上に徹底した気魄の持主で人一倍勝気であり、此の点私のそう云う態度に共感があつたこともいふまでもない事実であるが次第に私に崇拜されるのが当然だと思ふ様になり、更に私の愛情の表現に異常性を見出し、次には、その私の異常性に自分を協調させて私を喜ばせてやろうと思ふ様になり、遂にはそれが習性となつて、自然に女王として私を支配する事を好む様になり、美の女神として私に君臨する事が自分の女としての生命

だと感ずる様になつたのである。

然し彼女の此の面は、あくまで私と二人だけの世界に於て、私の好みに応じて、女性の内部に潜める、感覚的なプライド及征服欲が自然に妖美の香りの中に醸成されたものであつて、一度、現実の生活に返るや、私の異常性を絶対に許さないし、又それに協調する彼女の異常性も全く影をひそめ、第三者に対しては絶対の体面を保ち、美しく上品なる、レディとして、他人に我々の生活を覗かれることを、極度に恐れるのである。この点、アブノーマルな私の生活にも劃然たる一定の枠があり、ノーマルな人達から見れば、全くの狂態としか思えない生活態度も、決して第三者には立ち入ることの出来ない夢幻のカーテンの奥に於てのみの事であつて、實際社会人としてはノーマルなものなる生活が送られている所以であり、又その幸福なる生活が、飽きず撓まず長続きする所でもある。

私の妻は私にとつて神であり、亦彼女自身もそう思つて居る。彼女の性格、天性の容姿





その心、皆私にとつては理想的な女神のそれである。彼女を探し得、結婚し得たことが私の幸福の始まりなのである。彼女と二人きりで生活する東京都郊外の私の自宅は正に天国であり、第三者の訪問の無い時、実務のない時の、家での凡ての時間は、彼女への奉仕と崇拜のためにのみ費される。この天国では、彼女は私を「お前」と呼び、私は彼女を「奥様」「女王様」「女神様」、はた又「御主人様」と呼ぶ。カーテン外の現実の世界に於ては、平凡な家庭の主婦として甲斐／＼しく、家事を処理し、貞淑なる若奥様として心から私を愛し、私の身体に加減の悪い時など実に献身的に尽して呉れる妻が、二人きりの世界に入るや、急に残酷にして驕慢なる女王として私に君臨するのである。

日曜日は、私が完全無欠に徹底して奴隷になる日である。朝起きてより就寝まで家事一切を行い、彼女は唯私に命令を下すことのみが仕事である。土曜日の夜は最も楽しい御仕置の日であり、其他のウィークデイは、家事

は全部妻がするが、二人きりの世界に於ては厳しい女王と奴隷の関係には変りはない。彼女の衣類の内、パンティとブラジャー、及び彼女の多量各種の靴、これだけの洗濯及び掃除は何日と云えども凡て私の役目である。私が出張から帰つた時などは、下男部屋（彼女は私の書齋をそう呼んでいる）の戸棚の中は彼女の汚れ物が山の様に積んである。

彼女にとつてはそれが汚れ物の山でも私にとつては正に楽園の花山にも等しい。久方振りて懐しい女神の香氣にむせ返り乍らその品々の中へ顔を埋めるのである。彼女は全くの美人で、その容姿の美しさ、上品さは私の文才では到底表現し難い。特に私はぞつこん惚れ抜いて居るだけにそう思えるのかも知れないが、エキゾチックなのび／＼とした姿態、芸術的センスのある感覚、及び能力、實際的な思考力、上品なる教養、特に私を有頂天にさせるのはその匂えるが如き体臭である。

彼女が部屋に入つて来ると、あたり一面後光がさした様に明るくなり、周囲は酔えるが如

き甘い香りに包まれるのである。真におのろけの様になつて恐縮であるが、私の友人等も皆そう云つて呉れるから、半分はお世辞としても、一寸ザラにない美人であると私は思っている。彼女は学生時代スポーツの選手で、性格は明朗快活、極めて健康で病氣は始どしない。従つて日曜日の朝、奴隷としての私がベッドの下に踞いて朝の挨拶をする時も、大変寝起きが良く、「ウーン」と女学生のような伸びをして、可愛く笑い作ら、すんなりとした美しい足を床につけて、起き上る。

「あゝ今日は日曜日なのネ」

と私の差し出すスリッパに無雑作に足を突込んで、チラと私の顔を何時もの、イタズラそうな目で見下す後からガウンを着せかけ、洗面所へお伴をして日曜日の私の御奉仕が始るのである。

彼女が洗面する間私は側へ踞いて次の命令を待つて居る。彼女は目で命じて私に「アー」と口を開けさせ、自分のウ・ガイしたあとの水を、私の口の中へ吐き棄てる。彼女から

最初の嬉しい贈物を受けて暫くウツトリと
しているとパチンと頬を打たれる。

「早くトイレの準備をなさいよ」

言い捨てゝ置いてひらりと軽快な足取りで
トイレツトの方へ向うのである。トイレツト
ルームと云つても、ベッドルームと私の書齋
の間にある一坪半程の仕度部屋であつた其所
にシュータンを敷いて、彼女の為に専用のト
イレツトとして居るだけのことである。神聖
なる女神の日々の生理的行為を、側で私が奉
仕するの、便利にする為、普通の便所と区
別してあるのである。

彼女は煙草を吸い、新聞を読みながら、悠
々と私に奉仕させつゝ朝の此の部屋での行為
を楽しむ。勿論彼女の此の行為の始めから終
りまで一切は全部私が手を下してするのであ
つて、彼女自身は全然自分の手を使う必要が
無いのである。彼女の用が済んで、容器の中
に顔を近づけ馥郁たる香氣に私は、酔いしれ
ることが出来るのだ。私が外出中の彼女の此
の部屋での行為は従てあり得ない。その時は

彼女も普通の便所へ用足しに行く訳である。

女神の香物の入った容器を捧げて、仕末を
しに行く私に、「どんなお味？ 何時もと違
つてゝ？ 妾、昨夜は少しお腹の具合が変だつ
たのヨ」

亦女神の「ネクター」を捧げ持った時は
「如何？ それで顔を洗つて見たら？ 少し
は美男子になれるかも知れないことヨ」

彼女は例の軽い笑声を含み乍らそんな事を
云うのである。私がそれに応じて如何にする
かは御想像にお任せする。

日曜日の食事は勿論彼女一人がテーブルに
向つて振る。私は側で給仕。私の食事は彼女
の許可が下りて後、台所で彼女の喰べ残りを
一人で振る。彼女は時として、給仕する私に
目で命じて、足許に蹴ずかす。そして自分の
喰べかけや、一旦。に入れたものを皿に吐き
出して、自分の足許に置く。足の先でそれを
私に寄せ乍ら

「お上り！ ワン君」

私は犬の様に匹つん這いになつて、それを

喰べるのである。喰べ終つて彼女を仰ぎ見る
私の目と、キラと光るイタズラツボく、私を
見下す彼女の目とがカチツと合致する。すぐ
彼女は軽いスマートな笑い声を立てゝ、足の
先で私の顔を一寸蹴つて、「さ、お立ち！」
と合図する。

食事が済むと入浴。脱衣を手伝い裸身の
ヴィーナスに色々と奉仕する楽しさ。全身
を洗つて、マツサージ、化粧を終えて、部屋
衣にくつろぎ、長椅子に身を横たえた彼女の
足許へ跪いて足の爪を切りマニキュアする。

朝起床してから此時までに、その間、二十回
から三十回の彼女の平手打を両頬へ頂戴する
私の奉仕のやり方のちよつとしたお氣に召さ
ない点を捉えて、甘く叱り乍ら打つのである
午後は大抵リクレイションに外出する。帰
宅後、彼女の疲れた足をもみほぐすのも私の
楽しい務めである。その際彼女は、汗の出た
自分の素足の指や指の股を、私の舌で奇麗に
掃除するのが非常に好きである。これは、ウ
イークデイでもよく命令することの一つにな





っている。再び入浴して、夜の食事を済ませ私が凡ての家事を片付け終ると、彼女の検査を受けねばならない。不備な点が必ず、見つけられてそれを理由にお仕置を受ける。然し日曜日のお仕置きは、明日の仕事に対する私の消耗を恐れてか、簡単に三十分位で大抵許して貰える。

一番酷いお仕置は、土曜日の夜で、この時は大抵三時間から六時間位、長期のお仕置の時は日曜の朝まで続く時がある。勿論彼女は就寝するし私も、犬小屋につながれたまゝ、睡眠するのではあるが！

鞭打ち、緊縛、犬や馬にされる事、足で蹴られること。ハイヒールの靴を履いた足で踏まれること。等々、其他色々の方法のお仕置を受けるが、それを具体的に詳細に書けば枚数に限りが無いので、省略し、希望があれば次の機会に報告してもいいが、大体本誌の女体責めの色々の方法を、男責めに逆用したのもと思つて戴ければ大差はない。丁度、吾妻新氏が女性に成り替つた様なものである。

彼女は血を見るのは嫌で、私を折檻するに、ゆ・つ・く・り・と時間をかけて、楽しみ乍ら、然も、ごくスマートに洗練された物腰で、色つぼく、且つ驕慢にして気品を失わず、甘美な色彩の中で、皮肉な微笑をたゝえ乍ら、私を苛めるのが好きだ。香氣溢れる体臭を吸い乍ら、ス・ン・ナ・リとした美しい手足で、責められる私。然も天上の福音かとも思える様な、彼女の美声で叱られ乍ら……。

此時こそ私の幸福の絶頂なのである。忘れない。結婚して三年目の、彼女の誕生日の夜の事であつた。彼女に命令された、パンティの洗濯を忘れたゝめに酷く折檻された事があつた。普通のお仕置が済んだ後、その汚れた彼女のパンティを口に押し込まれ、ブラジャーで猿ぐつわを、かまされて、家の周囲を三十回、真裸で四つ這で廻れと命令された門は閉つて居り、家の周囲の庭に芝生があり氣候も左程悪くないし、高をくくつて廻り始めたが、実際にやつて見ると十回はおろか五回でグロツキーになつてしまった。彼女は

ポーチに出て、月光に照らされ乍ら、私の浅間しい姿をジツと見て居る。

一回廻つて来る毎に、彼女の前へ進み出て廻つた数だけ、彼女の靴に接吻しなければならぬのだ。接吻が済むと彼女は足を揚げて私の尻を強く蹴る。私は十回廻ると完全に、のびて、一步も、進まない様になつた。彼女は煙草を吸い乍ら私の有様を見て居たが、「ベッドへ行つて鞭を持つておいで！」

と命令した。私が彼女の前へそれを持つて蹠坐して捧げると。

「お前はほんとのマ・ゾ・ヒ・ス・トなの？ 勇氣のないマ・ゾ・ヒ・ス・トなんてお断りよ！ 何でも徹底してるお前が好きで私は結婚して上げたのよ。妾の命令が聞けないの？ これ位の苦しみで一生の幸福を捨てる積り？」

鞭の先で、軽く私の頬を叩き乍ら彼女はそう云つた。

「勇氣をお出し！ そら！」

彼女は手にした鞭で私の尻を思い切り三度叩くと、さつと身をひるがえして家の中へ入

つてしまった。私は此の時程彼女を残酷だと思つた事はなかつた。然し痛い手足を引きずり乍ら、一回一回と、犬這いを続ける内、彼女の真価を次第に悟り得て、終りには、何とも云えぬ幸福にむせび乍らぐろぐろと家の周囲を廻つたものである。

も少しで完遂する頃、彼女が寝巻の上にガウンをつゝかけ、部屋靴のまゝで、テラスの方から、私の方へ近づいて来た。

「どう？弱虫さん、少しは妾の恐い事が分つた？」

私はそれから、彼女の靴が私の咽喉や、顔を踏み付けるのを感じた。許されて、ベッドルームに入つたその夜の、彼女は殊の他気嫌がよく晴やかな笑い声を立て乍ら私を愛撫して呉れたのである。

家庭生活に於ける丈でなく、ビジネスの面に於ても、彼女は私を叱咤し、弱気になり勝な私に世の荒波を乗り越えて行く勇氣を与えて呉れた。実質的な、申し分のない家庭の主婦、貞淑此の上ない良妻が、二人だけの世界に入るや忽ちにして妖美な暴君に早変わりす

る彼女の不思議なる魅力に圧倒され続け乍ら私は夢の様な幸福感を切実に感じて居る。此の上品なる美女の淑やかな物腰の何処に、何かと云うと間髪を入れず、ピシヤリと私に平手打を呉れる敏捷さが潜んで居るのであるうか。

私は時々彼女を崇拜するの余り、両手を合せて伏し拝むことがある。そんな時でも彼女は平然と私に自分を拝ませているのだ。彼女は最近私を叱る時「バカ」と云う言葉をよく使う。「ちよいと、お馬鹿さん、此所へいらつしやい！」自分の正面へ蹴かせ、「バカ、顔をお上げ！」と命令して置いて、ペツ！と痰を私の顔へかける。「バカ、それが乾くまでじつとそうしていらつしやい。拭いたりすると承知しないワヨ」ざつとこんな風である

彼女から嘲弄されることは、私に、彼女の愛情の深さをひし／＼と感じさすのみで、益々彼女への思慕がつるのである。彼女もそれを知りつゝ、その目的でやつて居るのだ。仕事に疲れ、夜晩く我が家に帰る私を温く迎

え入れ、甘い頬打ちを交え乍ら繰返えされる蜜の様な接吻。彼女への絶対的たる隷属が、反対的に明日への私の活動力の源泉となるのである。夢幻のカーテンの内では彼女の足下に屈する安心感は、カーテンの外で勇躍伸張する生活欲、事業欲と転化されるのである。これこそマゾヒストの理想的完成ではなからうか。

マゾヒストは夢幻と現実とを明確に区別すべきである。甘い幸福なる屈辱を夢幻の世界とすれば、ビジネスは強い勇氣と実行力の現実の世界である。

倫理的な自己批判は一切やめ給え。マゾヒストたるものは人一倍純情家である。道德觀念が強い人である。然し夢想にのみ走つてはいけない。必要なのは現実的な勇氣だ。これなくては、マゾヒストは何時までも不幸である。

〔註〕 今年妻は二十九才。

私は三十八才。結婚して今年で八年です。



責めの自画像

越^{こし}野^の義^{よし}夫^お

私が責めに興味を覚えたのは小学三、四年の頃でした。初めは少年、少女雑誌等載っている母子物の父親に虐められたりするいじらしい姿、そんな絵や文に衝動を覚えては、一人二階にコツソリ上つては本の頁をむさぼり読んだものです。

元来私の家は町の中産階級で父は元軍人であつた故か、酒は浴びる程よく飲み其の上酒癖が悪く夜遅くまで酒を呑み歩いてはよく母を虐めて、打つ、殴るの虐待をするので、子供心にも父が夜晩く帰つて来るのはどれ程恐ろしかつたか、知りません。遠くで父の咳払いすると怖くて頭から蒲団を被つたものでした。其の上父の二号（小母さん）も別棟に起居して居り、そうして環境の中でこの崩しは益々盛んになつてゆきました。

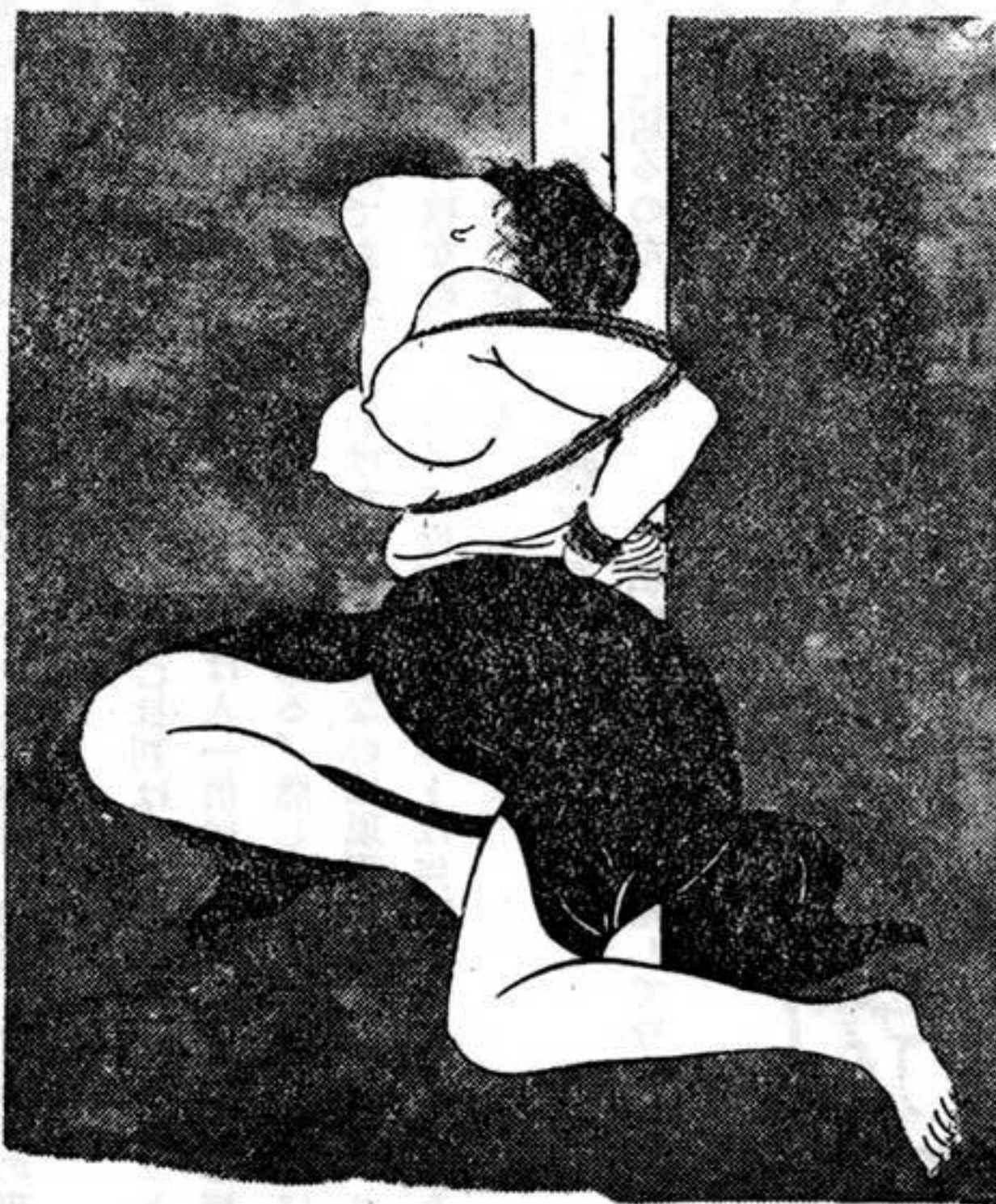
私の家は村に近い郊外の故か、便所が母屋

から離れて庭の隅にあり田舎の便所の様に土足のまゝ上る便所でした。私はその便所にコツソリ行つては裸になりお腰の代りに風呂敷を腰に巻いてその薄汚い便所の中に座

つて、母が虐められる様を空想し自分が虐められる母になつたような積りになるのです。

其の内やつと母の赤い花模様のお腰を盗み出し、これを巻いてからはそんな行為は益々募り、或時は便壺のすれ／＼迄便器の中へ、その赤い花模様のお腰一枚の体をスツポリと落したりしました。

又、或時は雪の降り積つた庭で雪責めの体験も（母がそうして虐められてることを空想し乍ら）しました。……これが後年現実にな



ろうとは夢にも思いませんでした。私が春の目覚めを知つたのもこの便所の中でした。

父は昔、小母さん（妾）に芸者屋をやらしていた時分によく若い芸者を虐めては裸にし、細引で柱に縛つたりして折檻したそうです。私が小学五年の頃、家に居た春やと云う女中が何か盗みをしたとかで父から折檻を受けて泣き叫び母や小母さん迄出て宥めるのを父は聞かず無理に春やをそれこそお腰も取つてしまい、細引で後手に縛り上げた上、裏の

庭に引きずり出して一日一晚、立木の根元に繋いでお仕置きをした事がありました。(まだ少女といったあどけない春やがお腰までも取られてしまうという事は、どんなに恥しいことだつたでしょう。)

彼女は世にも哀れな姿に泣き乍ら、それでも辱かしさのあまり足をくねらせて、じつと俯向いて居りました。父の縛つた細引が三重四重に春やの白い肌に痛々しく喰い込み、晩秋のうすら寒い気候はこれに加勢して春やを苦しめていました。便所にゆく振りをして庭に出た私は、この情景に思わず熱い血を掻き立てられました。実際の女を縛つた姿を目のあたりに見たのはこれが最初だつたのです。私は春やの側に寄り、縛られて自由のきかぬ春やの痛々しく盛り上げられ乳房にじつと視線を向けました。然し春やはうつむいたまゝ何んとも声は立てませんでした。私はそれをよい事に今度は側に転つていた棒切れを取り上げると、春やの縛られた肌を背と云わず胸、腰とピシリ／＼打ち叩きました。春やは苦痛に顔を歪め、縛られた体をくねらせ縄を益々肉に喰い込ませ乍ら悶え苦しみます。

春やは小さな嗟すれた声で「坊チャマ、もう堪忍して」

と怨めしそうに哀願しました。そんな可憐な姿を見た私の血は益々燃え上りモツト／＼春やを責めたかつたのですが、家の者に見付かつてはと、我慢して諦めました。春やは次の朝ようやく許して貰いましたが、私にされた事は一言も喋りませんでした。そして前より増して私を義夫チャン／＼と可愛がつて呉れさえました。然しその年の暮れ近く桂庵に欺かれて朝、外の釣瓶井戸に米搗きに出てそこから桂庵と共に逃げ出し、その後判つた事です。東京の玉ノ井に売られたそうです。

その頃から、私の責めに対する異常なばかりの心の炎は募る一方で、本屋の店頭で客用(立見用)に出ているキング、講談倶楽部、富士、日の出、講談雑誌(当時ではこれが相当エロ的で責め場も一番多く載つて居りました)その他あらゆる雑誌の中で女の縛られた絵や写真があれば買つてきて色々と空想を混えて、時にはその縛られている女が私の母であつたりしました。

又映画にもよく行きました。古くは片岡松蒸の縛られた姿、吉野朝子、その他女の責め物は今の映画より多かつたので、私は何時も映画館のカブリツキへ陣取りました。活動館のスクリーンにその場面が出てるのですがこれ

は仲々盗めませんので人目の少ない時そのスクリーンの前に行つた事を思い出します。これは遂に見られず今でも残念ですが、松竹映画に明烏夢之泡雪が上映された時、館の前のスクリーンにそれこそ浦里が緋の長襦袢一枚で後手に縛り上げられ降り積つた庭に引き出されて来る場面から、立木に縄尻を繋いで割竹で打ち叩かれる姿、深々と積つた雪の中に転がされ蹴出しも露らわに悶え苦しんで縄尻も長く立木に縄尻を繋ながれている捕われの身の哀れな姿が何枚も出てました。私は毎日その前へ行つては小さな全身を燃しました。

私の雑誌の絵及映画雑誌の縛られた女の写真の蒐集はその頃から大東亜戦が激しくなり雑誌も味気ない物許りになる迄相当集りましたが戦災ですつかり失つてしまいました。其の頃、古書目録から恋態資料を見つけて蒐集篇を当時七十五銭で東京の本屋から取り寄せた時、伊藤晴雨先生を知り先生の責め写真数葉を、大事に保管していましたが挿絵と共に失いました。先生の写真は今の好々爺の先生と違い少年の私には恐いような近寄り難い四十代の太い口髭を生やした人でした。それに住所も判らず只遠い存在の人に過ぎませんでした。

当時は、月刊雑誌の絵や活動写真が精一杯で、後は母を対象とした空想の艶夢に過ぎませんでした。腰巻に対する慕情も盛んで、近東規矩也氏の様に腰巻蒐集及これをまといて水責め（女の積りて）の体験——風呂場に寒水を貯めて置き、それをお腰の上から手桶に汲んではかける——や現在行っている薄物の赤い長目のお腰を巻いて寒中丸裸で庭に面した敷居際に立ち、隣家の二階の窓から、又は二階に物干しのある隣の物干しに洗濯物を干しに来る若い女の人達に時刻を見計つてワザと現われ立ち自分を晒物にしてこの赤いお腰一枚の姿を見られて嘲笑されるのを心躍らせたのは後年の事です。これに付ては筆を改めて述べたいと思っています。

話が脇道に逸れましたがそれは僕が小学六年を卒える年の二月でした。その日は前日から降り出した雪が止まず、風さえ加つて吹雪になり、学校へ行くのも虫が知らせるのか気が進まなかつたのですが前の晩から小母さん（妾）を本宅へ呼んで来て母に酒の罎をさせ乍ら小母さんと二人で呑んでいる父が恐く早々に学校へ出かけて行きました。と云うのは小母さんに唆かされた父は母が近所の床屋の小父さんと間男して、生れた僕も父の子

でないとして、母を虐め母は目を赤く泣きはらして居つたからなのです。

学校へ行く途中も母の事が心に掛り、胸はドキ／＼していました。イヤ真実は僕の心の淫虐の悪魔が、僕が常々空想しているように母がウント虐められ、ば好いナア！と心の奥で叫んでいたのです。

其の日は学校も吹雪の為早退けとなりましたので降りしきる膝を没する程の雪の中を凍えた手足を引きずつて家に帰つて来ました。そして家の障子をソツト開けて小さな声で只今と云い乍ら、半分の悪魔の期待と半分の恐怖に包まれ乍ら座敷に上りましたがどの室にも誰も居ません。そして炬燵のある室、昨夜から父と小母さんがその炬燵の上で飲んでゐた処は取り散らかつた儘で、その脇に僕の目を射たものは、あたり一面に投げ出された母の足袋、着物、長襦袢、下着、帯、腰紐、それにホルの赤い腰巻でした。僕は或る予感にハツとしました。もう胸は恐しさと歓喜に早鐘のように鳴ります。

僕は裏土間へ降りて、裏戸を開けて庭へ出ました吹雪は益々盛んです。物皆白一色に覆われて白鷺に深く包まれて物音一つ立ちません。僕はその庭の隅に建っている土蔵の処ま

でコソソリと近寄つて行きました、土蔵は網戸が閉まつていましたが何やら中で人声がし灯が洩れています。僕は網戸に手を掛けてソツと中を覗きました。中にはローソクが数本灯されて父と小母さんが相変らず差向いで呑んでいます。僕はアツと叫んで今少しで声を立てる処でした。その前にどうでしょう。母は髪も乱れ、薄い燃えるような深紅の縞の腰巻一枚にされて、その白い肉体には細引が無残にも五重、六重にも肉に喰い込まん許りに後手にそれこそ高手小手に縛り上げられ、その縄尻は小母さんの手許に握られているではありませんか、側には割竹と鞭が転がっています。

母はもう随分長いこと責め叩かれたらしく真白な肉体は処々赤紫に傷ついてグツタリと打ち倒れているのです。僕の心の悪魔の期待してたことが実現してしまつたのです。

キツト母はあの炬燵の室で泣き叫んで許しを乞うのを父と小母さんが無理矢理に帯を解き着物を一枚々々剥ぎ取り、足袋も脱がされ丸裸にされていつた事でしよう。

僕は期待していたこととは云え余りの恐しさに先の用心も何処へやら
アツ！

と叫んで逃げ出そうとしましたが、其の聲に此方を向いた小母さんは形相物凄く網戸を開けるや否や僕の手をむんずと捕えて土蔵の中へ引ずり込んでしまいました。そして小母さんと父は「義ちやんだけは勘忍して、どうぞこの子だけは許して！」と泣き叫ぶ母の頬みを嘲笑し乍ら無理やりに僕の猿又も取つてしまい、小母さんの汚れた赤いお腰を母と同じように腰に巻き付けてしまいました。そして僕の見ている前で小母さんは縛られて自由のきかぬ母を仰向けに転して、その真赤な緋のお腰を捲くると両足首に別々に麻縄を縛りつけたのです。

その間、母は観念の眼を閉じて居りました。それから小母さんは縄尻を握つて踏み合を持つて来てその縄尻を梁に掛け通しました。そして父と二人してグイ／＼と引張るのです。すると打ち転がされて居た母の哀れな肉体はそれにつれて足先から次第に上に上り次には頭が板の間から離れて、縛られた細引が肉にギリ／＼喰い込み右に左にユラユラ揺れ乍ら宙に浮き上つてしまいました。真赤なお腰もそれにつれ藻のように腰の周りを絡らんで、まるで、苦悶にのた打ち廻っているようです。そうして逆さに吊り上げられた母を

又僕の見ている前で割竹を持つてビシ／＼と打ち叩くのです。打たれる度に吊しと鞭の苦痛に悶え歪む母の顔、その苦悶の美しい顔を僕は悲しさと嬉しさを交又して息をはずませて見ていました。

其の内小母さんが僕に母を打てと命ずるのです。僕は流石に尻込みして嫌と小さい声で二人の恐しい顔を見乍ら云いました。その云い終らぬ内小母さんの手の鞭が僕の体に五、六、七と激しく鳴ります。僕は折檻に耐えかねて母を責め叩く事を承諾しました。

そして僕は無理に手に握らされた割竹で母の縛められた身体を処嫌わず打ち叩きました。母は世にも悲しい顔をして吾が子の責め苦の鞭を受け乍ら悶え苦しみヒ／＼と叫び泣いて……その体を波打たせて苦しむ苦悶の姿に僕は物に憑かれたように夢中で割竹を母の体に振りました。

そして責め苦の内に夜となりますと、母は梁から降され半死半生の体を板の間に打ち転がされ、今度は僕も後手に母と同様細引で縛り上げられて、母の側に打ち転がされてしまいました。

父と小母さんは又酒を酌み交し乍ら、何か相談していましたが、やがて母と僕は縄尻を

持つて引き起されました。小母さんはニヤニヤ嘲笑い乍ら「さあ立つんだヨ！」と憎々しげに云つて、責め苦の拷問にやつと起き上つた母のお尻を小突いて、母子二人共小母さんに縄尻を持たれ割竹で、背、腰を叩かれ吹雪の庭に引出されました。素足に踏みしめる雪の痛さ、吹き荒ぶ雪に晒す裸身の辛らさ、そして春やが繋がれたあの立木の根元の降り積つた雪の中に母は緋の赤いお腰一枚で、僕は小母さんのメリンスの赤いお腰一枚で引き据えられました。

小母さんと父は、それから母を下駄で踏み躪り又割竹でさんざんに打ち叩いて、間男を白状しろ！と責め問います。母は余りの苦しさにとう／＼悲しい声で「床屋の主人と間男しました」とあらぬ白状をしました。

その時の母の心はどんなんだつたでしょう。父と小母さんはニヤリと笑いました、これで責め苦の拷問が許して貰える処か、間男したと白状した以上その罰にどんな責め苦もやり良くなつただけでした。(未完)

縛られた女ばかりの座談会

★第三回 讀者座談會★



司会者	出席者	編集部	日時	場所
川端多奈子嬢 (21)	厚狭春江嬢 (20)	高瀬忍嬢 (18)	六月十四日(日) 午後一時	大阪アベノ
	坂口利子嬢 (22)	雲井久子嬢 (23)		明陽軒
	村田那美子嬢 (19)			川端多奈子嬢
		編集部 (速記) 家原文子		

川端 折角日曜日のところをわざわざ有難うございました。私はとても司会者と云うような柄ではないんですけど、女の方ばかりと云うので心臓でこの大役を引き受けてしまいましたのでよろしくお願いします。先ず何かからお聞きしていゝかわかりませんが皆さんの好物の甘い物でも食べながら話して頂いたら如何でしょう。

坂口 女の方ばかりつて言うんで、大変気が楽ですわね、私、案内には女ばかりだなんて書いてあつても、いざ出席してみたら、男の方の方が多いなんてだったら嫌だと思つて——

雲井 そうですわね、川端さん。南さんはお見えになりませんか？

川端 えゝ、あの方だけ何か、御都合が悪いだつて——

雲井 私、南さん来られたら、帰りは一緒に思つてたのに。

川端 お近くですの？

雲井 電車が一緒ですけど——

川端 私は大分以前から縛られていましたけれど皆さんは、極く最近のようですね。

村田 えゝ、私なんか、まだ一月前位から。

高瀬 私も、そうなんです。

雲井 わたしは半年位になりますかしら、昨

縛ら

年の秋からですから、

川端 坂口さんは？

坂口 私、回数は少いんですけど今年の冬、はじめて縛られたことがございますの。今迄三回位になるかしら、

村田 川端さんは私達の大先輩つて、わけですわね、雑誌でよく拝見しますのですが、やはり一番最初からあのよう

に――
川端 最初の時は、今から思えば冗談のような縛り方だったんですが、それでも、縛られる事は縛られたんですわ、こうして自分の手で縄を持たせられたりして――

村田 どんなにですか？

川端 後手のときなど、自分で縄の端を握ったりしていたんですよ、こうして――

坂口 その頃は大事にして貰っていたんですのね、私なんか最初の時は、寒くもありましたし勿論全裸ではありませんでしたが、相当きつく縛られて、痛い、痛い、つて言った事覚えていますわ。

川端 厚狭さんは、いつ頃から？

厚狭 わたくし、御仕事の関係で、御呼び出

しがあつても行けない事が多くて、また二回だけですけど、最初は三月でしたかしら

川端 私なんか、最初縄を持ち出されたときびつくりしましたわ、ヌードだけだと思つていましたのに――

雪井 わたし、ヌードの方だけでしたら、一年半位になります。縄の方は仲々、承知しなかつたんですが昨年の十月になつてとうとうはじめて――

坂口 その時の事、くわしく話して下さいませんか？

雪井 昨年の秋、丁度菊の花の盛りの時でした。アベノ駅で待合して、昼時でしたので近くの飲食店に入つたのですが、そこで、辻村さんと塚本さんとうとう口説かれてしまいましたの、それは熱心なんでももの、

高瀬 私はまだ日は浅いんですけれど、やはりヌードのモデルをやつていまして、縛ると云うことを条件に出されました時は、少しも嫌なことごさいませんでしたわ、ヌードで変なポーズをとらされるより、よっぽどまだだと思ひまして。

川端 他の方はどうでございます？

村田 わたしも、やはり高瀬さんと同じようでした。只単にアルバイトのヌード・モデル

と思つていたのに、と思ひましたけれど、縛つて撮られてみるとなんだか、この方がびつたりして――

雪井 私は家で遊んで居りますので、何か一寸したスリルと刺戟を求めて、モデルを志願したわけですので膝詰で、男の方があのように頭を下げて頼まれなかつたら承知していかつたと思ひますわ、

高瀬 報酬は余り当になさらない？

雪井 そりや、お小使はほしいんです、でも大阪へ出るにしても億劫なので、家で洋裁なんかしてるときの方が多いんですの、だからお金なんか、余り使うときがないんです。

高瀬 結構な御身分ですわ、私なんか、母親と弟二人を養つてゆくので、とても事務員だけの給料では足りませんので、モデルをアルバイトしていましたが、いつの間にやら、その方が専門のようになってしまいました、川端 でも、まだそう長くやつておられるわけじゃないんでしょう。

高瀬 ええ、まだはじめてから二月位、川端 一番最初、裸にされたとき羞しかったでしょう？

高瀬 一番最初るとき、とても恥かしくてモデル台に立たされた時、目の前が真暗になつ

てどうしようかと思いました。でも、終つたときのほつとした気持は悪いものじやなかつたと思います。もうこの頃ではなんともございせんわ。

坂口 私は去年の夏、彫刻のモデルに一週間程なつた事がございますが、その時は何とかの講習会で十数人の講習生の方々が、まわりから、じろ／＼と見られるんで、本当に恥かしい思いをしました。

川端 台の上へ立つてですの？

坂口 えゝ、たしか、こういう風に両手を頭の後で組んだようなポーズだったと思います。が、そのうち、同じポーズをじつと続けているのが、大変苦痛になりました、二度とモデルなんてしないと思いましたわ。

村田 お勤めになつて居られますのですか、坂口 いゝえ、家で家事の手伝なんかしてたんですが、近所に彫刻家の方が居られて、ちよつとやつて見ないかと云われたので、ふつとその気になつてしまつたんです。それから二、三度今年の冬までモデル台に立ちましたけれど、写真の方は今度がはじめてです。厚狹 私は、ダンスの女教師をしている関係で、そう大して恥しいと思つたりした事はございせんでした、男ずれがしてるというの

か知れませんが――

村田 全裸といつても、縄があるだけ、一糸纏わぬという気持が幾分助かるのではないでしようか、開け放しというより、何かこう、ぎゅつと身体が締めつけられるようで、羞しさと不安、その次にもう仕方がないという諦めの気持が心を落ちつかせるように思えますわ。

川端 縄で縛られて痛いでしょう、私なんか慣れていますけど

坂口 そりや、痛いですわ、皮膚が縄と縄との間に挟まれたり、後手にして手首の紐が喰い込んだり何度も、痛い、痛いってゆるめて貰つたことがあります。

雲井 二の腕を縄を巻かれて、その腕を下にして転がされたときは痛いですね、腕が痺れたようになつて、私はやせているので殊にそう感じるのでしょうけれども、皆さんは如何です。よく悶つておられる方ばかりですけれど――

厚狹 まだ二回きりですので、はつきりわかりませんが、そう辛抱出来ない位痛かつたと



高瀬 忍 嬢

いう事はなかつたようです。只縄目だけは一寸残つていましたけれど

高瀬 私は痛い、というよりもつと締めつけてはしかつた位、あの程度でしたら、いくらでも辛抱出来ると思ひました縛る方が痛くないか、痛くないかと余り何度も尋ねられるので気の毒でしたわ必要でしたらどのようにつき縛つて下さつてもいゝのにと思ひました。村田 特に手を逆に吊り上げるとかしなければ、只縛るだけならその位の痛さは辛抱出来るんじゃないでしようか、縛られて転がされたとき柱の角で腕をすりむいて血をにじませた

事があるんですが、その時は気が張つていましたから少しも痛いなんて感じませんでした後で係の方が大変恐縮している／＼いたわつて下さつて却つて、私の方がくすぐつたい位でしたわ、

川端 私も時々すりむいて血を出したり、縄のとげを刺したりしましたが、その時は案外痛くないものですわね、痛いという事は誰でも同じように痛いんだと思いますが、私なんか少々の痛さや辛さだつたら耐えられる自信がございます。

村田 そりや、気持の持ちようでしょうね、私もなんだか縛られるのが好きになれそうないがしますわ、

雪井 わたしなんか、痛いのはごめんだわ、川端 六月号の口絵に出た雪井さんのさる／＼つわなんか仲々にいゝじやございませんこと雪井 あれなんかイヤ／＼撮られたんです。

早く終つて映画を見に行こうなんて思いながら撮られていたんです。

村田 川端さん、縛られている時のお気持ちどうですかの／＼破つた日記帳／＼ではいゝ／＼お書きになつておられますが、

川端 そうですわね、本当の気持ちで、それが本当だつたら本当だけに恥しくつて言えな

いんじゃないでしょうか。

村田 でも、よくお書きになりましたわね。私もいずれ、そんな告白を書きたいと思つているんですけど

川端 今迄、いゝ／＼と沢山の方々に聞かれましたので、それが自分の気持ちをよく表しているか、一寸わからなくなつてきてしまいました。でもぐる／＼巻きじやなしに二巻きか三巻き縛られて、放つておかれた時は後手からジーンと痺れてくるよううまく言い表されませんのですが、平常の煩い事が何にもかも忘れて一点に集中出来るところに楽しいところがあるようにも思います。

高瀬 縛られている時の哀れそうな顔つき、なよ／＼とした自分の姿態、眼をつぶつているので、そんな情景は直接自分の眼には入りませんが縛られていながら、そういう事を想像するのは楽しいことでしょうね。

川端 私もよく縛られたまゝ転されて、いゝ／＼空想を働かして、うつとりしているとろを起されてびつくりした事がございます。後手に首縄、猿ぐつわをされた時一番よかつたと思います。

坂口 日が浅い関係だと思ひますが、そんな気持はわかりませんわ、なるべく痛くなく縛

つて早く終つてほしいと、そればかり考えていました。

村田 そりや、お金を貰えばそれでいゝ、と言えはそれまでですけど、縛られるという事が、まあお芝居であつても、自分も出来るだけ、縛られている女という気分を出そうとすれば、その雰囲気に入り込んでしまうのじやないでしょうか。

高瀬 そういう事も云えるでしょうね。

川端 男の方々は何故女を縛るといふ事にこんなにも関心を持つのでしょうか、私いつも不思議に思つていゝんです。

雪井 でも、女の方でも、川端さんや高瀬さん、村田さんのように男の方に縛られてみたいつて方があるんじゃないやございせん、村田 だん／＼縛られている中に好きになつてくるつていふ事もあるでしょうね。

川端 でも、女の方を一度も縛つた事のない男の方で、女を縛りたいつて方があるのが、おかしいですわね。

厚狹 男の方の事はよくわかりませんが、私のレズン場へ来られる男のお客さんで、誰彼なしに若い女であれば結婚してくれ、という方がありますわ、女の自由を奪つて縛り上げる。生きた人間だけに面白いんじゃないで

しょうか。

高瀬 私達、女の立場から考えますと、やはり、女をふん縛つてくれる位の意気のある男の方が嬉しいと思いますわ、でも男の方の氣持つてわかりませんけれど、女からいえば、従順とか、素直というのは自分の身についての性質でしようし、又、そんなに従順にすることという事に一種の喜びがあるんじゃないかと思ひます。

坂口 縛りたければ縛らしてあげたらいいんじゃないでしようか、縛つてほしい、ほしくないは別として――

雪井 男の方の中には「いや、いや」と言うのを無理に縛るのが好きな方があるんですけどね、そんなのは怖いわ。

川端 怖い、何されるか知れないという、スリル、それが又いゝんでしよう。妾なんか裸で縛られて放つて置かれるだけで……。

村田 川端さんの経験談お話しなさいよ、私達の参考のために、――

坂口 賛成、賛成

川端 私、司会者で皆さんにいろいろお聞きしたいと思つていましたのに、大変なことになるしましたわ、そのかわり皆さんも、きつと話して下さいね。

厚狹 そりや、もう何でも話しますよ、脱線するくらい、凄いのを――

川端 でも、何から話していゝかしら、やつぱり一番最初のときと、郊外の一軒家で逆さ吊りにされた時が記憶にあるんですけれどもそのスリルを感じるといふことになる、モデルになつた頃の四五回位まででしようね。

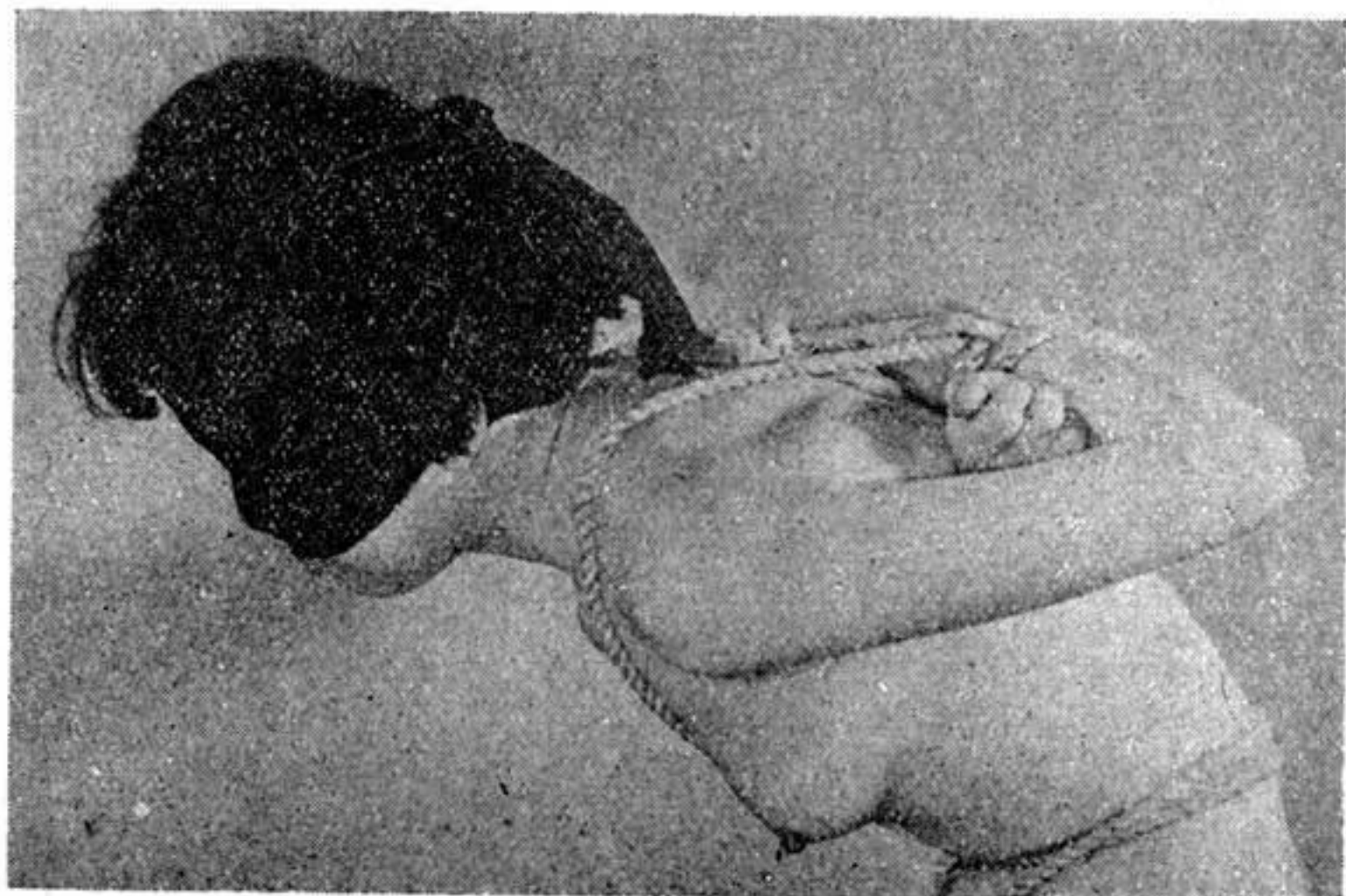
村田 昨年のことなんでしよう？

川端 そう、六月頃でしたか、たしか三度目位るとき、丁度梅雨で煙むるような雨が降つていて、レインコートにレインシューズつて姿で蒸し暑くてベト／＼と汗をかいた事を覚えていますわ。一回目も二回目も、びつくりするばかりで目も開けられない位でしたが、三度目で大分落着いてきましたのですけれど今度こそ何か悪戯をされやしないかと不安でしたの、それでも呼び出しがあつたら、胸がわく／＼して行つたんです。六帖と八帖の間続きの部屋だつたんですが、次の部屋との間の襖が一寸、二寸ばかり開いていて、赤い蒲団が見えるんでしよう。

坂口 男の方と二人きりだつたんですか？

川端 えゝ、そうです。それで今日こそ、縛られてどんなことをされるんだろうつて、本当に心配したんです。若しそんなことをされ

雲井久子嬢



たら、とんで逃げて帰ろうつて思つて、決心してたんです。その日は、床柱や机、蒲団等を使つて、今迄にない、きついポーズをとつたんですけど、まあ、その縛り方のきついことについては何んともないのですが、何かされるんじゃないだろうかという不安が最後まで

で、つきまといつて仕方がございませんでしたわ。

雲井 案外、そんな期待というようなもの、あつたんじゃないですか？

川端 まあ、今から思えば真剣に考えていたんですが、期待というより不安の方が大きかつたと思います。もつと、心に余猶があれば別ですけど、――

雲井 何んにもなかつたのでつまらない、なんて――、逆さ吊りは、私にもやつてみないかと云われて、一寸好奇心が湧いたんは湧いたんですけど、その中に、寒くなつたりして、とう／＼やらすじまいでした、川端さんだけでしよう、吊られたのは、――

高瀬 私たちはまだ初めたばかりでとても、そこ迄はゆきませんですけど、一度吊られてみたいような気持ちいたしますわ、川端さんのお話では思つたよりきつくはないようですね。

川端 えゝ、そりや、他人が思つたほどはね、私自身としては吊られるよりも、もつと苦しい縛り方もありますのよ。

高瀬 見た目は楽なようで苦しいポーズよりも、一層のこと派手に吊つて貰つた方がよいようですね。

川端 そりや、吊られるのは苦しいですよ、荒縄で足首だけ縛つて棒のように吊られたときは、足首が痛くて辛抱出来ませんでしたわ、私の好きなのは両手両足を別々に縛つて吊られた時でしたの。

村田 好きなと云いますと、何か、特別に、川端 さあ、特に何につて云えませんが――、なんとなしに好きになつて言いますか――

大体私の好きな縛られ方つて申しましたら先にも申し上げました通り、後手の高手小手で首へ縄を掛けて息苦しい位の、それに口には猿ぐつわですの、足は縛られない方が――。

村田 手を前で縛るのは？

川端 前で縛るのはつまりませんわ、後とは比較にならぬ位、それに縄を沢山使つてきつく縛るより、自由を奪う程度がいゝんです。七月号の口絵の猿ぐつわ五態では、皆さんのが載っていますが、その時の事を話して頂けませんでしょうか、村田さん大層肥つておられますので、後手に廻すの、大変だつたでしょう。

村田 私は身長割に体重が十四貫五百もありますので、一寸、恰好が悪いんです、特に坐つた時、足が太くて困りますの、縄の跡は大分きつくつきましたわ、太っているからと

思いますけどアルバムの鞭打ちも足が太く写つてるでしょう、気になるんです。

高瀬 私は背が高いでしょう、だから肉がまだつかない、なんだか未熟な感じだとよく云われます、まだ十八ですから、これからだん／＼肉がついてくると思つていますが、縄跳びなんか、足をすらりとするのにはよいつて言いますわね。

村田 散歩や縄跳びは、つとめてしていますのですが、生れつきなんでしょうね、厚狭さんもよく肥つていらつしやるけど均整がとれていられるから、――

厚狭 わたしも足は太いんですよ、ダンスをしているから贅肉はないと思うんですけど、太いことは太いんです。下腹や腰にも最近特に肉がついてしまつて、ちよつと歩いていても筋肉がびん／＼と弾くようなんですよ、初めて縛られた時なんか、一寸横眼でみたら肌にぐつと喰い込んでへこんでるんですが、自分には余り感じませんでした。

川端 肥つてられる方と痩せていられる方でこたえ方が違うでしょうね、私なんか中肉中背で別にどうつという事はないですが、雲井さんなんか、痩せていらつしやるので、特にきつく感じられるのではないでしょう

か。

雲井 私も女学校時代は十五貫近くもあつて、よく肥つていたんですけれど、昨年の春、胃をこわしてから、こんなに痩せてしまいましたの、秋には少し戻りましたが、冬には又やせて、今はちよつと肉がついたところなんです、この腕を締めつけられるのは嫌です、それに猿ぐつわも、息が苦しくつて、

川端 猿ぐつわは布地の厚い布で鼻と口と一緒に掩われるととても苦しいですね、古川さんのように猿ぐつわがないと感じが出ないという方もございますね、私も初めは苦しいばかりで、一時も早く解いてほしい思いましたが、此頃では苦しい中に楽しさが出てきまして解かれた時には、何んだか物足りないという気もする事がありますけど、他の方はどうでしょうか？

厚狭 私なんか、別になんともなかった、でも猿ぐつわをされるといふことは、泥棒にでも襲われたときのように少しいやでした。しかし、それがアクセサリーの一つと思つて馴れゝばなんともないものですね。

高瀬 わたしは口や鼻は出来るだけ、強く掩つて頂いた方がよかつたと思います、自分の

哀れな表情を出すにしても、

出ているのが目だけというので大変しよかつたと思います
坂口 暑苦しくつて、息をする度に鼻の穴に当つた布が湿つて気持が悪かつたわ、早く解いてほしいと思いました。

村田 私は鼻の頭の布がずり落ちそうになるのでそれをとめているのが苦勞でした、別に苦しいと思いませんでしたわ、あの位だつたら、それよ

り口の中へ入れられたハンカチが唾で湿つてくるのを、出来るだけ濡れないようにしようと思つて——それが苦痛といへば苦痛でしたけど、もう少し乱暴に取扱つて頂いても思いました、一番最後に机や台を使つて、私の希望したポーズを撮つて貰いましたが、それからまだ呼び出しを貰つていませんのです。
川端 後手に高く縛り上げられると、肘が痛いことございません？

高瀬 長くそのまゝのポーズで放つて置かれると、肘の曲げたところが凝つたようになつて痛いんですね、解かれても痺れて暫くは自分の手でないようで——。

厚狭 春江嬢



坂口 殆んど後手なんですわね。

川端 私は前で手を合せて縛られたこともありますが、やはり、後手の方が無防備の裸体をさらけ出しているというところに自分自身では大變興味がありますの、ポーズの美しさとしては別でしょうけれど、

高瀬 そうですね。痛くてもやつぱり後手に限りますね、後手を首へかけて連絡されて、仰向いたまゝ、うつむくこともどうすることも出来ないポーズで暫く放つて置かれたことがあります。

川端 アルバムに出ていた、〃高手小手〃というあれでしょう。

高瀬 ええ、そうです、あんなポーズな大好きです。あの時、たしか同じポーズで角度をかえて十数枚撮られた筈です。

厚狭 仰向けに寝たポーズも両手首が身体の下になつて痛いものですね、下が畳とか板のような時には特に――。

川端 手の持つてゆきようによつて大分違うと思います、村田さん「犠牲台」と言うのは可愛い写つていますわね、猿ぐつわがないのが、却つていい位だわ、

村田 太股が太く写つてるでしょう、いつも痩せたいと思うんですが、

川端 私も一時は痩せたいと思いましたが、最近では痩せるのは嫌です。やはり適当に肥つていなくて――、村田さんなんか、そう肥り過ぎていらつしやるという程ではないですのに、――高瀬さんにも両手首を背中の下にしたのがありましたわね。

高瀬 ええ、手首が痛いからというより、どうして全身の表情を出そうかと思つて、そりかえつたように胸を張つたんですの。

川端 高瀬さんは中々ポーズをとるのがお上手ですわ、その点私なんか、自分自身が楽しんでしまつて。

高瀬 // 荒縄 // なんか中々いいと思ひます

わ。

坂口 写真を撮るだけだから、いゝんですけど、このようにして本当に縛られたら大変ですわね。

厚狭 泥棒に入られたりしてですか？それとも、何か？

坂口 小説にはよくありますわね、時代小説なんかには数人の雲助に周りをとり囲まれて――とか、

(雲井嬢、この時、急用のため帰宅される)

川端 どうにもならなかつたら、観念して、するようにされるんじゃないでしょうか、身動きならないように縛り上げられる方が、かえつて、じたばたしなくてもよくつて――。

若い女の人達の中で強姦されたいつて秘かな希望があるつて、聞いたことがありますけど私なんか、やはり見られた方が――。

高瀬 女の人の心の中には潜在的にあるかも知れませんか。

坂口 高瀬さんなんか、あるんじゃない？

村田 坂口さんだつて、その傾向があると思ひますけど。

坂口 わたしはないと思うわ、只、モデル台に立つた時の恥しさというものに自分から楽しんで、最初のときのあの講習会の一週間

は、進んで行つたのは事実ですけど、でもそれから、ずつと出ていませんのよ。

厚狭 そりや、貴女が生活に困らなかつたらよ、私も、ダンスが好きでダンス教師をしていけるけれど、やはり、ヌード、モデルも悪くはないなあという気持、お金の目当てよりも自分の身体に自信があつて、それを誇りたい気持なの、特に男の方の前に、――だから縛るとか縛られるということは問題じゃないわ、縛られてもいいけど、――

坂口 私も、そうなのよ、縛りたけりや縛らせてあげる。只、余り痛いことはイヤなの、川端 痛いとか、嫌だとか云つていても、その中に好きになつてくると思ひますわ、

坂口 そうかしら、

高瀬 叩かれたり、つねられたりするんだつたら、イヤだけれど、縛られるのなら、いゝんじゃないの、少くとも私はそう思ひますの私、ヌードと着衣のどちらでもいいつて最初云われたんですが、やはりヌードの方を選びましたわ、収入の点もあるにはあるんだけど――。

村田 私はどちらでもいいつて御返事しました。

川端 縛るといふことは最初から条件だつた

んでしょ。

村田 ええ、そりやお話ありましたの、ヌードで縛るか、コスチュームかつていうんです、裸を縛つて貰う方が、あつさりしていて

川端 皆さん、どうでしょう、普通のモデルと違つて縄を掛けられるというのは、直接肌に男の方が縛るときなんか触れることが多いのですが、その点どうお考えでしょうか。

高瀬 どうでしょうかしら、ヌードになるつていうんでさえ或る程度の期待つて言いますか刺戟があるんですもの、そうでしょう、皆さん。

村田 そりや、勿論ですわ、ぐる／＼何重にも縄を廻されると、それが直接肌にまといつくものだけに、一寸、普通の感じじゃございませんわね。

厚狭 ダンスで男の方と一緒に踊つてるときの感じと似ているんじゃない？

坂口 さあ、どうでしょう？わたし踊れないんでダンスの方は知りませんが、縛られるということとは一種の今迄経験したことのない刺戟でしたわ、

川端 わたしもダンスは好きで去年はよく踊

りに行きましたけれど、それ以来、参りませんの。

村田 縛られる方がよくつて？（笑声）

川端 そうじゃないんですけれど、——高瀬さん、一番お若いんですが、男のお友達あつて？

高瀬 中学校を出てから今年の三月迄お勤めに出ていましたけれど、一向に、——生活に追われているとそんなこと考えませんのね。

川端 厚狭さんなんか、相当なものなんでしようね、ダンスの先生なんですもの。

厚狭 そんなことございせんものよ、男の方とよく接しているだけに、男ずれしていると云いますか、眼が肥えていますから、普通の男では相手にしませんわ。

川端 原狭さんはしつかりしていらつしやるから、村田さんは如何でございますの？

村田 私のところは日本でも有名な機業地なんでしよう、だから盆踊りの時なんかも相当凄いのよ。私なんか駄目ですけど——

厚狭 けんそんなさならなくてもいいのよ、ど

坂口 利子嬢



うせアプレの集りなんだから、言つてしまいなさいよ、ねえ。

村田 本当なんです。私、内気なんで、でも誰か素晴らしい相手の人がほしいつて、時には思いますわ。

坂口 川端さんのラブ、ロマンスをお聞きしたいわ。

川端 駄目、駄目、皆さん、ずるいわ、すぐ私にお鉢を廻してきて、大分時間も経ちましたのでこれ位にしておきます、有難うございました。

（完）

（昭和二十九年九月号掲載）

奇ク「友の家」紹介

本誌愛読者のご好意により奇ク「友の家」が誕生しました。場所は、国電・総武線「本八幡」駅よ

り、クルマで一〇分。高塚交差点近くです。

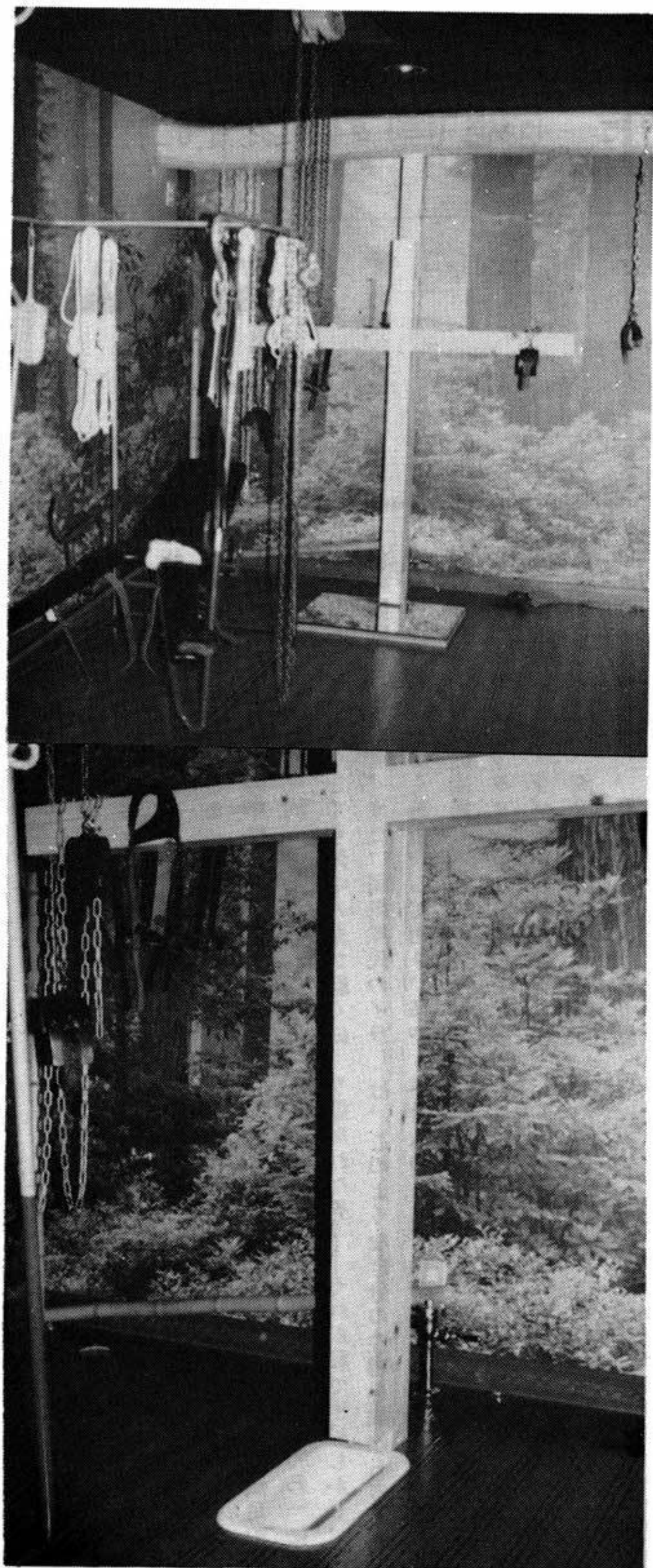
提供者のT氏が、ご自分の専用

プレイ室として作られたもので、プレイに必要なものはすべて揃っており、完全防音の一軒家なので、存分にプレイが楽しめます。

費用は、使用料として五千円、宿泊は五千円増となります。

使用希望者は、編集部までお問い合わせください。

※一般客は使用できません。



読者ポスト



貴誌の復刊を知り、生まれて始めて投稿する四十三才の男性です。私は性に目ざめる十五、六才頃から今日まで、自分の特異な性癖につきまとう劣等感と罪悪感に悩まされつつも、そこからどうしても抜けだせない自分をもてあまししながら、迷える小羊の如く生きています。若い頃から家人に隠れるようにして貴誌「奇譚クラブ」を求めては、むさぼるように読み耽ったのは、水田真紀子氏（だったと思う）の小説と司馬孝氏のイラストでした。水田氏の読みものは、大体において女性が

女性を責めるものであり、責めの主体は「猿ぐつわ」の羞恥責めです。SMがM女の口の中に、S女あるいはM女自身の愛液と尿で汚れたパンティを詰めこんでから、厳しく猿ぐつわを装着し、さまざまにいたぶるというストーリーです。約二〇年前に掲載された「アクロバット残酷記」、約一〇年前の「女子学生」など、今思いたしても体中の血が騒ぐほどの興奮を覚えます。また、司馬孝氏のイラストもこの傾向をよくあらわしており、革やゴムを緊縛の素材に使用しているところなども、私の性癖にピッタリ一致したもので、私は古書店で「奇譚クラブ」というなつかしい表題を見るたびに、両氏の作品が掲載されていることを願いつつ、買い求めては、独り空想の世界に身を漂よかせ、自分の特異な欲求を一時的に発散させてきました。昨今は、ポルノの世界も大巾に緩和される傾向にあり、私の若い頃は日蔭者な存在にすぎなかったSM雑誌は百花 乱の有様ですが、どの雑誌も私のこい求めている内容とは一寸ピンとがずれているようで、この点いつも残念に思っています。緊縛された美女が、その口中に自分の汚れたパンティを無理やり詰めこまれ、その上からゴムや革の猿ぐつわを頬がくびれるほどに厳しく装着されて、羞恥と嫌悪と憎悪と絶望の入りまじった表情を見せている写真やイラストといったものはなかなかありません。せいぜいパンティを頭からスッポリかぶせたものくらいでしょう。この点でも貴誌7月号の司馬孝氏のイラストの最後の一葉など私の求めている構図の一つであり、満足のいくものでした。「パンティの猿ぐつわ」にとり憑かれた男——それが私です。しかし、私は、このような自分の性癖を醜いもの、恥ずべきものとして自からおさえつけ、他人にもひた隠しにして、真面目なノーマルな人間のように振舞ってきました。ごく普通の結婚をして子供をもうけたのですが、やはり自分のこの内なる隠された欲求の力に抗しきれず、思いきって妻に打ち明けてみましたが、彼女の理解と協力を得ることはできませんでした。最近では、かなり高額の出費さえ覚悟すればSMクラブでのプレイはできるようですので私も3回ぐらいその体験（SとMの両方）を試してみました。ゴムのチューブと原色のおでやかなパンティを用意して、私の望むプレイを要求したわけですが、やはり、プロの女性というのはビジネスライクで情感に欠け、迫真性に乏しい点で、どうもピッタリとこない憾みがあります。それゆえ、現在もうつつとして楽しまず、心のわだかまりをかかえた

まま自分をもてあましている哀れな小羊の如き迷える中年男というのが私の自画像といえます。本誌ご愛読の諸兄姉のうち、もし私のこの困った性癖の傾向に理解と共鳴をお持ちの方がいらっしゃれば、ぜひお知らせ下さい。あるいは、誌上にご自分の体験やご心境をご発表下さい。編集の方々にお願い。前記水田氏の諸作品を一冊の本にして刊行する企画はありませんか。勿論そのイラストは司馬孝氏ということで……。私はこれを心待ちにしています。皆さまのご健康とご健闘を祈念しております（大阪府・K・T生）

○初めてお便りします。僕は十九才の学生です。SMについては中学2年の頃に知りました。それからというものはいつもSMの本を買って読んでいましたが、最近、実際にプレイしてみたくまりました。そこで、SMプレイに興味のある三〇才ぐらいまでの方で、Sで奴隷を求める女王様、また、Mの方でも僕にSMプレイをくわしく教えてくださる方、僕のSMの本能をひきだしてくださる方、お手紙を下さい。お願いします（大阪・夢みる男より）

○私は浣腸・アナル責めの大好きなM男性です。二十五才で学生。もちろん独身です。一人で浣腸し、自分の部屋で排泄しています。

最近一〇〇CCの浣腸器を買いました。色々なポーズで、十回分、一〇注入しています。過去、プレイ歴は一度ありますが、今回は長く交際して頂ける浣腸好きの女性を求めるべく、お便りしました。浣腸が好きなら、S・M問いません。Sの方でも、Mの方でも満足して頂けると確信しています。成年以上の方で、関西にお住みの方、お互いの秘密は守っていきますから、編集部回送で御返事下さい。お待ちしています（大阪・R）

○読者のみなさん、はじめまして。ぼくは二十三才の学生です。自分でもかなりMの素質があると思っています。Sの女性の方で、どなたかぼくと交際してくださる方はいませんか。まだプレイの経験はありませんが、あなたの命じられるがままに、あなたの身体中のどんな部分でも舌でなめてさしあげます。ぼくをあなたのお尻の下に敷いて、聖いオシッコを飲ませてください。どうか、お手紙を寄せてください。編集部回送にてお願いします。未経験の方も大歓迎です（埼玉・貴女の愛奴より）

○前略、読者通信欄に掲載下さればありがたいです。私は四十八才の独身男性、自営業者で、身長一七二センチ、体重六十九キロ、容姿は良い方です。SMのS性ですが、希望の

相手としては、二十八才位迄の男性、M奴隷を求めます。肥満でない真性Mと、都心の私専用のプレイルームで快楽にふけりたいと思っています（東京・S男）

○二十才。独身。ヤセ型。S少年。三〇代女性に大へん興味有り。連らく次第、写真送ります。美少年と近所で評判。が、かりさせない、保障する（川崎・救世主）

○私、二十五才の独身。容姿は普通並み。一人者のさみしさをカバーしてくれる女性を求めます。金はないが、心だけは誰にも負けない自信があります（大阪・M・S）

編集部より

「倒錯愛のメッセージ」欄を廃止し、読者間の文通、交際はすべて「読者ポスト」欄を通じて行なうことになりました。回送のお手紙の出したい方は左記の規則を守ってください。

※回送する手紙の封筒のオモテに掲載月号と相手の名前をエンピツで記入する。

※回送する手紙には必ず切手を貼る（送料に注意）

「読者ポスト」への投稿をお待ちしています。

編集室ノート

8月号の「旧号読者投稿作品」特集の反響は予想以上で、本号でも昭和三〇年頃の作品を掲載してみた。掲載作品の内容からも推察して頂けると思うが、当時の本誌は既にSMに於ける「精神性の優位」を高らかに謳っており、昨今、巷に溢れるSM商業雑誌とは質的に異なることが判る。勿論、出版も営業であるからには採算を度外視することはできない。

いが、売らんかな、の内容に墮することだけは慎みたい、と自戒の念を強くしている。およそ三〇年前といえば、本誌（旧号）などは、変態雑誌として一般社会からは白眼視され、寄稿家諸氏はあたかも危険思想の持主であるかのように曲解されることもあったであろうが、迫害されればされるほど、その精神性は高揚し、密度の高い作品が生れたものと思われる。なにもかも遊戯化してしまう昨今の風潮の中で、本誌に課せられた使命は極めて重い。

（直接購読のお申込みは、きたん社へ）



新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

（株）きたん社内

現代芸術研究会